



つくばアスリートレストラン (TAR)

T-ACT

つくばアクションプロジェクト

2019年度 活動報告書



盆LIVE2019



なんでも生き物相談所



ハシの日照検プロジェクト



第2回あおぞら絵画遠足
~日本を描きに出かけよう~



【スキークャンフ】
子どもの成長を
白銀の世界で応援しよう!



2019年度 上半期 活動報告会
最優秀賞 ツクライフ!



2020 August TSUKUBA ACTION PROJECT REPORT



筑波大学

University of Tsukuba

目次 -T-ACT 活動報告書-

はしがき

アクション / プラン

WORLDS of WORLDS. (17045A)	1
BLUE ONE BEAT ～可能性を拓げる～ (18025A)	3
つくば ごみばこ ぷろじえくと (18031A)	6
ようこそ、ピアサポートへ！—みんなで助け合えるキャンパスを目指して— (18033A)	8
心の絵本プロジェクト (18037A)	12
人つくば ver.2～人文学系有志発表会～ (18038A)	14
君の詩的センスを魅せつけろ！ (18039A)	16
ふわふわプニカつくば支部 vol.1 屋根崩落一周忌記念大道芸 (18040A)	18
つくばのカルチャータン—異分野セミナー開催と学内科学紙の作成 (18041A)	21
言つくば (18043A)	23
おさんぽ chat ～がんばるを、考える～ (18044A)	25
生つくば (18046A)	29
「ハレ」の日探検プロジェクト (18047A)	31
ツクライブ！ (18048A)	35
ゆうゆうゆう会 (18049A)	38
to be myself—あなたは自分の人生をどんな『ものさし』で測りますか— (18051A)	40
超学生団体新歓—2019— (18053A)	43
盆 LIVE2019 (19001A)	46
育児中の学生達による子ども同伴交流会：Students' BBQ with your kids. (19003A)	49
つくば ごみばこ ぷろじえくと vol.2 (19004A)	52
つくばアスリートレストラン (TAR) (19005A)	54
スポーツに物申す！！～スポーツが絡む問題について考えよう～ (19006A)	56
T-ACT サポーター特別ワークショップ (19007P)	58
TSUKUBAX (19009A)	61
もっと、インプロをやろう！ (19010A)	63
つくばランウェイプロジェクト (19011A)	68
Tsukuba Research Project (19012A)	71
菟玖波現代短歌会 (19013A)	73
あなたの小説が読みたい！ ——第十二回筑波学生文芸賞の作品及び一般選考委員の募集—— (19014A)	76
つくば子育て外国人家族サポートプロジェクト (19015P)	78
BLUE ONE BEAT! 2019 (19017A)	81
第2回あおぞら絵画遠足～日本を描きに出かけよう～ (19018A)	85

Run for Haagen (仮19019A)	88
Bravo! Art (19020A)	91
Higa Coffee 1.0 (19022A).....	93
クロスフィットを通じた新たな仲間との交流！(19023A)	97
TSUKUBAX2 (19024A)	100
なんでも生き物相談所(19026A)	102
書道パフォーマンス(19027A)	105
つくメイク(19030A)	107
Feedal (仮19032A)	109

ボランティア

第13回つくば路 100 km徒歩の旅 2019 (18032V).....	111
一緒にサッカーしよう！(19002V)	114
外国籍子ども校外学習サポート教室(19003V)	115
☆スクールフェロー☆つくばみらい市内の小学校で養護教諭の活動補助ボランティア (19004V).....	117
☆スクールフェロー☆土浦の小学校で養護教諭の活動補助ボランティア(19005V)	118
水戸市チャレンジ・ザ・原始人事業『チャレ原2』(19008V)	119
つくばサイエンスツアー～小学生対象工作実験教室サポートスタッフ～(19009V)	120
第2回霞ヶ浦トライアスロンフェスタ(19011V)	122
6月23日(日)に発達障がい児と遊んでくださる方募集♪(託児見守りボランティア) (19012V).....	123
【子どもと遊ぶボランティア】お休みの日に子どもと関わりながら自分を磨こう！ (19013V).....	125
塾に行きたくても行けない子どもたちのための無料塾(19015V)	127
つくばこどもの青い羽根学習会(子どもの学習支援事業)(19016V)	129
外国人児童・生徒の学習サポート(19019V)	130
子どもと一緒におもいっきり遊ぼう！YMCA ボランティア募集！(19023V)	131
【チャリティーラン】障がいのある人と共に走ろう！(19027V).....	133
☆スクールフェロー☆吾妻中学校で学習支援・部活動指導・養護教諭の 活動補助ボランティア(19028V)	135
【スキーキャンプ】子どもの成長を白銀の世界で応援しよう！(19030V).....	137

2019年度 実施状況報告	140
---------------------	-----

編集後記

※成長度(自分は何のくらい成長できたと感じますか?)と充実度(やりたいことができた充実感はありましたか?)を5段階で自己評価している。

※学生の学年は活動報告書提出時のものである。

はしがき

「つくばアクションプロジェクト」(T-ACT)の『活動報告書(2020年8月発行)』をお届けします。本プロジェクトは、2008年度(平成20年度)に「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」に採択されて以来、学生の自主性と社会性の育成を図ることを目標に活動を続けてきました。2011年度末の学生支援GP終了後は、筑波大学における人間力育成支援事業の一環として継承され、また2013年度にはボランティアの枠が加わり、さらに2014年度にはT-ACT推進室が発足するなど、徐々に体制を整えながら継続してきました。令和2年度(2020年度)の今年は、13年目の活動に入ったことになります。

本報告書には、T-ACTで実施された企画・活動のうち、昨年度に「活動報告書」が提出されたものが掲載されています。そのうち、T-ACTアクションおよびプランの企画が41件、T-ACTボランティアの活動が17件となっています。

文字通り、多種多様な活動が実施されていますが、印象に残ったものとして(あくまで個人的な印象ですが)、「BLUE ONE BEAT」なる企画があります。名前だけではどのような活動なのか見当が付きませんが、BLUEが「青春」、BEATが「胸の高鳴り」を表しているようで、この企画名は「青春時代における胸を高鳴らせるような一つの衝動」の意味合いをもつと説明されています。具体的には、小中高生に自分の将来を深く考える機会を提供したいという活動です。本報告書には、「BLUE ONE BEAT」が2度登場します。1度目は、「BLUE ONE BEAT～可能性を拡げる～」という2018年度の企画で、プランナーとオーガナイザーが小中高生向けのイベントを、つくば市教育委員会の後援を得るなどして準備していましたが、広報がうまく機能せず、予定参加人数を集めることができなかったため、結局イベントは中止になってしまいました。それでも、活動報告書を丁寧に書いて、「目標達成度40%」として提出してくれました。2度目が「BLUE ONE BEAT! 2019」です。これは、「いばらき子ども大学」のK-ACT事業の一環として、小学生高学年対象のワークショップを開催するというものでした。詳しくは、報告書をご覧くださいと思いますが、この企画を行うにあたり、前回のうまくいかなかった経験のため、逡巡する気持ちが強かったようです。しかし、「小学生のSDGs自由研究の発表」などを軸に、小学生に加えてSDGsに興味をもつ市民の参加なども得て、今度はワークショップを開催することができました。交流の最後に、小学生の1人が「今度イベントを作るときは僕も手伝うよ!」と言ってくれたことがことさらに嬉しかったのでしょうか、今回の目標達成度は95%になりました。多分に手前みそのご紹介となり恐縮ではありますが、本報告書には、このような学生の(そして、ほんの少数の教員の)挑戦と苦労の物語がたくさん詰まっています。ぜひご一読ください。

2020年の前半は、新型コロナウイルスの影響でT-ACTの活動も大きく制限を受けることとなりました。T-ACTアクションもT-ACTボランティアもほぼ休止状態です。オンラインを活用して交流やイベントを行うことはある程度可能でしょうが、人との密な接触を控えるという条件は、T-ACTの活動にとってたいへん厳しいものがあります。来年度の活動報告書がどのような内容のものになるか、今のところまったく見えていませんが、「新しい生活様式」の中で活動をどのように作っていくか、T-ACTの新たな可能性を模索する1年になりそうです。

本年度も皆様の変わらぬご支援とご助力をお願いいたします。

2020年8月

T-ACT 推進室長
加賀信広

● WORLDS of WORLDS. (17045A)

T-ACT プランナー 土居 未奈 (情報学群情報メディア創成学類2年)

活動目的

私の友達が作曲活動をしていて、その作った曲をより多くの人に聴いてもらいたいと音楽活動をしている。ただ、youtubeに音楽をあげたり、CDを作ったりするだけではあまりたくさんの人に聴いてもらえないと思っている。なので、何か話題性があり、かつ、自分たちも楽しいと思える、従来にない新しい方法で音楽活動をしたかった。そこで、音楽と何かをコラボした作品を作るという活動をしようという結論になった。それは、音楽と色々なジャンルをコラボさせた作品を作る活動をしている人があまりおらず、話題性があると思ったのと、お互いのファンを共有できる可能性がある。さらに、音楽の表現の幅を広げることでもできると思ったからである。私の所属学類には、マジックがとても上手く、なおかつ、何かマジックを使って新しいことをやってみたいという友達がいたので、その子に声をかけ、まず、音楽×マジックで作品を作ろうと思った。

具体的な活動計画

マジック×音楽の動画を3月中に撮影して、4月頭にyoutubeにアップする。

2月下旬に、マジック、作曲、動画編集ができる人で集まって大まかなイメージを決める。この時マジックは、マジックができる人が、自分の持っている道具で自分ができるマジック、もしくは近いうちに習得する予定のマジックで作品を作るというイメージである。また、作曲は打ち込みで作った音源をそのまま使うか、バンドサウンドよりの曲にする。打ち込みの場合は、作曲ができる人1人でiPadのみでできるし、バンドサウンドになったとしても、楽器ができる友達に、練習してもらい、録音、ミキシングするイメージである。

その話し合いを元に、3月から、作曲ができる人が曲を2週間で作り、その曲を元にマジックができる人が1週間で細かいマジックを決め練習し、その後1週間で撮影と映像編集を行い、4月1日の時点で作品が完成している状態にする。

この間に、マジック、作曲、動画編集ができる人と、全体の管理をする人(私)で、何回か打ち合わせを行う。

なお、マジック、作曲、動画撮影、動画編集、楽器ができる人は、全員あてがあるため、募集しなくても作品を作ることはできるが、様々な人と今後作品を作りたいため、もし興味がある人がいれば、ぜひ一緒に作ってみたい。

予算については、T-ACTから借りるカメラ以外は、自分たちの持ち物を使って作るので、必要な経費はかからない予定である。

活動場所

話し合いをする場所は、基本、大学内の春日エリアにあるクリエイティブメディアラボを使用する予定。もし、何らかのアクシデントで使えない場合は、食堂やご飯屋さんで話し合う予定である。

マジックを練習する場所は、クリエイティブメディアラボもしくは、マジックができる人の自宅で練習する予定であるが、マジックの内容や撮影場所が屋外になった場合は、大学内のどこかしら屋外の場所で練習することになるかもしれない。

作曲をする場所は、クリエイティブメディアラボもしくは、作曲ができる人の家の予定である。

もし、楽器を録音することになった場合は、クリエイティブメディアラボ、もしくは楽器を持っている人の家、近くのカラオケ、スタジオで録音することになると思う。

撮影場所は未定であるが、おそらく大学内を使うだろう。

活動期間

平成30年2月14日～30年4月4日

対象者

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：貴島健斗(情報メディア創成学類2年)、黒田義人(情報科学類2年)

P：西岡貞一(図書館情報メディア系)

活動報告

実際の活動内容

マジックと音楽をコラボさせた作品を作るため、具体的にどんな作品にするかを話し合い、マジックの動画と

音楽を撮り、それらを編集した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒50%

実施中の困難と解決策

○実施中に困ったこと

計画通りに物事が進まないこと。

○解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

できるだけ参加者の話し合いを増やし、日程のことを呼びかけたが、あまり解決できなかった。

活動の体験について

○自分にとってどんな体験であったか

外部とのやり取りや内部のタイムマネージャーを通して、みんなに予定通りに動いてもらうことの大変さを学んだ。

○参加者への影響

外部の人を巻き込むことで責任感が少し増した。

○未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

もっと積極的に t-act の先生に頼ってみよう。

○T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

外部とのやり取りの方法を学んだのと、学生団体の立ち上げというものを少し分かった気がする。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒3

● BLUE ONE BEAT ～可能性を広げる～ (18025A)

T-ACT プランナー 村上 達哉 (人文学類2年)

活動目的

○動機

小学校や中学校、高校では自分や自分の将来を深く考える機会が少ないと感じ、そのような機会を小中高生に提供したいと考えた。さらに、学校や年齢が異なる多様な人々の考えに触れることで将来に対して多角的視野を持ってより深く考えることが出来るのではないだろうかと考えた。私自身、小中高生の時に、多様な人々に出会う機会がもっとあればよいと考えていたため、小中高生が多様な人々と意見を交え自分の考えを深めることが出来るような学びの場を作りたいと考えた。

○目標

1. 小中高生にグループワークやディスカッションを通して自己や他者を知ってもらおうとともに自分の将来に対して深く考えてもらうこと。
2. 自分にとって身近な存在の考えに触れることで、次の段階に対するより具体的で鮮明なイメージを持ってもらうこと。

○企画名について

BLUE ONE BEAT のBLUEは「青春」を表し、企画名は「青春時代における胸を高鳴らせるような一つの衝動」の意味合いを持つ。この活動が青春時代を過ごす学生にとって、将来の可能性を広げる一つの端緒になることや、学生だけではなく活動を運営する我々もワクワクするような学びの場を作りたいということを考えてこの企画名にした。

具体的な活動計画

○内容

- ・筑波大学の教室を借りて活動する。
- ・対象は小学校高学年～高校生。
- ・個人ワークとグループワーク（大体5人1組）をしてもらう。グループワークでは運営側の大学生がファシリテーターとして参加する。
- ・120分を予定している。（アイスブレイク30分、ワーク60分、休憩10分、まとめ20分）
- ・ワークは以下の三点を扱う。
 - ①自分が次の段階に対して抱いている興味や不安を書き出す
 - ②現状や考えをグループで発表する
 - ③現在何をやるべきかを書き出し、グループで発表する
- ・運営にかかわる学生は活動の準備のために週一でMTを行う。

○スケジュール

- 10月 企画作成、ピラ作成、後援を得るための準備
- 11月 つくば市教育委員会に後援を申し込む、各学校に宣伝
- 12月 各学校に宣伝
- 1月 プレ授業
- 2月 本番

○活動日時

2018年2月23日（土） 午前10時～12時

○広報

つくば駅周辺の学校（吾妻小学校、吾妻中学校等）の先生方に連絡し宣伝をしに行く。また、教育支援のサークルに入っているため、その活動の中で学校（桜中学校、竜ヶ崎第一高等学校）の先生方に宣伝する。

活動場所

筑波大学の教室

活動期間

2018/10/01～2019/03/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：安藤萌華（人文学類2年）、高松柚子（日本語・日本文化学類2年）、直井蒼太（教育学類2年）、西村大祐（人文学類2年）

P：長田友紀（人間系）

備考

○備品

基本的にはプロジェクターを用いて活動するため、プロジェクターをT-ACTから借りる必要がある。用紙は一回の活動につき50枚を予定している。

○予算

運営者側負担。筑波大学の教室を借りるため、基本的には施設費はかからない。

活動報告**実際の活動内容**

《10月～12月イベント内容を考える /1月つくば市教育委員会から後援をいただく、広報活動 /2月イベント準備、広報活動、イベント中止》

- ・週一回ミーティングを行い、イベント内容と広報について話し合う。
- ・企画班と広報班に分かれ、役割を分担する。
- ・広報活動では、つくば市の児童館、市民活動センター、吾妻交流センター、Bivi 筑波大学サテライトオフィスなどに赴き、チラシを置かせていただく。また、つくば市教育委員会から後援をいただく。
- ・イベント参加申込者が最低人数として設定していた4人に満たなかったので2/23（土）に予定していたイベントの中止を決定する。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒40%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

- ・イベント企画：イベントの対象者が小5～高校生であること。発達段階が異なる参加者に満足してもらえる内容を考えることが難しかった。
- ・広報：学校への広報。先生からのご協力をいただくことが大変であると感じた。
- ・運営：役割分担。負担が偏重しないかということを気にかけた。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・イベント企画：イベントのタイムラインと内容を明確にして、また、リハーサルを繰り返すことで、だれにとってもわかりやすく、参加しやすい内容にした。ワークシートの文面を小学生と中学生で変えるなどの工夫をした。向こう3年間のキャリアデザインというテーマ設定にすることで小中高生（ファシリテーターとして大学生も参加）がディスカッションに参加しやすいようにした。
- ・広報：つくば市の教育委員会から後援をいただき、学校広報をより円滑にしようとした。（しかし、入試時期ということもあり連絡はつながらなかった。→学校広報をする際は電話。また、あらかじめ先生とつながりがある方がよい。）
- ・運営：企画班と広報班に分けた。（進捗、情報の共有が大切であると感じた。）

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

「可能性を拓げる」というテーマで企画を考え、小中高生を対象としたイベントを作った。「可能性を拓げる」対象は、①小中高生②運営メンバー③自分自身を考えていた。①の小中高生はイベント自体を中止にしたので目標達成には至らないと考える。②の運営メンバーは彼らではないのでわからないが、活動全体の反省会で全員がこの活動に対する良かった点や改善できる点をしっかり述べていたことが印象的であった。③の僕自身はこの活動をして可能性を拓げることが出来たと感じている。つくば市の教育委員から後援をいただいたり、この企画の話をするとう応援して下さる社会人の方や友人がいたことはうれしかったし、励みになった。一方、活動をうまく進められていないときや広報の活動が報われなかったときはかなり落ち込んだ。イベントは結局開催することができず、結果的には「失敗」になってしまったが、そのような「失敗」も含めて「挑戦」できた経験は今後活かすことが出来ると考えている。

参加者への影響

一緒に運営してくれた仲間には助けてもらってばかりであったので感謝しかない。彼ら自身ではないのでどう

思って、どのような変化があったのかはわからないが、活動を始めた当初と活動の後半を比較したら、自分の意見をはっきり伝えてくるようになった印象がある。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

この活動の期間中に、知り合いの社会の方が「アリーナに立て！」と仰っていました。挑戦しないとわからないこともあると思いますし、挑戦することで得られることは多いと思います。チャンスは常に自分の中にあるということを頭の片隅において、ぜひアリーナに立ってください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT フォーラムの皆さんに温かく見守っていただけたことに感謝が尽きません。ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3

つくばごみばこぷろじえくと (18031A)

T-ACT プランナー 松井 美夕琳 (人文学類2年)

活動目的

弱視歩行体験をした際に、現在学内に設置されているゴミ箱に使いにくさを感じる人がいることを知ったことがきっかけとなり、誰にでも使いやすく、親しまれるゴミ箱とはどのようなものか考えるようになりました。ペットボトル用のゴミ箱にはペットボトル型、カン用のゴミ箱にはカン型、というような、“ゴミの形をしたゴミ箱”をコンセプトに実際にペットボトル、空き缶、ビン用計3種のゴミ箱を制作したいと考えております。色覚以上や弱視であってもわかりやすく、また文字が読めなくても何のゴミ箱か判別しやすく、高さなどを調節すれば子供や車椅子の方にも使いやすいものができるのではないかと考えました。このようなユニバーサルデザインのゴミ箱を実際制作、学内に試験的に設置し、ご意見をいただいて改良したものを学内に常時設置させていただくことが最終目標です。活動を通し、ダイバーシティについて考える機会をつくりたいと考えております。

具体的な活動計画

2018年度秋学期を予定しています。10~12月にかけて月2回火曜1限にミーティングをし、3ヶ月を通してデザインや設置場所の検討、資金の調達を行い、12月中に材料の購入、施設利用の許可をいただき、1月に制作、設置をする予定です。1ヶ月ほど試験的に設置させていただき、設置から2週間を目安にGoogleフォームを利用して各学群、学類のlineなどに流してご意見をいただきたいと考えております。その後、できうる限りの改良をし、常時設置許可を学期末までにとりたいと考えています。

準備段階では、原則毎月第2,4火曜日の1時限、月2回のミーティングにおいて、初回のミーティングでの班分けを元に

- ・資金調達の方法
- ・デザインの詳細
- ・材料
- ・制作の仕方
- ・利用する施設
- ・設置場所
- ・細かい日程

などの中からそれぞれの班の分担を決定し、それぞれの項目に関する詳細の決定、或いは必要に応じての連絡や手配を班毎に進めるようにし、ミーティングで報告、話し合いをするという形で進めます。

ゴミ箱の製作については、学内で教室等をお借りし、1/14(月)の1日で設置まで終わらせたいと考えております。また、レーザーカットを要する部分に関しては事前に創房にて加工をしたいと考えております。ゴミ箱本体にファイバードラム缶、その他の部位はアクリルを中心に制作します。塗料はアクリルを用い、ある程度の耐水性を持たせたいと考えております。

また、設置場所に関しては

- ・中央図書館
- ・第3エリア
- ・学生控え室

を検討しております。

制作に入る前に設置許可をいただこうと考えております。

資金に関しては助成金を利用する予定です。

- ・ハウジングアンドコミュニティ財団
- ・信頼資本財団
- ・冠婚葬祭文化復興財団
- ・一般財団法人 大竹財団

による助成金を候補としてと考えております。

活動場所

筑波大学構内 (T-ACT フォーラム) (創房) (教室)

活動期間

2018/10/01~2019/03/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：三嶋遥菜（日本語・日本文化学類2年）、瀬邊風馬（日本語・日本文化学類2年）、濱田瑠風（比較文化学類2年）、中島ももか（人文学類2年）、藤元うさ（人文学類2年）、河原井かれん（芸術専門学群2年）、高橋香澄（人文学類2年）

P：小山慎一（芸術系）

活動報告**実際の活動内容**

ミーティングでのごみばこ及びロゴのデザイン決定、設置場所の検討、助成金団体への申請等

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒50%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

資金調達に思いの外手間取ったこと

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

役割分担するなどして円滑化を図った

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

完遂はできなかったものの、個人の興味に基づいた活動を T-ACT として行えたこと、財団或いはオーガナイザーを中心とする学生から支持をいただけたことは非常にありがたいことだと感じた。

参加者への影響

元々はプランナー一人の思い付きでしかない活動だったが、積極的に活動に参加してくれたし、その中でテーマについて考えてもらえたのではないかと感じる。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

教職員も学生も一緒に頑張ってくれます。ささいなことだと思っても、まずは T-ACT 推進室へ是非足を運んでください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

専任教員中心に様々なサポートをしていただけた点は非常に助かったし、学生だけではできないことをできる場であると感じた。しかしながら、T-ACT を知らない筑波大生もまだまだ多いのが実情であるので、折角の場を生かせるよう、全学にその存在を知らせることが必要だと感じる。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● ようこそ、ピアサポートへ！—みんなで助け合えるキャンパスを目指して— (18033A)

T-ACT プランナー 常盤 みなみ (心理学類2年)

活動目的

ピアサポートとは、学生同士の相互援助活動のことです。

「悩みはあるけどたいしたことないし…」 「困ってはいるけど、学生相談室に行くほどじゃないなあ…」 と、学生生活で悩みを抱えていても、相談機関を利用しにくいと感じている学生は少なくないのではないのでしょうか。

そういった方に、もっと気軽な同じ学生に相談できる場を提供するピアサポート活動は、他の多くの大学では制度として確立し、実施されています。

そういったピアサポート制度を本学にも導入することを目的として、前回の活動では、ピアサポート相談ポストの運営を引き続き行いました。また、人の輪を楽しくつなげる企画の第一歩として、ドッジボール大会も開催しました。

今回の活動では、引き続きピアサポート相談ポストを運営していくとともに、本学の実情に即した新たなピアサポート活動や、ピアサポーター制度についての検討、可能なところから活動の実施を目指します。そして、学生の輪を広げるための新しい企画の実施も目指します。

具体的な活動計画

基本的な活動としては、ピアサポート相談ポストの運営と、今後のピアサポート活動についての話し合いを行います。そして、可能なところから実際の活動や新しい企画を行っていきます。

具体的には、以下のような活動を行います。

1. 定期的なミーティング (1～2週間に1回程度の会合)
2. ピアサポート相談ポストの運営 (用紙の回収、おへんじ、掲示)
3. つぶやきノートの運用

つぶやきノートとは、学生对ピアサポートチームだけではなく、学生对学生の交流を図るために導入したいと考えているものです。設置場所はつぶやきポストと同じスペースです。

以前から、以前掲示したおへんじに対して別の方から意見や感想を頂くことがありました。しかし、時間が経ってしまったもの場合はどのつぶやきなのか特定することが難しく、特定できた場合もバックナンバーに載せきれないことが多くありました。

そこで、このつぶやきノートを試験的に導入することを決めました。ノートにすることで、書き込みの隣に自分のメッセージを書くことができます。また、そこから色々な意見が広がり、文章を通した学生の交流が豊かなものになると思います。加えて、「つぶやきポストに投函するほどじゃないけれど、ノートなら書いてみようかな」というように、ちょっとしたきっかけでピアサポートの活動について知ってもらえることが出来ると考えます。従って、ノートの表紙には「かきたいことを自由にかいてください」と記載してあります。イラストや宣伝したいことなど、つぶやきポストには無かったジャンルを問わない書き込みが期待できます。

しかし、一方で懸念されることもあります。それは誹謗中傷や不適切な書き込みされる可能性についてです。ピアサポートチームでは発足当時からつぶやきノートの導入について検討されていましたが、上記の理由からなかなか踏み切ることができませんでした。従って今回は、どのような書き込みがされるか調べるための試験運転となっています。表紙には「誹謗中傷や不適切な書き込みはお控えください」と最低限のルールのみ記載しました。試験運転後、どのような書き込みがされたかを調べ、今後の活動計画を立てていきたいと考えています。

※誹謗中傷・自傷他害など重大な問題、学生でまかなえないような相談が書き込まれていた場合の対処についてですが、相談ポストには「筑波大学ピアサポートチーム」が運営していることを明記しています。

そうした、専門家ではない学生が運営していると分かった上でなお投函されたものであるならば、それは専門家ではなく同じ立場である学生に答えてほしいからこそ投函されたものであると思います。

もちろん、まずはパートナーの先生方に対して相談し、ご意見をいただきますが、その上でオーガナイザー複数人で相談し、できるだけ誠実によく考えておへんじを書きたいと考えています。

また、何通もそういった重大な問題について投函があるようでしたら重大な問題についてはポストに投函せず、保健管理センターなどへの相談を勧めるなど注意書きを書くことなど、制限やルール決めをしようと考えています。

なお、10か月相談ポストを運営し続けた現在、慎重におへんじをすべきと判断したつぶやきについては、一度パートナーの先生に相談することにしていきます。そして今までは、学生側で対応すると相談の結果決めていました。学生で対応すると決めた際は、おへんじに時間を欲しいことを掲示したうえで、それぞれメンバーがおへんじを書き、まとめてから掲示をしました。

活動場所

保健管理センターグループワーク室

活動期間

2018/09/01～2019/02/28

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：佐藤ひかり（人間総合科学研究科博士前期課程1年）、本多茉莉（人間総合科学研究科博士前期課程1年）、王東皓（システム情報工学研究科博士前期課程1年）、櫻井菜月（芸術専門学群3年）、森田美咲（心理学類3年）、尾崎楓子（心理学類2年）、江崎友磨（心理学類2年）、戸田夕月（心理学類2年）、三井鴻志郎（心理学類2年）、山近紗也加（心理学類2年）

P：杉江征（人間系）、田中崇恵（人間系）、田附あえか（人間系）、慶野遥香（人間系）

備考

必要な経費については、パートナーと相談して工面する。

活動報告

実際の活動内容

1. 定期的なミーティング（1～2週間に1回程度）

つぶやきポストの運営や他大学との交流会についてなど、具体的な活動内容を話し合いました。ミーティング後は議事録を共有し、意見や次回の議題を募りました。

2. ピアサポートつぶやきポスト（相談ポスト）の運営（用紙の回収、おへんじ、掲示）

2週間に1度、皆さまから頂いたつぶやきに対するおへんじを書き、掲示しました。つぶやきポストの運営に対するご意見は「ご意見カード」を用意し、頂いたものを参考に活動を進めました。また、頂いたご意見の中に「今までのつぶやきを見たい」というお声があったことから、バックナンバーを作成し公開しました。

3. つぶやきノート の運用

以前からひとつのつぶやきに対して、投稿者やピアサポーター以外の方からご意見を頂くことができました。そこで、「学生対ピアサポーター」だけでなく、「学生対学生」の交流の場を設けたいという思いから、つぶやきポストと同じ場所に1冊のノートを設置しました。

私たちはこれを「つぶやきノート」と名付け、学生が文章や絵を用いて自由に意見交換ができるようにしました（誹謗中傷や不適切な書き込みへの注意事項を表紙に記載してあります）。今現在は書き込みが少ないため、試験運転期間ということで運営をしています。今後書き込みの量が増えてきた時に、改めて改善策や新しいルールについて話し合いを設けます。

4. 他大学との交流会

スカイプを用いた活動紹介や、実際に見学に来ていただいた他大学のピアサポーターの方々と意見交換を行いました。

5. ぴあのわへの参加

年に1度、日本全国のピアサポート制度を導入している大学が集まり、情報交換をする「ぴあのわ」というイベントがあります。今年は3月上旬に北海道大学で開催が予定されており、筑波大学ピアサポートチームも参加します。

6. その他の広報活動

T-ACTの新歓やラジオ、パートナーの先生方の講演会など、様々な場所でピアサポートについて紹介することができました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒70%



実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

① つぶやきノートの運営について

以前からノートの導入についてはチーム内で検討されていました。しかし誹謗中傷の書き込みがされた場合の対処方法や、倫理的配慮の問題に関する意見が分かれ、導入が見送られていました。その間にもつぶやきやご意見カードで「つぶやきに対するつぶやき」が寄せられ、またサポーターも「おへんじをより豊かにするために、自分たち以外の幅広い意見が欲しい」という気持ちが高まってきていました。

② ピアサポーターの人数

つぶやきポスト以外の新しい試みをしようと検討中ですが、人手が足りず動き出せない状態にあります。おへんじ書きも毎回全員が集まれるわけではないため、意見が集まらず行き詰ってしまうことがあります。他大学に比べ筑波大学のピアサポーターの人数は極めて少ないです。また、心理学類の学生が中心であるため、他学類の学生の質問（例えば、線形代数がわからないなど）に答えることが難しいという問題もあります。より多くの、そしてより広い分野の学生にピアサポーターとして力を貸してほしいです。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

① T-ACTの方と相談をし、試験運転という形で期間を決めて設置することになりました。書き込みの傾向や頻度など、実際に設置してみて初めてわかることもありました。現時点で、誹謗中傷の不適切な書き込みは見受けられませんでした。それどころか他大学の学生さんやオープンキャンパスに来た高校生など、筑波大学以外の方からもメッセージを頂いています。大学内外の多くの人との交流の場としてこれからも運営できればと考えています。

② 現在も解決を試みています。案としては、入学直後のガイダンスや授業内で宣伝をさせていただいたり、講演会やワークショップなどピアサポートについて知ってもらえるようなイベントを計画するなど様々なアイデアがあります。今後もサポーターやT-ACTの方の力を借りながら検討していきたいと思っています。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

一番の大きな変化は、言葉選びです。例えば、今まで悲しい感情を表すときに「悲しい」しか書くことができなかったのが、「胸が張り裂けそうだ」「しくしく」「何も手につかない」など、様々な表現を用いることができるようになりました。これは、つぶやきを投函してくださった方の気持ちを考えているうちに自然とできるようになったことです。数ある言葉の中で、どの言葉が投稿者の方の気持ちに近いのか悩むとともに、自分の語彙が増えました。多くの言葉を扱えるということは、それだけ相手の気持ちにあった言葉を選ぶことができるということです。活動を通して、自分以外のサポーターのおへんじから学ぶことも非常に多くありました。今後も勉強は終わることなく続いていくと思います。

一方、活動日の日程調査などつい後回しにしてしまう仕事もありました。これから活動を続けていく上で良くないことだと思うので、改善していきたいです。

参加者への影響

オーガナイザーから頂いた意見を紹介します。

- ・人の声や心に寄り添おうとすることや理解しようとするとは、いくら努力しても終わりの見えないことだと知った。
- ・他人の声に答える形であるけれども、自分の意見を固める機会を得ることができ、それを周囲の人に示し認めてもらえることで自信につながった。
- ・良くも悪くも自分の能力の限界を知ることができた。
- ・サポーター同士でも、お互いの言葉の使い方や考え方など勉強になることがたくさんあり、良い刺激だった。
- ・ご意見カードで自分の書いたおへんじに対する感謝の言葉を頂いて、とても励みになった。
- ・活動を通してピアサポーター同士の仲が深まった。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

「自分のしたいことをする」「新しいことを始める」、その裏にはたくさんの苦労があることを知りました。先生方と何回もメールのやり取りをしたり、活動日の日程調整をしたり…地味に見える仕事でも、活動を続けていく上でおろそかにできないものです。T-ACTの企画は自分ひとりで運営してはなりません。多くの人に支えられているという自覚をもって活動してほしいです。

また、自分ひとりの活動ではないということは、プランナーであるあなたが壁にぶつかった時に、一緒に乗り越えてくれる仲間がいるということでもあります。みんなで作るT-ACT、上手くいかない時は自分だけで抱え込まずに、オーガナイザーやパートナー、スタッフの皆さんに相談しましょう。必ず力になってくれます。

悩んだ分だけ企画は良いものになると私は信じています。一緒に頑張ってください！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

- ・困った時にすぐ頼れる場所があることの安心感は非常に大きかったです。企画に対してふわっとしたイメージしか持っていなくても、T-ACT の方は親身に話を聞いてくださいました。話し終わるころには企画が現実味を帯びて、はっきりと形の見えるものになっていました。多くのアドバイスを受け、自分たちの企画を客観的に見ることができました。
- ・新歓の際、他の T-ACT 企画の方とお話させていただく機会がありました。自分たちの活動に取り入れたいかなるような新しい刺激をたくさんいただくことができました。同じ志を持つ者同士で語り合える場所があることは非常に良いと思います。いつか他企画とコラボレーションしてみるのも面白いなと思いました。
- ・いつも応援して下さるのが励みになっています。Twitter のおへんじ更新情報を毎回リツイートしてくださっているのも嬉しいです。今後ともよろしく願いいたします。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



●心の絵本プロジェクト (18037A)

T-ACT プランナー 森田 美咲 (心理学類4年)

活動目的

人は誰でも多かれ少なかれストレスを感じており、特に大学生は学業やサークル、進路、人間関係など日常生活において悩むことがあると思います。それらストレスと上手くつき合う方法や困難に出会った時の考え方など「心・メンタルヘルス」をテーマにした絵本冊子を作成し、大学構内での配布等、身近にいる必要としている人の手に本を届けたいと思っています。絵本冊子の具体的な内容についてはこれから話し合っていく予定です。

具体的な活動計画

◇発行スケジュール

- 10月 本の内容についての話し合い
(現在のメンタルヘルスに関する問題の話し合い、対象者・メッセージ・ストーリー決め)
- 11月 内容の確認・ストーリーラインの仮完成 (臨床心理に携わっている先生方の意見を仰ぐ)
- 12月 ストーリーラインの修正
イラストを描き始める
- 1月 ストーリーライン・イラストの修正、確定 (再度、先生方のアドバイスを仰ぐ)
- 1月末 絵本の下書き完成
- 2月 印刷業者へ入稿・印刷
- 2月末 絵本の発行・配布

◇発行部数：30-50部

活動場所

筑波大学構内0
主に中央図書館セミナー室、2学エリア

活動期間

2018/10/20~2019/03/29

対象

学生

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O：佐久田嶺子 (心理学類4年)、桜井絢音 (心理学類4年)、平野真理 (心理学類4年)
P：杉江征 (人間系)

活動報告

実際の活動内容

- 10~12月 本の内容についての話し合い
(現在のメンタルヘルスに関する問題の話し合い、対象者・メッセージ・ストーリー決め)
- 1月 内容の確認・ストーリーラインの仮完成
(臨床心理に携わっている先生の意見を仰ぐ)
- 2月 ストーリーラインの修正
イラストを描き始める
- 3月 下書き完成

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか? ⇒50%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

メンバー全員が集まれる機会が少なく、オンライン上でやりとりを行うことが多かったため、意思の疎通やモチベーション維持に困難を感じた。

ビジネスライク(?)な関係を作る点においても、もっと上手く出来たと感じる。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

メンバー全員が集まれる僅かな機会を大切に、その場でストーリー作成を進めたり、メ切や進捗を共有したりした。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

もともと仲良しのメンバーで始めたこともあり、言いたいこと（メ切に関してや、ネガティブなこと）を伝える点に課題を感じた。

各メンバーと1対1の関係はあったため、その人が得なこと、やりたいことを会話の中から探して、活動に上手くつなげられると良かった。今回の活動を通して、メンバーのいつもとは違う側面をみることができたり、新しい価値観を見つけることができたのは大きかった。

参加者への影響

オンライン上でのやりとりはそんなに活発ではなかったものの、集まってストーリーを進める際には意見をを出してくれ、4人全員で創作的な活動をできたと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

やりたいことをやる！

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

サポーターさんに話を聞いてもらい、アドバイスをいただいたこと。

また、今回は利用しなかったが、サポーターさんから本活動に関する人的資源をいただいたこと。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒2



● 人つくば ver.2～人文学系有志発表会～ (18038A)

T-ACT プランナー 片山 千波 (人文学類3年)

活動目的

＜コンセプト＞

- ・自分の取り組む学問の「好き！」や「不思議」を共有する場の提供
- ・ハイレベルな研究から、日常の素朴な疑問までを共有できる場を目指して活動
- ・学類内や、特定の枠組みにとらわれないコミュニティ作り
- ・自分の学問体制ではなかなか思いつかない発想法や、着眼点を見つける

＜目標＞

- ・4月25日～10月25日で実施した T-ACT 企画『人つくば～人文学系有志発表会～』では、人文社会系の学生を運営・対象の軸に据え活動を進めたが、より範囲を広げた25学類・専門学群の学生が自分の研究や興味を共有できるコンテンツ形成を目標とする

具体的な活動計画

- ・専攻ごとに分かれた専門性の高い個別の発表会の運営（各専攻の発表会の時期が被らないように、企画承認後からおよそ一か月ごとの周期で開催したい）

◎発表会の形式について

発表制限時間のなかで各発表者が自分の専門分野についてまとめてきた内容について発表する。制限時間内であれば、自分の原稿の研究発表でも自分の研究対象の魅力の紹介でも可。という形式。

◎参加者・登壇者の区別について

登壇者を筑波大学生まで枠を広げ、専攻外・他学類でも来場しやすいような雰囲気づくりをする予定。

＜実施日（仮）＞

- 11月11日 『第三回哲つくば』
- 1月13日 『第三回歴つくば』
- 4月6日13:00～ 『第四回哲つくば』 @共同利用棟 A101
- 4月7日13:00～ 『第四回歴つくば』 @共同利用棟 A101

活動場所

共同利用棟 A101、1C210、310等

活動期間

2018/10/26～2019/04/26

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：岩瀬冴衣（人文学類4年）、丸小野壮太（人文学類3年）

P：土井裕人（人文社会系）

備考

- ・予定希望人数・最低必要人数は一回ごとに集まる人数を想定
- ・活動日時については主に休日から選択し、終了時間に関しても学生の負担にならないよう考慮する。

活動報告

実際の活動内容

「哲つくば」及び「歴つくば」の実施。

11月11日13:00～『第三回哲つくば』

1月13日13:00～『第三回歴つくば』

それぞれ開催が大学祭に近い、成人式週であったため集客に不安があったが、多くの学生に参加いただいた。

第三回開催に際して、「歴つくば」は運営の引継ぎも行い、今後の活動も視野に入れた活動ができた。

4月6日13:00～『第四回哲つくば』 @共同利用棟 A101

4月7日13:00-『第四回歴つくば』@共同利用棟 A101

昨年度同様、履修確定前に1年生と交流を持つ目的も含め、第四回開催を連日で行った。

学類側の案内に宣伝を同封したため新一年生にも計20名ほど参加していただいた。

新一年生から四年生までが一堂に会して開催できたことに意義があると思う。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

回数を重ねれば重ねるほど「マンネリ化」の問題が生じる。またほかの類似団体とどれだけ差別化を図れるかが今回の期間中の一番の問題であった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

企画運営をするうえで、自己のアイデンティティや得意、不得意分野を洗い出す必要があった。他の人がやっていない事をもっとできればよかったが、あまり達成することができなかった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自分の団体の活動におけるウィークポイントと強みがどこであるかという分析や、その問題をどのように処理するかということをかんがえることが今後の自分にとっていい経験になったと考える。

参加者への影響

第4回歴つくばでは、新一年生を視野に入れた活動を行ったが、新一年生に対する影響と同じかそれ以上に新二年生に対する影響が見られた。昨年度の第一回に参加した二年生が第四回に参加して「昨年参加してなければ、こんな発表・研究はやりたいたと思わなかったしできなかっただろう」という旨の感想をもらった。新1年生に喜んで楽しんでもらえる以上に、このように継続することで言葉をかけてもらえるとは思わなかったので、2年生の成長には目を見張るものがあった。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

仕事の分散、背負いすぎない事。これが一番大切であると思う。一人が倒れると瓦解するシステム構築は欠陥である。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

私の努力不足と企画の性質上、T-act推進室の先生方や設備をうまく活用・連携を図ることができなかったが「何かあったときに頼ることができる」という安心感があるだけで、運営を円滑に行うことができた。あまりT-act推進室にも伺うことができない私にも温かく対応してくださる推進室の先生方が心の支えになっていた点がよかったと思う点として大きい。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒4

● 君の詩的センスを魅せつけろ！ (18039A)

T-ACT プランナー 竹下 太崇 (日本語・日本文化学類2年)

活動目的

自分の気持ちを素直に表現できる短歌で日常で感じた自分なりの考え、メッセージを様々な人に伝えたい。短歌制作を通して、今まで気が付かなかった発見ができたり、美的感性を磨くことに繋がると思う。また、自分の短歌について他の人々と批評し合いをすることで、日常の物事に対する新たな見方が生まれるのではないかなと思うから。

加えて、短歌は古典的で、堅苦しく腐れてしまっているという偏見があるように感じる。そのような偏見を取り除き、現代の素直で、形式にとらわれない、新しい、人々が共感できるような短歌があることを知ってほしいため。

最終的な目標は、短歌のサークルを作ること。定期的に歌会を行いたい。

具体的な活動計画

短歌サークルを作るために学内において月に一度、短歌会を行う。

11月から4月まで SNS や学内にて広報

12月、15人程度でのメンバーによるデモンストレーション

1月、デモンストレーションの反省。また、歌会に向けての準備。可能であれば、外部も混ぜたデモンストレーションを行う。

2月、第一回歌会。第一回歌会の反省会

3月、第二回歌会。第二回歌会の反省会。サークル申請。

4月、第三回歌会。第三回歌会の反省会。

歌会の内容について。

1. SNS やメールをつかい事前に自由詠、テーマ詠をそれぞれ2、3首あつめる。回収する歌は未発表の歌とする
2. 歌会当日に歌だけが書かれた紙を配り、そのなかから好きな歌を1人2つ選ぶ。
3. 選ばれた数が多い歌から批評していく。
4. 最後に歌の作者を発表し、一番多く選ばれた歌の作者を表彰する。一回の歌会の人数は15人程度と考えています。

時間帯は土曜日から日曜日の午後から2時間程度と考えています。これだけでは、マンネリ化し、人が集まらない可能性がある。

そのため、短歌を作り方を皆と学ぶ会や、短歌の楽しさ、自由さを知ってもらう会、また上位の歌を筑波大学の新聞に載せる、一般の短歌コンクールへの応募など、もっと人々の興味をひく企画をしていきたいと思っています。

具体的な内容についてはこれからメンバーと考えて行きたいとおもっています。

活動場所

学内ならどこでも可能。

活動期間

2018/11/19~2019/05/18

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：藤谷佳輝 (日本語・日本文化学類2年)、瀬邊風馬 (日本語・日本文化学類2年)、岡迪瑠 (日本語・日本文化学類2年)、坂本茉優 (日本語・日本文化学類2年)、山梨歩果 (日本語・日本文化学類2年)、鈴木楨 (日本語・日本文化学類2年)、奥智佳 (日本語・日本文化学類2年)、小川竜駆 (日本語・日本文化学類1年)、立石すみれ (日本語・日本文化学類1年)、巖村魁斗 (人文学類2年)

P：清登典子 (人文社会系)

活動報告

実際の活動内容

二か月に一度、短歌会を開催する。

短歌会を開催するために週に一度、メンバーと集まりミーティングを行った。また、SNS 特に Twitter にて自作の短歌の投稿、短歌の批評などを行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒75%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ・ 広報不足や短歌の敷居の高さにより参加者が集まらなかった。
- ・ 運営側が他の活動で参加が厳しい状況が続いた。
- ・ 何をすべきか想定できず、計画を立てることが出来なかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・ 大きなポスター貼った。
- ・ SNS などで広報の幅を広げた。
- ・ 新入生に入会を促した。
- ・ 見学者の参加を許可した。
- ・ 何度もミーティングを行ったり、予行演習を行い日々短歌会のありかたを改善した。
- ・ 明確に仕事を分担した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

- ・ 短歌について改めて魅力を見いだせることができた。
- ・ 日本の古典を五感で感じる事が出来た。
- ・ あらかじめ予定を綿密にたてる事が出来るようになった。
- ・ 運営の能力を身につける事が出来た。
- ・ これまで接点のなかった人との接点ができ、短歌意欲がさらに刺激された。

参加者への影響

- ・ 司会進行やポスター作製などの事務能力が向上した。
- ・ 短歌が楽しいものだと知り、自作の短歌を投稿するようになった。
- ・ google form の使い方を覚えた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

綿密な計画と余裕を持って行動すること。そして広報をし続けることが大切です。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

・ ポスターの作成、印刷、掲示を非常に行うことができました。ありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● ふわふらぶニカつくば支部 vol.1 屋根崩落一周忌記念大道芸 (18040A)

T-ACT プランナー 長部 世理菜 (比較文化学類3年)

活動目的

単発式のアートユニットとして「ふわふらぶニカつくば支部」を立ち上げ、第 I エリア BC 棟間廊下でストリートパフォーマンスを行いたい。

(ふわふらぶニカとは、企画申請者の長部が大学入学以前から主宰しているアートユニット。パフォーマンスの内容だけでなく、それが開催された場所や時期・時間までもが物語の文脈として意味を持つような、「『そのときその場でしか起こり得ないもの』をつくる」ことをコンセプトにしている。東京を拠点に演劇の公演を行っていたが、主宰者が筑波大学に入学したことで活動を休止していた。今回、前述と同様のコンセプトでイベントを企画するため「ふわふらぶニカ」の名前を使用したい。)

筑波大学の施設や環境を活かした演劇を普及させ、学部棟の教室に留まる傾向がある現在の筑波大学学生演劇に新しい波を起こしたい。本企画はそのスタート地点である。

また、このような企画を行うことで、演劇とはなにかパフォーマンスとはなにか、非日常とは何か、を参加者全員が考え感じる機会としたい。

具体的な活動計画

◎企画概要

日時：12月10日(月) 19:30~20:00

内容：ライブパフォーマンス(歌とダンス)、朗読、お祈り

場所：第 I エリア B 棟—C 棟間屋外廊下奥の C 棟側の空間(以下、便宜的に「舞台」と記す)舞台の B 棟側を出演者の演技空間、その手前(C 棟側)を観客の立ち止まるところとする。

基本的に客席は設置しない。

すべてのパフォーマンスは原則的に舞台のなかで完結させ、それより外(つまり廊下の通行部分)には出ない。

内容詳細：

①ライブパフォーマンス(使用道具：コンデンサーマイク)

出演者(1人)が舞台にたち、マイクを手にアカペラで歌を歌いながら踊るパフォーマンスをする。(5分程度)

②朗読(使用道具：朗読用台本)

出演者(1人)が舞台にたち、短い朗読を(10分程度)

③お祈り(使用道具：造花、バケツ)

観客参加可能パフォーマンス。出演者は造花を手に持ち、墨汁の入ったバケツにそれを突っ込み、お祈りをする。スタッフが観客を促し同様の行為をさせる(強制ではない)。念のためバケツの下にブルーシートを、必要に応じて敷く。

◎使用道具類について

以下のものを使用予定。基本的には私物を使用する。

- ・コンデンサーマイク(※スピーカーに接続せずに使用する)×1
- ・アイドルらしい衣装×1
- ・朗読用台本×1
- ・造花(要購入)×10
- ・バケツ(要購入)×1
- ・墨汁×1
- ・ブルーシート(要購入)

◎その他

- ・パフォーマンスの準備は放課後(18:00以降)に始め、それが完了次第客の呼び込みも行う。
- ・片付けはパフォーマンスが終了し次第開始する。

活動場所

練習、稽古、ミーティングなどは学内の教室を使う。

活動期間

2018/11/30~2018/12/30

対象

学生・教職員・学外者

活動報告

実際の活動内容

2018年12月10日（月）第1エリア B-C 棟間屋外廊下にて、「ふわふわユニカつくば支部」として15分程度のパフォーマンスを行った（内容は後述）。

オーガナイザーや当日手伝いに来てくれた同級生とともに19：00頃より小道具などの設営を始め、19：30開演。出演はプランナーの長部のみで、オーガナイザーたちには記録撮影や観客への案内などのスタッフ業務をお願いした。客席は設けず、動き回るパフォーマーに合わせて観客には自由な位置から観覧してもらった。

以下がパフォーマンスの内容である：

- ・前口上（上演時間、観覧方法、撮影OKの説明など）
- ・アカベラソロライブ「プチ☆お葬式」
- ・朗読「贗作『のっぺらぼう』」
- ・お祈り（観客参加型パフォーマンス。墨汁の入ったポリバケツに造花を活ける）

企画関係者、一般観覧者合わせて14人が参加した。19：45頃、上記の内容を上演終了。その後撤収し、活動を終了した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

取り立てて困ったことはなかったが、自身と不手際のために時間と人員に余裕がなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

本企画の運営に際して大きな影響はなかったが、もう少し良くできたのではという想いもある。また同様の公演やパフォーマンスを行う際には運営、広報に力を入れたい。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

「日常的に使用されている大学施設の屋根崩落事故」という些細だが非日常的な事象が起きた日からちょうど1年、メディアや筑波大生の間で当事故が話題になるのは今や稀である。実際大したことでもないのかもしれない。大したことはないけどなんだか風化させてしまうのは惜しくて、今回この企画を実施するに至った。「その時その場でしか起こりえないものを作りたい」という想いをそのまま実現できたことには大変満足している。

ただ、企画申請から実施までの期間が1か月足らずであり、広報面にあまり力を入れられなかったことを反省した。「この日この場でこの内容をやることに意義があり、集客数はその次」という想いであり、それに違いないが、目撃者や当事者がいなければすべて自己満足の何かになりかねない。また運営スタッフも不足していた。

今後また同様のコンセプトでパフォーマンスや公演を行う際は、時間的・人員的余裕を以て企画実施に臨みたい。

参加者への影響

今回はアンケートなどの実施はなかったため、参加者の具体的な感想を聞くことはできなかった。しかし、一般参加者の一人がSNSで感想を投稿してくれていて、「その時そこでしか成し遂げないことをやろうとしてたことと、（中略）大道芸の感じがちゃんと出せていた」とお言葉をいただいた。このパフォーマンスのコンセプトを説明していないにもかかわらず、このような見方をしていただけでうれしい。

また、参加型パフォーマンス（墨汁献花）は強制ではなかったが、用意していた造花がすべてハケるほど、積極的に参加していただけた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

筑波大学の広大で多様な環境は非日常のパフォーマンスを行うのにうってつけである。学内のいたるところに物語が潜んでいる。そういった場所を見つけたらぜひ、思いつき次第実現させてほしい。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

所属団体の制約を受けない（サークルの定期公演体制、役割分担など）ため、自分が本当にやりたい時期にやりたいことができる。

自分のなかにイメージされている「やりたいこと」を実現する（すなわち自分自身以外の人を巻き込む）ためにどうしたら良いか、何が足りないかと知識を得られた。今後、自身が演劇制作を行っていくうえで必要な経験を得られたと思う。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

つくばのカルチュエラタン—異分野セミナー開催と学内科学紙の作成 (18041A)

T-ACT プランナー 陳 怡菁 (知識情報・図書館学類3年)

活動目的

学内の科学コミュニケーションや異分野コミュニケーションの不足に解決するために、筑波大学学生が組織したつくば院生ネットワークは、今まで学生プレゼンバトル、プレゼンひろば、ザ・プレゼンテーションなどの活動を開催してきた。

一回目のつくばのカルチュエラタンは、セミナー形式で開催されていた、今回も同様にセミナーを開催しますが、参加者の募集や、自分の意見を言いにくい意見があったので、今回は学内科学コミュニケーション紙の作成を加え、不特定多数の人々、特に異分野間の意見を触れ合う機会を提供する。

目標：

1. わかりやすい方法で科学を提示することにより、学内の中で最新の科学発展にアクセスできます。
2. 学内外の人々に、学内の研究を紹介する。
3. 科学的問題に関するコミュニケーションを向上するための観点や議論を活性化、科学的なプロセスの理解に役立てる。
4. 大学の枠を超えて、学内外で科学を推進する。

具体的な活動計画

異分野セミナーの開催：

放課後に、1分プレゼンが中心となるワークショップを行う。今話題になるテーマを一つ取り上げ、それに沿って自分の分野でどんな解釈をするのかを、スライド一枚で1分間喋る。全ての人が終わったら団体討論。

場所：学内の宿舎などの共有スペース（予定）

時間：平日18:30～

1回につき2時間程度を予定

一回目：一月下旬

二回目：三月下旬

学内科学コミュニケーション紙：

十一月に開催されている異分野セミナーを、今回リーフレット形式でも行います。

今話題になっているテーマ一つ取り上げ、つくば院生ネットワークのメンバーで自分の分野でどんな解釈をするのかという形式でリーフレットを作成する。

規格：A2サイズ用の紙に両面印刷にて情報を掲載したものをA4サイズに4つ折りにして配布・配架などを行う。

スケジュール：

1月上旬 テーマ決め

異分野セミナー一回目の開催

ポスター掲示 原稿作成開始

1月中旬 原稿締め切り 編集作業開始

2月上旬 出版 配布

3月下旬 異分野セミナー二回目の開催

活動場所

筑波大学中央図書館2階 チャートフレーム

活動期間

2018/12/01～2019/03/31

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：安藤潤人（システム情報工学研究科博士後期課程3年）、讃井知（システム情報工学研究科博士後期課程3年）

P：逸村裕（図書館情報メディア系）

活動報告

実際の活動内容

つくば院生ネットワークの活動をリーフレット形式でまとめた。また、放課後に「責任」をテーマとし、1分プレゼンが中心となるワークショップを行った。それに沿って、教育学、言語学、心理学からのアプローチを行い、7人は自分の分野でどんな解釈をするのかをスライド一枚で1分間喋った。そのあと2時間程度の団体討論を行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒40%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

時間がなかったため、少人数で作業するしかないことと、テーマ設定が難しいすぎることに。結局スピーカー1名が講義している感じになった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

内容を省略版とし、時間内で無事に終わらせた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

締め切り設定をもちよつと余裕があるスケジュールで設定すべきだ。

参加者への影響

来年度は自ら企画をやらずに、手伝い程度の参加予定です。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

無理しない程度で頑張れば良い。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

印刷が綺麗な紙でできること。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒2

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒2

● 言つくば (18043A)

T-ACT プランナー 新宮 菜月 (人文学類 2年)

活動目的

言語学主専攻の方はもちろん、そうでない方も、言語についてのことなら何でも自由に発表できる！

【コンセプト】

- ・学類や専攻にとらわれないコミュニティ作りを目指す
- ・「言語ってこんなにおもしろいんだ！」
「世界にはこんな言語があるんだ！」
「身近なところに不思議なことがあるんだ！」を共有する場を提供
- ・さまざまなフィードバックを駆使し、新たな発想や着眼点を見つける

【目標】

今回のみならず、一・二年生が主体となって次回以降も定期的を開催することが望ましい。自分の学問領域にとらわれずに参加してもらいたい。

具体的な活動計画

- ・発表会の形式
言語に関するやや専門性の高い発表会
→年に2～3回程度の開催が望ましい
発表時間制限のなかで、各発表者が言語に基づいた内容について発表する。主な内容としては、研究発表や魅力紹介などであると思われる。
- ・登壇者、参加者について
発表者は他学類・専攻外でも募集し、
参加者に関しては、途中入退可とし、誰でも気軽に来場できるような雰囲気づくりを一番に考えている。

【過去の活動】

第一回 言つくば 2018/5/27 (日)

【今後の予定】

第二回 言つくば 2019/3/24 (日)

発表時間は1人40分程度とし、適宜休憩を挟む

具体的な時間は、目安として

午前の部 10:30～12:00

昼休憩 12:00～12:30

午後の部 12:30～15:30

を予定している。

活動場所

共同利用棟 A101、1C210、1C310、BiVi つくばサテライトオフィス等プロジェクタの使用が可能な教室で開催する。

活動期間

2018/12/12～2019/06/12

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：宮腰駿（人文学類2年）

P：渡邊淳也（人文社会系）

備考

活動日時について、主に休日から選択し、開催日前日に発表者同士での最終確認をする場合がある。企画終了時間も学生の負担にならないように考慮する。

活動報告

実際の活動内容

言語に関する講演会を行なった。今回は6名が登壇し、言語についての思いを熱く語った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒95%

実施中の困難と解決策

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今までは自分から何かを企画することもなかったため、突然「やりたい！」という自分の気持ちだけで進めてよかったのかどうか自信がなく、時には「言い出しっぱにならなければよかった」と思うこともあった。また、企画当日に上手くいかなかったときの対処法が分からない状態であったため、恐怖と不安によって他の協力者に頼りすぎた面もあったと感じる。未熟ながらも、周囲の助力によってなんとか企画を終えることができ、達成感を得られた。

参加者への影響

学問発表の場は、どうしても冗長な場合に飽きられてしまったり、参加者からの質問に答えられず登壇者が戸惑ったりすることがあるので、

「お堅い雰囲気はやめてゆるい企画にしよう」というところから始まった。そのため、参加者もあまり緊張することなく過ごしてもらえた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

教室申請は早めにやること。遅くなると、アクセスがあまりよくない教室しか残っていないという事態になる。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

手厚い説明があったため、教室申請やパートナー募集などの段取りが非常に分かりやすく、助かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● おさんぽ chat ～がんばるを、考える～ (18044A)

T-ACT プランナー 沖 葉由子 (日本語・日本文化学類4年)

活動目的

大学生活はどう過ごそうとも過ぎていく。しかし、就職活動を目前にして自分を見なおそうとしても困る人は多いのではないだろうか。

そこで、日常的に自分について考えるきっかけを作りたい。

今回のイベントでは、参加者に「頑張れる理由」を見つけてもらうことを最終目標とする。

この企画では、T-ACT の掲示板（構内10か所）に自分を考えるきっかけとなる「問い」を散りばめる。（SNS での「問い」発信も考えている。#をつけて拡散したい。）そうすることで日常的に「問い」が目に入り、何気なく過ごしている移動時間を有効活用できる仕組みになっている。また「問い」が目に入ったときに一緒にいた人と意見交換する機会にもなるだろう。

また移動中、体を動かしながら考えることで頭の回転がよくなることもメリットだ。

そして、この企画の集大成としてイベントを行う。

頑張ることについて考えるための問いを配布し、それらについて3人グループで学内を巡りながら対話する。

この活動が、参加者自身の価値観や「大切にしているコト」について考えるきっかけになればと考えている。またそれを自分の言葉で表現する機会にもなればと思う。イベント参加者には、その日に考えたことを後日振り返られるよう、おみやげになるような紙媒体を渡したいと考えている。

具体的な活動計画

【スケジュール（予定）】

2/27 13:00～17:00（プレイベント）

- ・アイスブレイクと「問う練習」
- ・「今がんばりたいこと」について書き出し、「なぜ頑張りたいのか」を書く。（最初のワークで40分）
- ・大学敷地内を3人グループで歩きながら「問い」を考える。
- ・インタビューのようにして互いを掘り下げていく（問い巡りに150分）
- ・最初のワークで答えた「いま頑張りたいこと」と、交流して得た考えを踏まえて、最終的な頑張れる理由を書く。（イベントのゴール）
- なぜがんばれるのかの理由を価値観の視点から考えるワークができるとうい。
- （最後のワークで50分程）

【使う物品】

- ・名札
- ・プリンター
- ・マイク
- ・スピーカー
- ・ラミネート
- ・T-ACT 看板

【予算】

カイロ代

【現段階での「問い」案】

「問い」の狙い：普段無意識にしている行為について、それをやっていることの原因を考えるきっかけを与える。

≪「問い」の例≫

- ・一番頑張ったと思う経験は？
- ・やりたくなかったけど頑張れたことは？

活動場所

- ・ミーティング場所：図書館のセミナー室

活動期間

2018/11/21～2019/03/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：吉川実穂（日本語・日本文化学類 4 年）、佐伯佳乃（日本語・日本文化学類 4 年）、瀬戸理央（日本語・日本文化学類 4 年）、岡崎紗英（生物学類 2 年）、水井樹（システム情報工学研究科博士前期課程 1 年）、坂東美月（物理学類 4 年）、太田涼子（日本語・日本文化学類 4 年）
P：一二三朋子（人文社会系）

活動報告**実際の活動内容**

1Day の自己分析イベントを開催するため、11月下旬から3月下旬まで週 1、2 回ミーティングをして構想を練り、3月29日にイベントを開催した。

【イベントの内容】

目的：「自分が頑張れるのはなぜなのか」に答えられるようになることで、「常にやる気を起こして自走できるようになる」ためのヒントを掴むことを目的としている。

①導入のワークショップ

- ・参加者同士の自己紹介を兼ねて、「問い」の掘り方を練習
- ・イベントの最後に「あなたにとって『頑張る』とは何か」に答えるための最初のステップとして、「いま頑張っていることは何か」に答えて書き出してもらう。

②散歩しながら「問い」を掘るワークショップ

3人一組で「問い」について対話しながら、時間が来るまでループとベダストリアンデッキを周回する。

「問い」の種類は以下の 6 種類。

- ・今までで見た一番頑張っている人は？
- ・今までで一番達成感を感じた時は？
- ・最初はやる気がなかったのに、やりきったことは？
- ・これまでで一番やる気があって頑張ったこと
- ・頑張ることを邪魔するものは？
- ・頑張ったことに対してどんな評価が欲しいか？

3人グループの中で、以下の 3つの役割を「問い」ごとに交替していく。

<「問い」を掘る人>

<掘られる人>

<対話の中で「頑張れる理由」に繋がるキーワードを付箋にメモする人>

③まとめのワークショップ

②で言語化した「今までの頑張る方」を振り返って、「どうやったら頑張りが続けられるか（やる気を起こして主体的に活動できるか）」を考える。

<やり方>

1. 付箋に書き出してもらった「今までの頑張る方」のキーワードを、「目的・目標を達成するまで続いたもの」と「達成前にやめてしまったもの」とに分類する。
2. 「続いたもの」はより続いた順にランキング形式に並べ替える。
3. ランキングを見て、「なぜ続いたのか」を考え、その答えを「自分が頑張れるのはなぜなのか」の最終的な答えとして、ホワイトボードに書く
4. 「頑張れる理由」をもとに、それを原動力として「何を頑張りたいか」をホワイトボードに宣言し、参加者同士で応援メッセージを書き込んで交流する。

《以上でイベント終了》

しかし、実際は集客力が及ばず、イベント当日は運営メンバー 5 人のみでの開催となった。そのため 5 人で行うやり方をとることにし、予定通りに遂行できたのは 4 割ほどだった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒40%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

- ・カウンセリングや自己分析について初心者が手探りで、「対話による『問い』の掘り方」を考えていったので、右往左往して 4 ヶ月ほどかかってしまったこと。
- ・メンバーが全員揃えなかったこと
- ・メンバー全員への情報共有、意思確認
- ・メンバー全員との意見交換
- ・役割分担

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・対話の方法に詳しい黒田卓哉先生と面談する中で、道筋を示してもらうことで軌道修正できた。
- ・来れなかったメンバーにもミーティングの内容がわかるように、ミーティング後なるべく早く議事録作成をし、LINE と GoogleDrive に掲載した。
- ・意見交換や意思確認は LINE のノート機能を使ってやりとりした。
- ・役割分担については、うまく割り振れなかった。プランナーしか知らない情報が無いように常に議事録や資料を GoogleDrive で公開するようにしたが、イベントの概要が整わない中ではプランナーが様々取りまとめたほうが速いと思い、オーガナイザーにはミーティングに参加する以外の活動を割り振れずにいた。しかし議事録作成やミーティングのセッティング等は分担したら、もっと活動にみんなが主体的になれたかもしれないと反省している。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

初めて1からつくった活動だったので苦労はあったが、充実していた。

ただただ「就活のための自己分析」について疑問を持っていて、普段から自分を振り返る仕組みを作ってみたという思いから始めた。そのため、最初はゴールも不明確なままだったので、ミーティングするにも「プランナーが何をイメージしているのかわからない」とメンバーを困らせてしまったこともあった。

グループのメンバーに主体的に活動に関わってもらうためには、プランナーが情報を独占しないことが大事だと思って、あらゆる情報を公開するようにした。

しかし、この企画自体がほぼ構想がない状態から、プランナーの「思い」だけで走り始めたものだったことを考えると、議事録やT-ACTからのお知らせなどの情報公開だけでなく、プランナーが企画を始める原動力となった「思い」について、もっと熱く、具体的に、発信していくべきだったと思う。日々のミーティング、議事録作成で満足してしまった部分があり、「思い」について発信するのに時間をかけなかったことが一番の反省点だった。

ただ、このように様々なことが不明確だったのに7人もメンバーが集まってくれたのは、とても光栄なことだった。

本当に最初の最初、休み時間にぼろっと「やってみよう」と友達に打ち明けてなかったら、こんなにメンバーが集まらなかったし、企画が実現することさえなかったかもしれない。そう思うと、あいまいなままでも言ってみてよかったと思う。そしてそれに賛同して、所属するサークルの先輩後輩を連れてきてくれた友達には感謝もしきれない。

それから毎回のミーティングが濃くて、みんなが喜んで、楽しんで参加してくれたことがとてもうれしかった。自分が「話し合うこと」が好きだということがさらに明確になったのはもちろん、「話し合うこと」に飢えている人もこんな身近に何人もいたということがわかったのが私にとっては大発見で、うれしかった。

イベント当日は集客力が全く及ばず、多くの人にイベントを楽しんでもらえなかったのがとても悔しかったけれど、集まったメンバーが「集客がんばって、またやろう」と言ってくれたのは、メンバーがこの企画を好きだと思っていてくれるということがとても伝わってきて、うれしかった。

今回自分が感じたままに企画を起こしてみて、「話し合う場」を求めている人・楽しいと思う人は思ったより多くいて、自分はそういう「場」をつくるのが好きなんだということがわかったのは大収穫だった。今後、T-ACTに限らずどんどん周りの人を誘って、自分の「思い」を積極的に発信して、「場」をつくって楽しもうと思う。

参加者への影響

最初は何だかよくわからないけどおもしろそう、と思ってくれて参加してくれていた人がほとんどだったと思う。ただ、期間中テスト期間が2回もあった中、何度もミーティングに足を運んでくれて、そのおかげで議論が白熱して方向性がまとまっていったと思う。しかし、冬休みを挟んで4ヶ月も構想を練るのに費やしてしまったせいで、なかなか初期の熱を持続させることは難しく、ミーティングで集まれる人数が減っていった。この時に改めて私の「思い」を伝えることができていたらよかったと思う。でも地道に話し合う中で、それぞれの違った考え方を知ることに対してとても興味を持ってくれた。また「問い」を掘る練習をする中で、お互いを知るようになり、企画への愛着を持ってもらえたのではないかなと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

企画を始める原動力となった「思い」を大事にしてください。そして、積極的に「思い」を発信してください。成功するように応援しています！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

気軽にプランナーになることができるので、実際に経験してみることで、自分がチームを引っ張る立場になったときに気をつけるべきことがわかったのがよかった。また、T-ACTの先生方にいつでもできる環境が

あったことがよかった。プロジェクトづくりが初心者でも、やりたいことの分野さえ初心者であっても、面談するたびに課題を指摘してもらって軌道修正できたのがとてもありがたかった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3

● 生つくば (18046A)

T-ACT プランナー 高田 一成 (生物学類2年)

活動目的

発案のきっかけ

「〇〇つくば」と題し、各分野で魅力的なことについて発表する企画が多く見られるものの、生命科学分野を扱うものはなかったため企画した。

活動目的

登壇者が、自ら生命科学やそれに関連する理学、農学、工学、医学、薬学といった学問分野、また生き物について、その魅力を多くの人前で発表することにより、どのように説明すれば聞き手が理解しやすいか学ぶことを目的とする。また、参加者には、生命科学がどのようなものか、身近な生き物がいかに多様で、密接に関わっているかを知っていただきたいと考えている。

具体的な活動計画

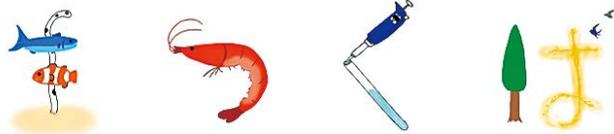
概要

- ・複数人が生命科学等、及び特定の生物に関する発表・講演を行う。
- ・定期的開催し、より多くの内容について扱うことが望ましい。
- ・分野が多岐にわたり、また登壇者数が多い場合は、分野ごと、及びレベル別に分けて進行する。
- ・登壇者の所属は問わない。発表は1人あたり30分を目安とし、各登壇者の発表後に10分程度の質疑応答時間を設ける。適宜休憩を挟み、当日の時間調整を行う。
- ・参加者についても、制限を設けない。
- ・会の進行は、登壇者数を考慮する。終了時刻は学生の負担にならないように考慮する。
- ・開催日は、休日であることが望ましい。また、開催日以前に発表者同士で最終確認をする場合がある。

日時及びスケジュール

- ・日時は未定だが、3月末に第1回を実施したいと考えている。
- ・当日のタイムテーブルは下記のように考えている。ただし、午前の部、及び昼休憩は登壇者数が多い場合のみ実施する。また、下記において、各登壇者の発表時間には10分間の質疑応答時間を含む。

10:45	開場	
11:00~12:20	午前の部	
11:00~11:40	午前の部	1人目
11:40~12:20	午前の部	2人目
12:20~13:20	昼休憩	
13:20~17:00	午後の部	
13:20~14:00	午後の部	1人目
14:00~14:40	午後の部	2人目
14:40~14:50	休憩	
14:50~15:30	午後の部	3人目
15:30~16:10	午後の部	4人目
16:10~16:50	午後の部	5人目



- ・上記のスケジュールで実施が困難な場合は、登壇者で調整を行うことにより時間内に収まるようにする。

登壇者に対する注意事項

- ・専門に限らず、多くの方にお越しいただくため、いくつか注意事項を設ける。
- ・法令を遵守すること（特に著作権）。
- ・参加者の気分を害するような発表（スライドで示す画像、及びサンプルを持参する場合はサンプルを含む）をしないこと。
- ・サンプルを持参しても構わないが、その管理は持参した登壇者の自己責任とする。また、サンプルを持ち込みたい場合は、事前に相談すること。
- ・不明点がある場合は相談すること。

活動場所

開催日以外は、基本的に特別な場所を必要としないが、最終確認の実施により必要となる可能性もある。

開催日当日は、BiVi つくばにあるサテライトオフィス、第二エリアの講義室等、プロジェクターが使用可能な広めの場所で開催できることが望ましい。

活動期間

2019/01/30～2019/07/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：坂寄裕紀（生物学類2年）、島倉ひかる（生物資源学類2年）

P：小野道之（生命環境系）

備考

開催日は現時点（2019年2月4日）での希望である。

**活動報告****実際の活動内容**

- ・6名の登壇者が生命科学やそれに関連した内容の発表（具体的には「食と健康について」「菌類から見る生態系」「生き物に学ぶ再生医学」「生物学の医療への応用」「昆虫から考える、生き物の『こころ』」「相分離生物学」）を行った。
- ・発表者はいずれも筑波大学生であったが、生物学類、生物資源学類、医療科学類と多くの学類から発表して下さった。
- ・発表は1人30分で実施した。質疑応答には10分割り当てた。午前の部終了時に10分、午後の部途中に設けた休憩前に5分時間が余ったが、この時間は休憩時間を延ばすことで対応した。なお、登壇者数が当初予定の7名から6名になったため、午後の部5人目の発表者枠を無くし、終了時刻を当初予定の17:00から16:30に変更した。
- ・開催日時は、当初の予定通り2019年3月31日であった。



企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒95%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

登壇者とのような手段で連絡を取るか。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

開催経験のある他の〇つくばの運営者と相談した。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

会を主催したのは初めてだったので緊張したが、多くの方に支えられて無事開催することができた。

参加者への影響

多くの方から様々な内容の発表をしていただいたことで、多くの知見を得ることができた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

早め早めに行動するとよい。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

承認を得た上で活動できたため、会場予約などで心強かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4**やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5**

● 「ハレ」の日探検プロジェクト (18047A)

T-ACT プランナー 五十嵐真結 (日本語・日本文化学類3年)

活動目的

皆さんは「ハレ」の日という言葉を知っていますか？七五三や成人式、結婚式などの「おめでたい」日のことです。これはおめでたいこと・特別なことを「ハレ」、普通のこと・日常のことを「ケ」と呼ぶ日本の伝統的な考え方に基づいています。そしてそういった「ハレ」の場の1つとして、日本では古くから神社が関わっていました。そこで、神社やそこで行われる祭礼などについて調べたいと思い、この企画を立ち上げました。

また、身近にたくさんある神社が私たちの日常生活やその地域にどのように関わっているかを知るために、文献などで調査するだけでなく、実際に現地に行くフィールドワークを行う予定です。

この活動を通して、「日本文化」や自分自身の文化について知ることができれば良いなと思います。

具体的な活動計画

【活動】

1. 週1回のミーティング (中央図書館図書館、18:30~21:00)

・ 図鑑作成のための調査、作業 (調べた祭事について図鑑にまとめます。)

・ 予定共有

・ 進捗報告会 (月末に行います。図鑑作成の進捗を報告したり、互いのページの良い点、改善点などを話し合ったりします。)

2. フィールドワーク (頻度については月1回~二か月に1回程度を考えています。)

・ 場所は現時点で、筑波山神社、一の矢八坂神社、鹿島神宮、笠間稲荷神社、大洗磯前神社を考えています。

・ 移動については、一の矢八坂神社は自転車を考えています。その他は公共交通手段を考えています。

・ その際の保険については学研災への加入の確認と加入の提案をしていきたいと思っています。

【活動予定】

第1回: 4月18日: 顔合わせ、筑波山神社について①

第2回: 4月25日: 筑波山神社について②

第3回: 5月9日: 筑波山神社について③

第4回: 5月16日: 筑波山神社について④ (情報共有)

FW①: 5月19日: 筑波山神社

第5回: 5月23日: 鹿島神宮について①

第6回: 5月30日: 鹿島神宮について②

第7回: 6月6日: 鹿島神宮について③ (情報共有)

FW②: 6月9日: 鹿島神宮

第8回: 6月13日: 一の矢八坂神社について①

第9回: 6月20日: 一の矢八坂神社について② (情報共有)

FW③: 7月9日: 一の矢八坂神社

第11回: 7月11日: 笠間稲荷神社について①

第12回: 7月18日: 笠間稲荷神社について②

第13回: 7月25日: 笠間稲荷神社について③ (情報共有) 第14回: 8月1日: 大洗磯崎神社について①

第15回: 8月8日: 大洗磯崎神社について② FW④

8月18日: 笠間稲荷神社

第16回: 8月22日: 大洗磯崎神社について③ (情報共有) FW⑤: 8月25日: 大洗磯崎神社

【FW日程】

①筑波山神社

5月19日 (日)

8:50 つくばセンター集合

9:00 つくばセンター発

↓バス (1番乗り場、つつじが丘行) 720円

9:36 筑波山神社入り口着

筑波山神社見学

毎時00、20、40分 (始発9:00) 宮脇駅発

↓ケーブルカー往復1050円

毎時08、28、48分筑波山頂駅着

男体山御本殿・女体山御本殿見学

毎時00、20、40分 (終発17:40) 筑波山頂駅発

↓ケーブルカー

毎時08、28、48分宮脇駅着

16：10/17：10（終発）筑波山神社入り口発

↓バス（つくばセンター行）720円

16：50/17：50 つくばセンター着

解散

②鹿島神宮

6月9日（日）古武道演武大会、小笠原流百々手式、献茶

8：30/8：50 つくばセンター集合

8：40/9：00 つくばセンター発

↓バス（東京駅行）1180円（IC：800円）

9：51/10：11 東京駅日本橋口着

10：20/10：40 東京駅八重洲南口発

↓バス（鹿島神宮駅方面行）1950円（IC：1830円）

12：16/12：36 鹿島神宮（バス停）着

↓徒歩8分

12：24/12：44 鹿島神宮到着見学

15：56/16：06 鹿島神宮出発

↓徒歩8分

16：04/16：14 鹿島神宮（バス停）発

↓バス（東京駅行）1950円（IC：1830円）

18：00/18：10 東京駅着

18：20/18：40 東京駅発

↓バス（筑波大学行）1180円（IC：1130円）

19：30/19：50 つくばセンター着

解散

③一の矢八坂神社

7月9日（火）「ニンニク祭」時間は未定

交通手段：自転車

集合：中央図書館前

④笠間稲荷神社

8月18日（日）

8：50 つくばセンター集合

9：00 つくばセンター発

↓バス（土浦駅西口行）530円

9：30 土浦駅着

9：39 土浦駅発

↓JR常磐線各停（勝田行）

10：13 友部駅着

10：21 友部駅発

↓JR水戸線各停（小山行）

10：29 笠間駅着

10：35 笠間駅前（バス停）発

↓バス（芸術の森公園行）

10：39 稲荷神社前（バス停）着

↓徒歩2分

10：41 笠間稲荷神社到着

16：03 笠間稲荷神社出発

↓徒歩4分

16：07 稲荷神社（バス停）発

↓かさま観光周遊バス（友部駅北口行）100円

16：42 友部駅北口（バス停）着

17：46 友部駅発

↓ JR 常磐線各停（上野方面）583円
 17：17 土浦駅着
 17：40 土浦駅発
 ↓バス（筑波大学中央行）530円
 18：05 つくばセンター着
 解散

⑤大洗磯崎神社

8月25日（日）例大祭
 8：50 つくばセンター集合
 9：00 つくばセンター発
 ↓バス（土浦駅行）530円
 9：30 土浦駅着
 9：39 土浦駅発
 ↓ JR 常磐線各停（勝田行）970円
 10：28 水戸駅
 10：38 水戸駅（バス停）発
 ↓バス（那珂湊駅行）
 11：11 大洗神社前着
 ↓徒歩2分
 11：13 大洗磯崎神社到着
 15：44 大洗磯崎神社出発
 ↓徒歩2分
 15：46 大洗神社前発
 ↓バス（茨大前営業所行）
 16：21 水戸駅（バス停）着
 16：31 水戸駅発
 ↓ JR 常磐線
 17：17 土浦駅着
 17：20/17：40 土浦駅発
 ↓バス（筑波大学中央行）530円
 17：45/18：05 つくばセンター着
 解散

【予算】

主な予算の内訳としては以下の通りです。

- ・ 図鑑作成
 （紙代、印刷代）→ T-ACT の印刷機使用
- ・ フィールドワーク→自費
 （交通費、入館料、救急セット購入費）

活動場所

中央図書館のセミナー室、チャットルーム、ラウンジ

活動期間

2019/04/02～2019/09/30

対象

教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：工藤春菜（日本語・日本文化学類3年）、稗田真衣（人文学類3年）、茂木愛理（日本語・日本文化学類3年）
 P：澤田浩子（人文社会学系）

活動報告書

実際の活動内容

- ・週1回の調べ学習
- ・月1回程度のフィールドワーク

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒65%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ・メンバーが各自の授業の課題等で忙しく想定していたほど深く調べることができなかった

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・調べる予定だった項目を減らした

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

- ・地域に入り込む貴重な体験だった
- ・元々興味はあってきちんと勉強したいと思っていたことだったので良いきっかけとなった

参加者への影響

- ・地域づくりや地域活性化などに興味を持つようになった

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

- ・思わぬ出会いによる方向性の変化にも柔軟に対応するとより充実した活動ができるのでどんどん挑戦してほしい

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

- ・チームを作って活動することで責任が生じつつも、その中で各自のペースで自分たちのやりたいことができ良かった

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒4



● ツクライブ! (18048A)

T-ACT プランナー 佐藤 大哲 (情報科学類4年)

活動目的

アニメ「ラブライブ!」および「ラブライブ! サンシャイン!!」が好きな筑波大学の学生及び出身者が集まり、コピーダンス PV の撮影を行います。

【キャスト側目的】

- ・振付を高精度で解析し、作品への想いの昇華を目指します。
- ・ダンスを通して、心身ともに健全な成長を目指します。

【スタッフ側目的】

- ・版元や大学、施設等とのやりとり等を通じて社会的な活動の経験を積みます。
- ・撮影技術・映像演出技術などの習得を目指します。

具体的な活動計画

【キャスト側】

- ・毎週2回、18時から21時まで学内にて練習およびミーティングを行います。
- ・月に2回、19時から21時までつくば市春日交流センターにて練習を行います。

【スタッフ側】

- ・2週間に1回、学内にてミーティングを行います。

【全体】

2月～3月：撮影に向けた練習

3月下旬：YouTube 公開用 PV 撮影①→3/16,18にリハーサル実施、5/25 (土) 実施

5月下旬：YouTube 公開用 PV 撮影②

(9月：YouTube 公開用 PV 撮影③)

活動場所

- ・情報科学類ラウンジ
- ・つくばカピオ
- ・つくば市春日交流センター

活動期間

2019/02/15～2019/08/15

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：合馬一弥 (情報科学類4年)、関口亞聖 (情報科学類4年)、宝田一希 (情報科学類4年)、西山大輝 (情報科学類3年)、大島和輝 (システム情報工学研究科博士前期課程2年)、津村志保 (日本語・日本文化学類1年)、吉村洸 (社会工学類1年)、三上萌絵 (看護学類3年)、谷地中亜海 (化学類1年)、長部世理菜 (比較文化学類3年)、石塚理央 (比較文化学類3年)、工藤凜 (生物資源学類1年)、前田祐紀 (知識情報・図書館学類4年)、久保川一良 (知識情報・図書館学類4年)、村手悠人 (工学システム学類4年)、高橋日和 (知識情報・図書館学類3年)、井口凌輔 (情報メディア創成学類1年)、川崎ゆき歩 (看護学類3年)、大西由夏 (生物資源学類4年)、高畠亮 (地球学類1年)、大場勇貴 (知識情報・図書館学類4年)

P：馬場雪乃 (システム情報系)

備考

※希望人数はキャスト側9人及びスタッフ側20人程度となります。

<ドローンの使用に関して>

国土交通省からの許諾を得た上で撮影用ドローンの飛行を行います。

実施に際して、事前に周囲の建物内の各研究室に書面にて説明を実施します。また、当日の撮影時間帯は石の広場全体への立ち入り規制を実施し、安全を確保いたします。

<著作権許諾に関して>

原作である「ラブライブ! サンシャイン」の版元の「プロジェクトラブライブ! サンシャイン!!」の株式会社サンライズ様及び楽曲著作権元の株式会社バンダイビジュアルアーツ様より、YouTubeの権利管理システム

(Content ID) を通じて楽曲の使用許諾をいただいております。

この使用許諾は、第三者からも容易に確認ができるものとなっており、正当なライセンスであることがYouTube から説明されています。当該使用許諾が適用されると、動画に対し広告が挿入され、その広告収益が権利者に権利料として還元されています。

・YouTube 側からの Content ID に関する説明 <https://support.google.com/youtube/answer/7680188>

活動報告

実際の活動内容

●石の広場での撮影の実施

3月16日、18日、5月25日の3回にわたり、石の広場にて撮影を実施しました。

以下の諸機関より許諾を得て実施しました。

- ・筑波大学学生生活課（石の広場の利用について許諾を得ました）
- ・国土交通省（ドローンの飛行について許諾を得ました）
- ・茨城県公安委員会・国家公安委員会（※5月25日のみ。ドローンの飛行について、問題がないことを確認・許諾を得ました）

また、撮影にあたり、以下の各所の研究室等について一件ずつメンバーで周り書面および口頭での事前説明を行いました。

- ・中央図書館
- ・理科系 A 棟
- ・人文社会学系棟
- ・人間系学系棟

なお、撮影に参加できなかったキャストがいたため、全編を撮り終えることができませんでした。8月以降、再度撮影を実施する方針です。

7月末までの活動については、一旦PVとしてまとめ、8月中に公開する予定です。

●スタッフ・キャスト講習会の実施

7月に筑波大学内にてスタッフ・キャスト向け講習会を行いました。

映像や音響の基礎知識から、ステージ照明・演出に関する話題、最低限押さえておきたい法律知識などについて、実務経験のあるスタッフを交えて勉強を行いました。

●キャスト定期練習の実施

毎週2回のペースで学内にてダンス練習を継続的に実施しました。撮影がひと段落した現在も学園祭に向けて継続中です。

●学外の団体への情報共有

今回の撮影で得られた各方面への許諾のノウハウなどをまとめ、金沢大学等の他大学の同じく学内でドローンなどを活用した撮影を実施しようと企画しているラブライブコピーユニットに対して情報提供を実施しました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

5月25日の撮影前日に、国土交通省からトランプ大統領の訪日や当時実施されていたG20に関連して、ドローンの飛行自粛要請が送られてきたため、撮影ができなくなりそうになった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

法令に基づき、茨城県警を經由して茨城県公安委員会・国家公安委員会に問い合わせを行い、本飛行について飛行自粛要請の対象に当たらないことを確認しました。また、公安委員会からの要請に基づき、飛行について当局から許諾を得ている旨等を掲示した上で撮影を実施しました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

撮影に関する説明にあたり、石の広場周辺の研究室の皆様を周りお話しさせていただきましたが、思いの外みなさま協力的でとても助かりました。なかなかここまで大規模に回ることはないため、貴重な経験であったと思います。

もともと、渉外関係のことをすることが多かったため、今回のT-ACTではその経験を存分に生かすことができ、また一層の能力向上を図れたのではないかなと考えています。

参加者への影響

撮影に関する渉外活動や安全管理など、これまで行ったことのないような新たな経験を積むことができたので

はないかと思います。また、講習会や実際の活動を通じて、スタッフもキャストも、技術的にも精神的にも大きく成長できたのではないかと思います。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

突然として不可抗力が発生することがありますが、不可抗力元にダメ元で相談すると意外とどうにかなりません。諦めないでチャレンジしてみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

大学内の教室を利用することができるなど、活動場所の選択肢が大きく広がり大変助かりました。また、学外の組織（版元様や警察等）と相談するときには多少なりとも大学の支援があることは大変有効だと感じました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● ゆうゆうゆう会 (18049A)

T-ACT プランナー 澤井雪乃 (人文社会科学研究科博士前期課程1年)

活動目的

つくば市春日交流センターで月1回行われている吃音の子どもたちの集い「ゆうゆうゆう会」が2019年3月末で終了します。当会がなくなるにあたり、吃音の子どもたちの交流の場がなくなるため、筑波大学に機能を移転させて存続しようと考えています。きっかけは、「ゆうゆうゆう会」の代表の方と、筑波大の宮本昌子准教授から「存続させないか？」とお声をかけて頂いたからです。個人的には、以前から吃音の交流会を筑波大学で立ち上げようと考えていたのでよいチャンスだと思いました。

活動目的は、吃音のある小・中・高校生が互いに、そして吃音のある大学生と交流することです。吃音のある子どもの中には、吃音で一人で悩んでいる子や「大人になったら吃音がどうなるのか？」と不安に思っている子がいます。同世代の子ども、あるいは吃音の大学生との交流を通して、仲間を見つけたり楽しい思い出を作ってもらうことを目標にしています。

具体的な活動計画

- 開催頻度：毎月第3日曜日
- 対象者：小・中・高校生の吃音のあるお子さん
- 協力者：宮本昌子研究室の学生10名ほど、ことばの教室の先生、言語聴覚士2名
- * 学生と言語聴覚士には確認済み
- * 最終的には、宮本研以外の吃音のある学生も協力者として募集したい
- * お子さん一人につき参加費200円を毎回徴収する
- 活動内容：
 - 10:00~10:20 はじめの会
 - 10:30~11:50
 - ・小学生：ゲームを通じた交流
 - ・中学生と高校生：大学生との座談会。近況報告をしたり、吃音で悩んでいることなどを話し合う(11:30~12:30)
 - ・保護者：お子さんを待っている間に座談会をしてもらう
 - 11:50~12:00 おわりの会
 - 12:00~12:30
 - ・スタッフ反省会：運営側でその日の反省を行う
- * 各交流会には、ことばの教室の先生あるいは言語聴覚士に入って頂く予定

活動場所

お子さんの交流会は人間学系棟 B114、保護者は人間学系棟 A111を予定。学外で行う場合は春日交流センターを予定。

活動期間

2019/05/19~2019/11/17

対象

学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：遠藤優 (医学類2年)

P：宮本昌子 (人間系)

備考

- ・ 社会福祉協議会のボランティア活動保険に加入する。
- ・ 運営は、吃音の臨床経験がある言語聴覚士やことばの教室の先生にアドバイスを頂きながら行う。
- ・ 会の情報は Twitter で随時お知らせする。
twitter アカウント / https://twitter.com/UUUkai_tsukuba

活動報告

実際の活動内容

吃音の子どもたちの交流会を実施した。

具体的な内容は、以下に記す。

○日時：毎月第3日曜日10：00～12：00

○場所：人間系学系棟 B114、春日キャンパス宿泊施設

○内容：

10：00～10：20 はじめの会（スタッフ紹介、あいさつ）

10：30～11：50

- ・小学生：自己紹介。カードゲーム、工作で一緒に遊んだ。
- ・中学生と高校生：大学生との座談会。近況報告をしたり、吃音で悩んでいることを話し合ったりした。
- ・保護者：子どもの吃音とどう向き合えば良いか？大人になったら吃音はどうなるのか？など質問があった。それに対してスタッフ、言語聴覚士がアドバイスをしたり、保護者同士で話合ったりした。

11：50～12：00 おわりの会

12：00～12：30

- ・スタッフ反省会：運営側でその日の反省を行った。

*各交流会には、ことばの教室の先生あるいは言語聴覚士に入って頂いた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

対象は、小学生から高校生にしていたが、幼児さんが来ることがあった。加えて発達障害のあるお子さんも何名かいたため、集団遊びができないことがあった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

集団遊びが苦手な子どもに対応するスタッフを1名配置することで、解決した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

ゆうゆうゆう会発足当時は、余裕がなかったため無事に会を終えることに必死になっていた。スタッフも毎月余裕がなく、モチベーションが低かった。

しかし、吃音の子どもたちや保護者が毎回多く参加してくれたり、会終了後「楽しかった」と言ってくれることで、徐々にモチベーションが高まっていった。活動を通して、改めて当事者同士の繋がりや支え合いの大切さを実感した。

参加者への影響

吃音当事者のスタッフが多く、吃音者のスタッフ同士で吃音の悩みを共有することもあった。また、スタッフも徐々に会の運営に対して発言するようになり、積極的に関わるようになった。

未来のプランナーに伝えたいことがあれば自由どうぞ

取り敢えずやりたいことがあったら、企画してみてください。失敗から学ぶことも多いです。

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACTのスタッフさんに丁寧に相談に乗って頂いた。

会の活動で行き詰ったときに、助言を頂いて大変助かった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

● to be myself—あなたは自分の人生をどんな『ものさし』で測りますか—(18051A)

T-ACT プランナー 大谷 悠里江 (体育専門学群4年)

活動目的

【きっかけ】

私は、部活動をしている時常に「自分は何をするべきか、どうあるべきか」を考えて生きていました。しかし、それは自分自身の『ものさし』で測った考えではなく、他の人から見た私・世間の作った『ものさし』からの考えでした。すごく生きづらいついて感じていたし、そんな風を感じる自分がダメなのかな?とも思っていました…しかし、大学2年生の時、体育専門学群開設の「体育・スポーツ経営学(清水紀宏先生)」を受講し、「常識やあたり前を考え直すことの大切さ」を初めて実感しました。その後、「自分は何をしたいのか、どうありたいのか」を考え自分でいろいろと動いてみたところ、私は視野・価値観の広がりを感じました。そして、自分の大切な考え方に気づくことができ、勇気をもって新たな道へ進む選択をすることができました。

このような悩みを抱えている大学生は他にもいるのではないかと、自分自身でワークショップをしたい!と思ったのが、この企画立ち上げのきっかけです。

【目的】

自分の「やりたいこと」や「なりたい姿」を見つけるきっかけ、自分自身の『ものさし』を持つための、気づきを得られる機会をつくること。

【参加者にとってのゴール】

- ・他学群の学生と関わり、多様な意見を交換し、刺激を得る。
- ・自分の人生の「ものさし」について考えるきっかけを得る。

【運営側のゴール】

- ・参加者が、自分の『ものさし(=価値観)』に気づけるようなワークを提供する
- ・企画、運営を通じて多様な価値観に触れ、自分自身の価値観を見つめなおすこと。

【こだわり】

「筑波大生による、筑波大生のためのワークショップ」であり、学生主導で“交流+自己分析”の場づくりを行う。それによって、学群同士の壁を取り払い、より密な横のつながりをもつ筑波大学を目指したい。

具体的な活動計画

【内容(案)】

- ・「やりたいこと」「なりたい姿」を考えるワーク(学生で話し合い、企画します。パートナーの先生にも助言をいただき、プログラムを詰めていきます。)
- ・企画の感想アンケート

【対象】全学群生

【スケジュール(案)】

- 5月11日 リハーサル①実施(メンバー+友人範囲)
⇒参加者アンケートをもとにプログラムを調整
- 7月中旬 リハーサル②実施(メンバー+友人範囲)
⇒参加者アンケートをもとにプログラムを調整

8月末 広報活動開始

9月末 本番実施

【本番スケジュール】

12:30 開場

13:00 開始

- ・メンバー紹介
- ・アイスブレイク

- =====
・自分の価値観の優先順位を可視化しよう
・可視化された自分の価値観を、ものさしとして強化していこう
・強化したものをさしをつかってみよう。
=====

- ・クロージング

15:30 終了

【所要時間】約2~3時間

活動場所

5C 棟教室

活動期間

2019/04/01～2019/10/01

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：池田晃一（医学類 6 年）、池田卓史（体育専門学群 4 年）、廣瀬久実（日本語・日本文学類 2 年）、山中翔平（体育専門学群 3 年）、貴島健斗（情報メディア創成学類 3 年）、大城ひろ乃（日本語・日本文学類 2 年）
P：清水紀宏（体育系）、藤田晃之（人間系）

活動報告**実際の活動内容**

9 月 30 日に、無事 vol.1 を開催することができました。

当日は、「自分だけの判断基準＝ものさしを可視化して、今迷っている選択をはかってみよう」というプログラムを実施しました。

形式としては、3 人×5 グループ（うち 1 人はグループファシリテーター）のワークショップ形式で行いました。

参加者の方からは、「普段話すことのない属性の人と話すことができ新たな発見につながった」「自分の価値観にしっかりと向き合い、言語化するいい機会になった」というポジティブな感想をいただくことができました。

今後も、今活動を継続していきたいと強く感じました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

メンバーのモチベーション管理、広報

活動の体験について**解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか**

自ら積極的にメンバーとのコミュニケーションを図り、それぞれの要望を吸い上げ、意見が反映されていることを感じてもらうように努めました。

また、広報に関しては対象になりえる人に個別にメッセージを送るだけでなく、各学群のメッセージグループにも告知を流してもらいました。

自分にとってどんな体験であったか

今回、自分の価値観に向き合うワークショップを作るにあたって、自分自身が一番自分の価値観に向き合うことができました。

また、実際にイベントを開催するという期限を設けたプロジェクトであること、参加者が都合をつけてわざわざ参加してくれること、などの条件からより一層責任感を持って取り組むことができ、「私にもこんなことをやり遂げる力があるんだ。」と自らの自信につながりました。

参加者への影響

仲間同士でも価値観について話し合う姿勢が、イベント後はより一層高まったように感じます。

また、参加者の方からも「次はファシリテーター側で参加してみたい」という声がいただけたりと、自分自身の価値観に向き合うだけでなく他人の価値観にも向き合うことで相互的に成長しているのではないかと感じます。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分自身のスケジュール管理やモチベーション管理に一番苦労するだろうし、ストレスもかかると思います。しかし、これをできるようになることで自分のキャパシティの広がりを感じたり、新しい自分に飛躍することができると思います。頑張ってください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

こんなことをやりたいというイメージを、実現可能なものに変えるお手伝いをしていただいた。0 から 0.1 し

か見えてなかったものを、1の形まで引き上げてくれたことがありがたかったです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



活動目的

筑波大学内には数多くの学生団体が存在している。学生生活の向上を図るもの、地域の人々と関わりを作るもの、行政や企業と協力し、ブランディングやイベントの企画を行うものなど、目的は様々である。

このような学生団体は活動のための人員を募集しているが、人材の分野が偏ったり、そもそも新入生がその団体を知る機会が少ない。幅広い人材を得られる場があれば、団体の運営に非常に有益だろう。

そこで、筑波大学内の学生団体を集めて合同で新歓を行い、新入生や「何かをやりたい」と感じている在學生とマッチングをするのがこの企画の目的である。また、学生団体が複数集まることで交流を生み、横の繋がりを強化して筑波大学の学生活動を活性化、ひいてはつくば市全体を活性化すること、新入生が入学の段階でこうした団体と関わることによって、より豊かな学生生活を送れるようにすることも目的とする。

今回は前回の参加団体に加え、昨年新しく発足した団体なども含めバラエティ豊かな団体が揃っているため、各団体が個性を強調できるようなものにしたい。また前回の反省を生かし、より学生団体に対する抵抗をなくし新入生が素直に興味を持ってもらえるようなイベントづくりをする。

今回は運営が女子2人であることを武器に、個性を強調しつつも全体でまとまりをもったデザインにこだわりたい、このイベントのイメージアップに繋がりたい。

具体的な活動計画

グローバルビレッジの共用スペースにて、各学生団体ごとにブースを設置し新歓を行う。また団体活動をPRする場として1団体3分のプレゼンと、告知なしに団体がパフォーマンスを見せるゲリライベントを行う。

ゲリライベントの例として、曲に合わせて踊りだす、漫才をする、団体で制作している冊子をばらまく、など。参加団体から集めた費用から軽食を提供する予定。ポスター、LINE、Twitterなどで宣伝を行う。

このイベントは4/22(月)18:30~20:30グローバルビレッジ共用スペースにて行う予定。それに伴う準備は12:00から、終了後片づけをし21:00に撤収予定。

< 予定タイムテーブル >

- 12:00 イベント準備開始
- 18:30 イベント開始・挨拶
- 18:35 各団体による3分間のプレゼン×11団体(6団体)
- 19:00頃 各ブースでの新歓開始
- ~途中でゲリライベントを挟む~
- 20:30 イベント終了・片づけ開始
- 21:00 撤収

< 参加予定団体 >

4/22参加予定団体

- ・つくば路100km 徒歩の旅
- ・つくば学生農業ヘルパー
- ・アイセック筑波大学委員会
- ・TEDxUTsukuba 学生団体
- ・WorldFut TSUKUBA
- ・つくば現代短歌会
- ・食と酒東北祭り実行委員会
- ・ドットジェイピーつくば支部
- ・盆 LIVE 実行委員会
- ・Study For Two 筑波支部
- ・つくばミュージックプロジェクト

4/24参加予定団体

- ・学生団体 C4
- ・つくばお笑い集団 DONPAPA
- ・盆 LIVE 実行委員会
- ・Study For Two 筑波支部
- ・Tsukuba for 3.11
- ・つくばミュージックプロジェクト

活動場所

グローバルビレッジ共用棟 2階交流スペース

活動期間

2019/03/01～2019/05/08

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：門田楊子（生物資源学類 3年）、絹笠真子（生物資源学類 3年）

P：山路恵子（生命環境系）

備考

今回参加するつくばミュージックプロジェクト、ふるさとつくばゆいまつり実行委員会は、「ゆにっと」というグループとして一般学生団体に認可されています。

活動報告**実際の活動内容**

まず昨年参加して頂いた学生団体に声をかけて募りました。学生団体伝いで、昨年は参加していなかった別の学生団体の方にも企画のことを知って頂きました。最終的に14団体集まり、2日間に分けて開催しました。

企画を遂行するにあたって、①企画内容②当日の流れ③宣伝の3点を中心に話し合い、準備しました。

今年ははじめに各団体3分間のプレゼンを行い、参加者に必ず聞いていただく形をとりました。団体数の多さでだらけな心配でしたが、参加者の方は耳を傾けてくれました。プレゼン以外には、各ブースによる新歓、そして各団体によるゲリライベントというものを行いました。

ゲリライベントとは、団体がプレゼンよりも自分たちの魅力を発揮するために設けたものです。具体的にはVJ、e-sports、盆踊り、短歌会など、バラエティに富んだものとなりました。私はプレゼンは机上の空論だと考えているので、今回最も力を入れた内容です。

当日はお祭りのイメージで、常にどこかで何かが起きている状況をつくり出すために、プレゼン→ブース新歓&ゲリライベントで空白の時間が生まれないようにセッティングしました。

また、芸術学群の方においてポスターやTwitterのアイコンなどを、企画のカラーを統一したセンスのあるものに仕上げてもらいました。

昨年のを参考に、①超を強調②シンプルなデザイン③目立つ色に注意しました。

昨年のテーマカラーはビビッドピンクでしたが、今年はイエローを使用しました。

学内にポスターを貼り、Twitterや学類LINEでも宣伝を行いました。

おかげさまで、当日は計48人の方にお越しいただきました。多少遅れなどが発生しましたが、時間内に収めることができました。参加者の方から、もともとある団体目当てに来たがほかの団体にも興味を持った、友達に連れられなんとなく来てみたが面白い人たちがばかりで楽しかった、などの声を頂きました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒70%**実施中の困難と解決策****実施中に困ったこと**

開催場所の予約

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

もともと休日に一日だけで開催しようとしていましたが場所の予約が難しかったため、平日2日間に分けて開催しました。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

準備はほぼ一人で行っていたので、自分の限界を知ることができました。企画の実行には入念な計画を立てる必要があることを実感しました。オーガナイザーにも的確に指示し手伝っていただくためにも計画書を作るべきだと感じました。

また、自分が普段なかなか出会わないような様々な人たちと知り合うことができました。他人から見える自分という人間について考えるきっかけになりました。

自分の限界と成長を実感する体験となりました。

参加者への影響

参加してよかったという声をいただきました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

計画書を作れ

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

企画の準備実行に何が必要なのか、的確なアドバイスを頂きました。審議など、企画を行うにあたって必ず伴う雑務などを全てお任せすることができ、企画の準備に専念することができました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感はありましたか？⇒3



● 盆 LIVE2019 (19001A)

T-ACT プランナー 芹川 瑠美 (芸術専門学群3年)

活動目的

盆 LIVE は、日本の伝統である盆踊りと現代ミュージックを掛け合わせたエンターテインメントです。「つくばに集う大学生、留学生、地域の方や外国人が、お祭りを通して交流できる場をつくりたい!」という思いからスタートして、今年で第5回目の開催になります!!

「炭坑節」「八木節」など伝統的な盆踊り音楽から、洋楽、J-POP、歌謡曲、子供、アニメ曲と多岐に渡り、音楽やアートのパフォーマンスや出店が華を添えます。誰もが気軽に参加して楽しめる、そんなお祭りを目指しつつ、つくば市のさらなる活性化や、人々の交流発展に繋げていきます。

具体的な活動計画

9月に開催予定のお祭りを成功させるべく、ミーティングや対外交渉、広報イベントなど運営を進めていきます。

実行委員の仕事を大まかに分けると、以下の3つになります。

総務・・・書類や備品、会計等を担う

企画・・・踊りや演奏などのパフォーマンス、会場装飾、出店交渉、祭当日のスケジュールを考える

広報・・・SNS やピラ、ポスターなどで情報発信

【活動の流れ】

- 4月 新メンバー募集
関係者や団体さんへ挨拶公園管理事務所へ挨拶
- 5月 企画内容を詰める
出店交渉や出演依頼 (出店はキッチンカー、出演は筑波大生で音楽・芸術活動を行っている人を中心に考えています)
- 6月 広報活動
協賛交渉
後援申請 (市役所、教育委員会) 踊りの練習開始
- 7月 ポスター・チラシデザイン完成・入稿タオル・Tシャツ・うちわ発注
消防への届け出
公園管理会社へ挨拶当日スタッフの募集
- 8月 機材調達
広報活動
当日の流れ確認
- 9月 各業務調整
MC 等台本制作・リハーサル
21日 本番開催予定。開催後、お礼・挨拶周り、報告書作成と反省以降 引き継ぎや挨拶

お祭りは研究学園公園にて行います。出店は現時点で8店舗程度を予定しています。来場数は去年1500人程でした。今年は2000人を目指して広報していく予定です。

運営スタッフは20人程度、当日スタッフなどの協力者は20人以上を目標に集めたいと思っています。当日スタッフに関しては当日の朝から撤退 (20時) までの中でシフトを組みます。

もちろん前日準備や後片付けを手伝ってくださる方もぜひ! やることは多岐に渡ります。

やれることも沢山あります。

だからこそ得られる様々な体験を楽しみながら、運営を進めています!

お祭りや踊りが好きな方、もっと地域の人と関わりたい、スキルを生かしたい人という方大歓迎です!!

活動場所

ミーティングは基本的に中央図書館等で行います

活動期間

2019/04/01~2019/09/30

対象

教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：小田島実結（比較文化学類 4 年）、木邨弥生（比較文化学類 4 年）、開田健太郎（社会学類 4 年）、喜瀬沙織（比較文化学類 4 年）、野崎凌太（比較文化学類 4 年）、飯村ちはる（比較文化学類 4 年）、福田哲郎（比較文化学類 4 年）、周俊杰（システム情報工学研究科博士前期課程 2 年）、阿部光多（心理学類 3 年）、高田夏子（比較文化学類 2 年）、坂本茉優（日本語・日本文学類 2 年）、須藤恵吾（比較文化学類 2 年）、岩崎良平（比較文化学類 2 年）、神原智佳（社会工学類 2 年）、荒木優里（比較文化学類 2 年）、駒野樹（比較文化学類 2 年）、岩佐聡司（生物資源学類 2 年）、樋口将也（比較文化学類 1 年）、井尻あゆ（生物資源学類 1 年）、釜范亮（知識情報・図書館学類 1 年）、関口大輝（比較文化学類 2 年）、高野大（比較文化学類令和元年度卒業）

P：木村周平（人文社会系）

備考

お祭り本番の開催予定

盆 LIVE2019

日 時：2019/09/21（予備日22日）15時～20時

場 所：研究学園駅前公園

13：00 出店販売開始

15：00 パフォーマンス

15：30 開会

オープニングアクト

踊りの練習

16：30 パフォーマンス①

17：00 盆踊り

18：00 パフォーマンス②

18：40 盆踊り

19：30 閉会

（20：00 お客様帰宅 21：00 完全撤収）

※予算は60万円程度です。現在は助成金の活用を考えています。

活動報告**実際の活動内容**

第5回盆LIVE2019を、9月21日（土曜日）に研究学園駅前公園にて開催。櫓を中心に、キッチンカー6台と縁日含むイベントスペース6種、休憩所などのテントが円を作った。下記スケジュールにて進行し、家族連れを中心として1000人以上の集客に成功。1日を通して人が絶えることはなかった。

13時～ キッチンカー販売開始

14時～ 盆LIVE開会

オープニングアクト「お囃子演奏とつくば市吉瀬地域の盆踊り」

15時～ パフォーマンス①「フォルクローレ演奏」

15時45分～ 盆踊り①「伝統的な音源に合わせた盆踊りとその練習」

16時30分～ パフォーマンス②「ヒーローショー」

17時15分～ 盆踊り②「子ども向けの現代音楽が中心の盆踊り」

18時～ パフォーマンス③「ヲタ芸演舞と、盆踊りとの出演者コラボ」

18時45分～ 盆踊り③「オリジナル盆踊り含め様々な現代音楽で盆踊り」

19時30分 閉会

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- 1) 助成金の書類申請
- 2) メールの対応
- 3) スピーカー等精密機材の故障
- 4) 8月の人員不足

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- 1) TACTの先生方の手をお借りした。
- 2) 担当者以外はメールを未読状態に保つなど、ルールを決めた。

3) 原因は予想外の猛暑による内部機器の熱暴走だった。

日傘を用意し西日が直接当たらないように配慮。PA 機材はテントの中に組み込み、日陰で取り扱った。クーラーボックスに2L ペッドボトル氷を準備し、暑くなってきたらスピーカー上部にタオルを引いた上で氷を乗せて冷却する。また当日スタッフや専門知識のない人間が無闇に動かさないように、PA 周りの対応を印刷して共有・PA 周辺テントに掲示。雨天時用に傘やビニール袋を用意し、すぐに雨から守れるようにした。本降りの時はテント内に避難させる。PA を中心に補佐 2 名の体制で常に行動し非常時に備えた。

4) SNS を用いた全体の進行、各メンバーの日程把握、日程に合わせた仕事の再分配。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

過去 2 回参加してきた中では広報と会計を中心に活動しており、今回初めて全体像が見えました。その中で誰がどれだけ動いているのか、メンバーの性格や得意なところからどうやって仕事を頼むか、いかに身軽に物事を進めるか等々、全体の進行度をコントロールし共有するというのは非常に不慣れでありました。だからこそ至らぬ点は多々ありながら、改めてメンバーや盆LIVE をする意義について向き合ったことは楽しくもありました。同時に当日も最後まで自分が楽しむ、来場者が楽しめるというのは当然として、イベントに協力してくださっている方々がいかに楽しく活動できているかまで目配りする意識がありました。そうして初めて本当の意味で会場全体と一体になりイベントを作ることができたと感じます。

参加者への影響

実行委員会のメンバーでいえば、互いに得意なことや苦手なことを把握し合い、自然と仕事や役回りを補完し合うようになっていたのが印象深かったです。はじめはとりあえず担当の分野をこなす形だったのが、誰がどこを把握しているのか、得意なのか、日程は空いているのかなど細やかな部分まで気にかけるようになるに加え、それが可能なルールや組織としてのシステムを作って付け足していくことが、円滑な運営に繋がっていました。何度私自身も助けられたかわかりません。

一般参加者においては本年度で 5 回目ということもあり、慣れた様子が見えました。戸惑いなく盆踊りの輪に入る姿は緊張感が抜けており、フランクに楽しめる空気感を来場者の方も作っていただきました。日が沈み祭りらしい雰囲気が出るにつれ、輪に入らずとも上半身だけ踊ったり、体を揺らしたり等さらに楽しんでいらっしやるようでした。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

私は続いてきた活動を引き継ぎ、今年度の目標として地盤とイベントの方向性固めを掲げていました。T-ACT の中では特殊であり、すでに組織基盤や頼れる方々がいたからこそできたことと理解しております。そのため新しくイベントを作り上げるプランナーの方々はそれだけで素晴らしいと思います。また続けることができたイベントが恒例となり楽しみにしてくださる人がいらっしやるのは非常に嬉しいです。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

助成金や書類申請やメールなど先生方から何度もお声がけいただきました。盆LIVE は性質上ミーティングルームを持たないため、ちょっとした集まりや一時的な備品置き場にも利用させていただきました。また掲示の際 T-ACT の名前を出すとスムーズに話が進むことが多々あったのも大きいです。この場をお借りして感謝申し上げます。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5



● 育児中の学生達による子ども同伴交流会：Students' BBQ with your kids. (19003A)

T-ACT プランナー 北原 有唯（人間総合科学研究科3年制博士課程3年）

活動目的

・きっかけ

筑波大学は開かれた大学であることを掲げ、積極的に世界各地から学生を受け入れています。学内は国際化や価値観の多様化が進んでおり、子どもを連れて学ぶ学生たちも多く在籍しています。

様々な背景を持つ学生が安心して学業に集中できるような環境を整え、魅力ある筑波大学を目指して活動しています。

前回の T-act では、多くの学生の意見をきく機会に恵まれましたが、短時間でのミーティングでは情報の共有や仲間づくりは難しいと感じました。

そこで今回は学生同士がもっとお互いを知り合い仲良くなるために、子供達も一緒に連れて野外で食事会を行います。

参加学生の多くは留学生であることが想定できるので、英語と日本語の二か国語での運営を行います。

様々な背景をもつ多くの学生と子どもたちに参加して頂きたいので、英語を利用した交流会を複数回実施します。

・目的

1. 育児中の学生および関係者の交流会を通してお互いが知り合い、大学の所属を超えて友人ができる。
2. 育児中の学生が抱えている不安や情報を共有し、育児負担感の軽減をはかる。
3. 英語を利用した交流会により、様々なバックグラウンドの学生が参加できる。

・最終目標

1. 友人を作り大学内で育児コミュニティを形成すること。
2. 筑波大学のファミリーフレンドリーキャンパスを目指す活動を行うために、交流会を通して育児中の学生のニーズを拾い出すこと。

具体的な活動計画

・計画タイムスケジュール

4月中旬 コアメンバーミーティングと交流会①計画立案

5月中旬 交流会①実施：5/18 BBQ in 豊里ゆかりの森

5月下旬 交流会反省会

6月中旬 コアメンバーミーティングと交流会②計画立案

7月中旬 交流会②実施：日程未定

7月下旬 交流会反省会

8月中旬 コアメンバーミーティングとキャンプ③計画立案

9月中旬 交流会③実施：日程未定, Not decided

9月下旬 交流会反省会

・キャンプ交流会場所 Camp Location 豊里ゆかりの森

つくば市遠東 676

<http://www.tsukubaykr.jp/>

・スケジュール schedule:

5月18日（土曜日）Saturday, 18th May

10:00 集合 meet up at Toyosato Yukari no Mori

10:30 自己紹介とゲームを使った交流会 self-introduction greeting

12:00 昼食 lunch/ BBQ, Yakisoba, Japanese curry and so on.

15:00 解散 Dismissed!

The plan might be changed cause of budget.

・集合方法 How to get to there

現地集合

Please get to there by yourselves, such as chartering the bus up to the number of participants.

・安全対策

子どもの参加は保護者である学生が同伴する。

代表者がまとめて JA 共済のイベント共済に参加者全員が加入する。

Your children can join the camp together.

Participants must buy 24-hour travel insurance.

・予算案

小学生以上の一人につき1000円（食費、イベント保険料込）

1000yen/ person over 7y

詳細は別紙のとおり

Please refer to the attached file for the budget.

・イベント保険加入の関係で、前日までに企画者に氏名や参加人数を連絡をしてから参加する。

活動場所

D棟7階リフレッシュコーナーまたは豊里ゆかりの森

The organizers meeting will have at 7F Refresh corner in Building D.

活動期間

2019/04/01～2019/09/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：Gunsmas Gerelmaa（人間総合科学研究科3年制博士課程3年）

P：堀愛（医学医療系）

活動報告

実際の活動内容

週末に野外でBBQを行いながら、育児中の学生や関心の高い教員と交流会を持つことができた。

野外交流会で検討されたこと及び意見

1. 学業を行うにあたり、どのような育児サポートが必要か。
→前回と同じように、子どもが安全にすることができる居場所の確保、安心して預けられる保育者の確保、保育費の確保が必要であることが意見としてあがった。今回は交流会は3時間程度と時間の余裕があり、現状や実体験などを詳しく聞くことができた。
2. 今回の活動で得られたこと。
→前回には得られなかった大きな違いは、筑波大学の教員と研究員の方からの参加も得ることができたことである。具体的なアイデアに富んだ提案を頂き、問題意識の高さや問題解決能力の高さを学ぶことができた。今後は連絡を密にして、多様な立場を有効に活用した支援活動に結びつけていきたい。
3. 私たちにできることは何か。
育児を行っている学生に対する理解を深めるため、情報を発信し、共通の問題意識を持つ人同士の交流を広げる。
→HPによる情報の更新を行う。
→当事者同士の交流を深め、ネットワークを構築する。
→活動報告会などを積極的に機会を利用して、筑波大学にも育児支援を必要とする学生が多く在籍することを伝え続ける。

結論

育児を行う学生に対する環境の改善、私たちからの情報発信、学生同士の信頼関係の構築は一朝一夕には成り得ない。今回、活動を続けることで新たな人との繋がりが生まれ、それが問題解決へつながることがわかった。今後も無理せず活動を継続することで、筑波大学がFamily Friendly Campusとなるための一助となりたい。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

屋外での活動であり、安全管理に注意を払うことで、交流会の意識が分散してしまう。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

当事者が話し合いに集中できるように、参加された配偶者の方々が子守をしてくれた。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

学業をしながら育児・家事をこなす方は大変忙しく、検討会に集合することが難しかった。また、子どもの行

事や体調など不測の事態が多く参加すること自体が難しい。

参加者への影響

留学生を受け入れている先生や育児中の特別研究員の先生方にも問題意識を共有できた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

計画通りには企画が進まないが、できることを長く活動を続けることが大切だと思う。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

相談役の先生が親身になってくださり色々な挑戦ができた。大学の関係者の方でも知らない人と関わり、共通の問題意識を通して話し合っって問題解決の糸口を掴む楽しさのようなものを体験することができた。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



つくば ごみばこ ぷろじえくと vol.2 (19004A)

T-ACT プランナー 松井 美夕琳 (人文・文化学群人文学類2年)

活動目的

弱視歩行体験をした際、現在学内に設置されているごみばこに使いにくさを感じる人がいると認識し、誰にでも使いやすく親しまれるごみばこはどのようなものか考えるようになりました。その中でペットボトル用にはペットボトル型の、カン用にはカン型のごみばこがあったら面白いのではないかと思いつき、発案に至りました。本企画では“ごみの形をしたごみばこ”をコンセプトに、ペットボトル用、空き缶用、計2種のごみばこを製作致します。色覚異常や弱視であったり、文字が読めなくても何用のごみばこか判別しやすく、高さにも配慮して子供や車椅子の方にも使いやすいものを作りたいと考えています。このようなユニバーサルデザインのごみばこを製作、学内に試験設置し、ご意見をいただいて改良したものを常時設置させていただくことが最終目標です。前段階の活動である「つくば ごみばこ ぷろじえくと」ではデザイン案の作成、助成金申請等を行いました。それを踏まえ、vol.2では実際にごみばこを製作し、設置し、アンケートをとる予定です。活動を通し、ダイバーシティについて考える機会をつくりたいと考えています。

具体的な活動計画

2018年10~12月にかけて、「つくば ごみばこ ぷろじえくと」としてデザインの決定、設置場所の交渉、助成金申請等を行いました。今回の活動では、実際の製作、設置、広報活動、アンケート等を行います。5/18,19日にごみばこを製作、設置し、6月からGoogleフォームを利用してご意見をいただきたいと考えております。6/20を目安に集計、その後、でき得る限りの改良をし、常時設置する予定です。

製作については、5C棟の教室をお借りし、本体にファイバードラム缶、ふたなどその他の部位はアクリルを中心に製作します。塗料はアクリルを用い、ある程度の耐水性を持たせたいと考えています。

設置場所に関しては中央図書館を予定しており、既に職員の方に許可を得ています。また、資金については公益財団法人倶進会の助成金を取得済みです。詳細は予算書をご覧ください。

活動場所

T-ACT フォーラム5C棟

活動期間

2019/04/01~2019/07/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：三嶋遥菜（日本語・日本文学類2年）、瀬邊風馬（日本語・日本文学類2年）、濱田瑠風（比較文化学類2年）、中島ももか（人文学類2年）、藤元うさ（人文学類2年）、河原井かれん（芸術専門学群2年）、高橋香澄（人文学類2年）

P：小山慎一（芸術系）

活動報告

実際の活動内容

“ごみの形をしたごみ箱”をコンセプトにユニバーサルデザインのごみ箱を制作、設置致しました。また、アンケートも実施し、その後改良を行いました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

今回の活動ではありがたいことにかかなりの反響をいただき、大変嬉しく思うと同時に、インタビュー等のお申し出の対処には手間取ってしまったところがあったように思います。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

T-ACT専任教員、パートナーを中心に先生方にアドバイスをいただきながら進めました。いただいたお申し出にはそれぞれお返事ができ、インタビューをインターネット記事にさせていただいたり、ディスカッションの場

を設けることもできました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

つくばごみばこぷらじえくとに続き、貴重な体験ができたと感じています。今回の活動では、アンケートをとったりディスカッションをする機会もあり、また一般の方からも反響をいただいたことで、学生のみならず、多くの人に我々の意図を感じていただけたと思います。学生としての立場でこそできることがあると強く感じさせられる体験でした。

参加者への影響

ごみ箱を実際に制作し、設置できたことで達成感を得られたのではないかと思います。また、デザイン、制作等に限らず、運営を行う中で必要になる様々な活動を通して得られたものがあると感じています。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

ほんの思い付きでも形になるかもしれません。まずは是非 T-ACT フォーラムに足を運んでみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

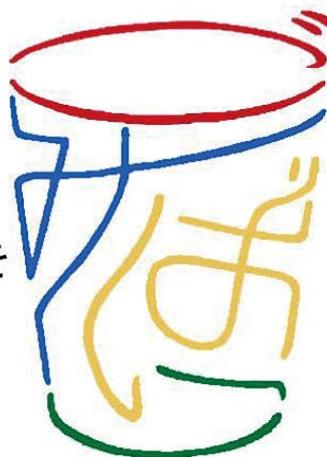
T-ACT を利用することで、学生だからこそできる活動ができたと思います。プランナー、オーガナイザー共に至らないところもありましたが、専任教員、パートナーをはじめとした先生方のお力添えもあり活動を形にすることができました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5

つくばごみばこ
ぷらじえくと vol.2

"ごみの形をしたごみばこ"を
コンセプトに、
誰にでも親しまれるごみばこを
作ります。
ダイバーシティについて
一緒に考えてみませんか?



つくばアスリートレストラン (TAR) (19005A)

T-ACT プランナー 佐々木 雄平 (体育専門学群3年)

活動目的

きっかけはInstagramでした。作った料理を毎日Instagramにあげていたら、周りのアスリートの友達から「食べたい！」という声が多く寄せられるようになりました。彼らの話を聞くと、学生アスリートは毎日の食生活に困っている人が多いことがわかりました。実際に体育専門学群の学生300人弱にアンケート調査を実施したところ、7割の学生が食生活に不満を抱えているという結果でした。時間もお金もかかる、栄養バランスの整った食事を効率よく取ることは彼らが抱える最大の問題の一つだそうです。私たちはそんな彼らを助けたいという思いで活動しています。また、食事を通して、学部を超えた繋がりや、学生と地域の方々との繋がりを提供したいとも思っています。言ってみれば、学校や地域の方々を巻き込んで、つくば市や筑波大学に『食事革命』を起こしたいと考えています。将来的には、このビジョンをビジネス化することを考えています。そのための地盤づくりと仲間集め、ファンづくりなどにT-actさんを活用させていただきたいと考えています。

具体的な活動計画

「アスリート食事会」を1ヶ月に1、2回開催しています。参加者を事前に募り、1食500円でパーフェクト栄養型の食事を提供します。また、一緒に料理を作ったり、作り置き講習会を開催するなど、栄養や食生活に関するサポートも行っています。調理の主な作り手は学生と地域の主婦の方です。すでに二人の地域の主婦の方に協力いただいております。食事を食べる対象も基本的には学生です。教職員の方が興味を持ち、食事会に参加くださる時もあります。また、特定の部活動を対象に会を開くこともあります。興味を持ってくださった他の団体とは積極的に関わり、活動の裾野を広げていきたいと思っています。

当日のスケジュールは以下の通りです。

- 10:00~13:00 買い出し
- 14:00~18:00 調理
- 18:00~20:00 ご飯
- 20:00~21:00 片付け

食事を提供する際には衛生面に最大の注意を払っています。弁護士にも相談し、法的な問題がないかの確認をとりました。現在は対象者が不特定多数ではありません。しかし、今後活動を広げるにあたっては、徹底した衛生管理と適切な資格が必要になります。メンバーの一人が先日、食品営業許可の申請の際に必要な、食品衛生責任者養成講習会を受講しました。今後は保健所への相談と合わせて、食品衛生責任者養成講習会に参加するメンバーを増やします。さらに、新しい場所を借りて会を開く際にはT-ACTや弁護士との相談を行い、食中毒の発生を防止します。また、調理メンバーの健康チェックや、中心温度計で食材の温度を確認するなど、管理栄養士指導のもと、衛生的なアドバイスを実践しています。運動栄養学研究室所属の管理栄養士の方や、社会人の栄養士の方にすでに協力いただいております。

加えて、アレルギーや宗教上の観点から、料理に使う食材を積極的に開示します。

活動場所

Global Village 2F
めんとるステーション5C 棟調理室



活動期間

2019/07/31～2019/12/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：浅野優次郎（体育専門学群3年）、八角周平（体育専門学群3年）、日高遼子（体育専門学群3年）、杉山華彩（体育専門学群3年）、渡邊悠（体育専門学群3年）、芹川瑠美（芸術専門学群3年）

P：深澤浩洋（体育系）

備考

月に1回の食事はみんなでワイワイ楽しく活動しています。ただ、現状としてアスリートが運営メンバーであるため、忙しく、運営メンバーが足りなくて困っています。料理や食事、農業に興味がある方と一緒に運営していけたら嬉しいです。最近是他学群（生物資源、芸術、社会、メディア創生）の学生も興味を持って来ています。

活動報告書**実際の活動内容**

月に1度、レストランを開催。栄養価の高い食事を取ることに問題を抱える学生に対して、栄養士、地域の主婦の方の協力の元、手の届く価格での提供をした。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

人を集めることに苦労した。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

楽しい雰囲気作りを心がけた。自分が楽しんでる姿を見せるように心がけた。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

社会人のリハーサルのようなものだと感じた。仕事も学生団体の活動も本質的には同じで、どれだけ人やお金を気持ちよく集められるか、その工夫ができるか、それに尽きると感じた。周りの方々へはより感謝の気持ちを持つようになった。

参加者への影響

100人に話せば100人が面白くなってくれ、中には一緒にやりたいと声をかけてくれる人もいた。なんらかの刺激は運営・参加者に与えられていると思う。しかし、持続的に仲間として続けていく難しさも感じた。飽きてしまうのか、大変すぎるのか、私のマネジメントが下手なのか、要因はいくつかあると思うが、途中で活動を抜けるといったネガティブな変化もあった。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

行動を起こすと色々大変なこともあるかと思いますがまずは行動することが大切だと感じた。そしてうまくいった理由、いかなかった理由の分析を行うことも大切だと感じた。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

他の学部の子とのネットワークができた、学校公認の組織として周囲の信頼を得ることができた。

自分は何のくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● スポーツに物申す！！～スポーツが絡む問題について考えよう～ (19006A)

T-ACT プランナー 後藤 将志 (心理学類3年)

活動目的

スポーツに関する問題について意見交流する場を設け、好き嫌い、得意不得意を超え、さまざまな視点からスポーツについて考える。

5人くらいのグループを作り、トピックについて雑談をする。各グループにはファシリテーターを入れ円滑に進められるようにする。意見をまとめるというよりも多様な意見があることを受け入れるという体験をしてもらう。活動を通して、入学したばかりの新入生を含む参加者が自分の所属を超えたコミュニティや人脈を作る機会を提供する。

具体的な活動計画

タイムスケジュール

- 17:30 会場作り開始 (会場は未定)
- 18:00 参加者受付開始 (18:30まで)
- 18:30 はじめのあいさつ
- 18:35 アイスブレイク (内容未定)
- 18:50 比較的簡単に考えられるテーマについて話し合ってみよう
ex. スポーツの魅力って何? e スポーツはスポーツ?
- 19:00 休憩 (10分間)
- 19:10 深く考えられるテーマについて考え、話し合ってみよう
ex. 五輪の環境問題はどうか? 義足で五輪に出るのはどうなの?
- 19:30 まとめ
- 19:30 終了 & 片付け開始
- 20:00 完全撤収

準備片付けはオーガナイザーと企画者が行う。参加者は18:30までに会場に集合、19:30解散予定。

内容について

あいさつでは企画の目的、企画内容、注意点の説明を行う。アイスブレイクではまず1グループ3～5人のグループを作る。自己紹介後軽いレク用のゲームを行い、参加者が話しやすくなる空気を作る。そのグループで本題のテーマについて話す。テーマは前半が(1. パスケットで車椅子の人と同じチームになった。あなたならどうする? 2. スポーツの魅力とは? 3. ブラック部活動について 4. 東京2020の注目ポイントは? 5. eスポーツはスポーツっていえる? 6. 男女合同体育は何年生まで?) から1つ、後半が(1. 甲子園と女子 2. 障害者スポーツと利益 3. 義足でのオリンピック出場 4. 武道とスポーツ 5. オリンピック開催における環境負荷 6. スポーツマンシップとは?) から1つを選び話す。どのテーマにするかはサイコロを投げて出た目のテーマについて話す。各グループにはファシリテーターを1人いれ、全員から意見がもらえるようにする。話す内容もテーマに則していればどんな立場で話しても良い。最後のまとめでは各グループで出た意見を軽く紹介する。また感想があれば言ってもらおう。今回はあくまで多様な意見があることを体験するのがモットーなので結論をまとめるということはない。

本企画は学生団体 ADD JUST の活動として実施する。

活動場所

中央図書館2階 (セミナー室 or チャットフレーム)

活動期間

2019/04/18～2019/06/30

対象

学生

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O: 西美乃里 (国際総合学類3年)、池田朋夏 (障害科学類3年)、鈴木葵 (教育学類4年)、山下裕行 (数理工学質科学研究科博士前期課程2年)

P: 澤江幸則 (体育系)

活動報告

実際の活動内容

タイムスケジュール

- 17:30 会場作り開始（会場：中央図書館2F チャットフレーム）
- 18:00 参加者受付開始（18:30まで）
- 18:30 はじめのあいさつ
- 18:35 アイスブレイク（自己紹介グランドスラム）
- 18:50 比較的簡単に考えられるテーマについて話し合ってみよう
スポーツの魅力って何？eスポーツはスポーツ？ブラック部活動について。
- 19:00 休憩（10分間）
- 19:10 深く考えられるテーマについて考え、話し合ってみよう
女子と甲子園について。義足で五輪に出るのはどうなの？障害者スポーツで利益。
- 19:30 まとめ
- 19:30 終了 & 片付け開始
- 20:00 完全撤収

本企画は学生団体 ADD JUST の活動として実施した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

参加者が思ったより集まりませんでした。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

ポスターや SNS を用いて宣伝を行ったが、あまり効果がないように思いました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

まず、やりたいことはできたという感じでした。スポーツについて多角的に考え、様々な知識を参加者の肩と共有するという当初の目標は達成できたため、満足感がありました。テーマや内容についても面白いと言ってもらえたので自信にはなりました。しかし、参加者の人数があまり集まらなかったこともあり、もっと何かできたのではないかという思いも生まれました。企画・運営を主導するのは初めてだったので、よかった面、改善できた面、共に経験にはなったと思いました。

参加者への影響

オーガナイザーは学生団体として一緒に活動している方達なので、コミュニケーションや仕事の効率化が以前よりよくなっている気がします。また、オーガナイザーも輪に入って楽しんでいるように見えました。

参加者についてはそもそも知識がある方だったので、知識の提供はできたかどうかわかりませんが、楽しんで話をされているように見えました。

未来のプランナーに伝えたいことがあれば自由どうぞ

1人で頑張ろうとせずに仲間を頼りながら焦らず進めていくことが成功の秘訣だと思いました。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

宣伝や広報がとてもやりやすかったです。またプランについても一緒に考えていただきました。経験値の低い私でも色々な話を聞くことで埋めることができました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

T-ACT サポーター特別ワークショップ (19007P)

T-ACT プランナー 黒田 卓哉 (学生部)

活動目的

T-ACT サポーターとは、T-ACT の企画を学生の立場で支援してくれる学生さんたちです。彼らが T-ACT を利用する他の学生や T-ACT そのものの支援を行うにあたって、連携して支援にあたれると良いでしょう。そして、効果的な連携のためには、お互いの相互理解が不可欠であると思います。

そこで、T-ACT サポーター同士の相互理解を促し、親睦を深めるためのワークショップを企画します！

T-ACT サポーターが連携する相手はサポーター同士だけではなく、T-ACT スタッフとも連携が求められます。また、T-ACT 推進室員との相互理解・親睦が深まることも理想でしょう。学生にとっては頼れるリソースが増え、教職員側にとっても生き生きとした学生の実態に触れることができるといったメリットがあります。ですので、ゆくゆくは学生とスタッフ・教職員が交流できる場となることを願っています。

ですが第一回目の今回は、対象として主に T-ACT サポーターである学生を想定します。スタッフ・推進室員にはワークショップでの補助をお願いするかもしれません。

もちろん、T-ACT サポーターであるかどうかにかかわらず「T-ACT に興味がある」「プランナーなんだけど参加したい」という学生の参加も歓迎です！

具体的な活動計画

【日程】

1 回目：6 月 18 日（火）18：15～19：30

2 回目：6 月 20 日（木）13：45～15：00

（参加したくとも予定が合わない方がいないように同一の内容を 2 回実施。2 回参加可）

【申込】

本ページ一番下の「参加希望・問合せ」から、下記の情報を記載してメールで申し込んでください。

- ・氏名
- ・所属・学年
- ・参加希望日程（1 日だけでも両日でも可）

【プログラム】ファシリテーター：黒田卓哉（T-ACT コンサルタント）

20分）座学：仲良くなるための要素（自己開示の大切さ、話の聴き方のコツなど）

10分）アイスブレイク：その場で遊び感覚でできるレクレーション！

20分）ワーク 1：偏愛マップを作ってみよう！

偏愛マップとは、他者と共有するという前提の元、「自分の好きなもの」を書き並べたものです。書き出し方は自由で、地図のように描いても、リストのように整理しても、樹形図のように系統立てても自由です。

この機会に楽しく自分の好きなものを振り返りましょう！

20分）ワーク 2：偏愛マップを楽しく紹介し合おう！

1 対 1 で偏愛マップの交換歓談会を行います。いろいろな人と自分の好きなものを語り合いましょう！

5分）まとめ

ワークの感想をシェアしましょう。

【みなさんの持ち物】

自分の身一つで大丈夫。お気に入りの筆記用具などあれば持参いただいても OK です。

【注意事項】

- ・激しく体を動かすものではないのでケガなどの心配は少ないですが、学生教育研究災害傷害保険（通称、学研災）への加入をお願いします。

詳細：https://www.tsukuba.ac.jp/campuslife/gakkensai/

- ・自分のこととお話する場になります。一方で、話したくないことを無理に話さなくてもかまいません。無理のない範囲で自分のことを話すよう、心づもりをお願いします。
- ・途中で気分が優れなくなった場合など、途中退室も可です。

活動場所

1D 棟 3 階会議室（検討中）

活動期間

2019/05/15～2019/06/30

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：古畑翼（人間総合科学研究科博士前期課程1年）

P：プランのため不在のまま実施した

活動報告**実際の活動内容**

T-ACT サポーターを中心に、T-ACT に関わってくれた学生や T-ACT スタッフのみなさまと、交流を中心にしたワークショップを実施した。

2 回開催をしたが、いずれも同じプログラムで実施した。

【日程】

1 回目：6 月18日（火）18：15～19：30

2 回目：6 月20日（木）13：45～15：00

【場所】

1D 棟3 階会議室

【プログラム】

20分) 座学：仲良くなるための要素（自己開示の大切さ、話の聴き方のコツなど）を簡単に講義した。

10分) アイスブレイク：その場で遊び感覚でできるレクリエーション

バースデーチェーンとアイコンタクトと呼びかけをしながらのキャッチボールを行った。

20分) ワーク1：偏愛マップを作ってみよう！

偏愛マップとは、他者と共有するという前提の元、「自分の好きなもの」を書き並べたものである。書き出し方は自由で、地図のように描いても、リストのように整理しても、樹形図のように系統立てても自由。参加者各自で好きな文房具を用いて、A4用紙1枚分のマップを描いてもらった。

20分) ワーク2：偏愛マップを楽しく紹介し合おう！

1対1で偏愛マップの交換歓談会を行なった。参加者同士、自分の好きなものを共有することで、お互いのことを知れ、楽しい時間が過ごせたようであった。

5分) まとめ

ワークの感想をシェアしあった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%**実施中の困難と解決策****実施中に困ったこと**

スケジューリングおよび準備にあたっての関係各所への相談が、プランナーの独断によって先行しがちであった。

スケジューリングに関しては、プランナー多忙により手が回り切らず、判断がギリギリになってしまった点が反省点である。

関係各所への相談については、プランナーの判断でも良いだろうと甘んじている意識もあったため、判断する前に大学事務や学生との相談を行うことを意識し直す必要があっただろう。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

いずれについても、T-ACT スタッフによる助言をいただきながら実施することで、自らに不足している点を補うことができた。複数の視点から企画を見ることで、企画の円滑な進行につながるということであろう。あらためて、深く感謝いたします。

一方で、プランナーの多忙さによって、スケジューリング通りに事が進まない点については有効な打開策を取ることができなかった。プランナーのタスクを協力者に配分することで、多忙さを補い、全体を円滑に進めることが理想的である。しかしながら、全体のスケジューリングを見積もったうえで、協力者を集め、コミュニケーションを取り、その中でタスクをどのように配分するかを考える、ということそのものにもリソースが必要である。そのリソースすら捻出するのが難しいという事実は払拭しがたく、予防的に対策を取るしかないと考えられる。すなわち、企画申請前のリソースの見積もりをよく考えたうえで、企画実施そのものの是非を検討する必要がある。

特に教職員によるプランの難しさはこの点にあると言える。企画実施の要点をおさえていても、その要点を満たすための行動をとるリソースがそもそもないのである。すなわち、T-ACT のコンセプトとは逆行することを述べてしまうが、「気軽に始める」ことが実は非常に難しいのである（ただし、その難しさはT-ACT の支援制度とは関係のないレベルの難しさと言える）。そういった問題に実体験をもって気づけたという意味では、非常に得るものある活動であった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

初めてのプランナー経験であり、企画を主導することの大変さをあらためて認識し直した。プランナーは自ら企画を動かしていかなければならない。その際の判断や行動は、いかなる支援を受けようとも、最終的にはプランナー自身の主体性に委ねられる。すなわち当然のことではあるが、協力者との良好な関係を築き、企画実現のためのタスクを分散し、プランナーを含めた個人の負担を軽減させるというマネジメントを行っても、プランナーが実行しなければならないタスクは存在する（そもそもマネジメントこそプランナーのタスクである）。そういったタスクをしっかりとこなしながら企画を実行していく、他の企画のプランナーの偉大さをあらためて感じる。だからこそ、コンサルタントの役割の中でも、マネジメントを上手くやれるための助言、およびマネジメントするリソースを注ぐだけのモチベーションを支えるという2つは、非常に重要な要素であるとあらためて認識できた。



参加者への影響

本企画の目的は、T・ACTサポーター同士の仲をより深めるということにあった。参加して下さったサポーターは、サポーター同士のみならず、プランナー経験者の学生とも楽しい時間を過ごしてくれたと感じる。また、T・ACTスタッフの参加も叶い、サポーターとスタッフとでより打ち解けることができたと言えよう。反省点としては、全てのサポーターの参加は叶わなかったことが挙げられる。また、今回のワークショップのみで関係性が最高に親密になるということはなく、これをきっかけに普段の生活の中での交流をより深めてほしいと望む。その意味では、こういった1回の企画を行う以上に、普段の交流をどのように充実させるかを考えることこそ、真に重要なことと考えている。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

今から何かを為そうとする皆さんは、その「やってみたい!」という気持ちを持つことそのものがとても尊いことだと胸を張ってください! それを実際に行っていく中で、数多の苦勞が待っています(断言してしまいます)。「気軽にできないじゃん!」と思うこともたくさんあります(これも断言してしまいます)。私たちはその苦勞を乗り越えられるよう、全力でサポートをしますから、T・ACTを遠慮なく頼ってくださいね。

T・ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

場所や物品の提供をいただいたのは本当にありがたいことと認識し直しました。また、企画を行う上で状況を気にかけてくださる方々がいるというのは、私が思っていた以上に心強いことなだと体感しました。あらためて、ありがとうございました。

自分はこのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5

活動目的

まだ生物の一般的理解度はさほど高いとは言えない。生物学者が生物学を人に伝えるときに事実を伝えて覚えさせるのはよくあるパターンだ。いわば教科書がそのマニュアルだ。しかしその事実を伝えるだけでは生物学の魅力、社会へのつながりは十分に理解できないだろう。

本企画ではアートにより作品の背景の中で生物学の事実を伝えることができると考えている。そして生物学の魅力をも十分に引き出しビジュアル化するという芸術的表現によって、生物学という専門的な内容を人の感情に訴えることができると思う。加えて、地域に広く広めて展覧会を行うことで地域の活性化を生み社会貢献をしたいと考えている。

また筑波大学は総合大学でありながら周りの学類がなにをしているのかということが現状ではよくわからないという難点がある。せっかくの開かれた大学であるため、他学類感での交流により学群を超えた化学反応を起こすことで1つの専門分野ではできない深いクリエイティブ作品を制作することを目的としている。

具体的な活動計画

先も述べたように生物の概念をわかりやすく噛み砕き、また美しく芸術作品として展示することで周囲への生物の理解度を高めることを主な目的としその上で他学類間との交流を大切にしている。

これまでに何度も生物学類生と芸術学群生で、ミーティングを行いプレゼンや話し合いからインスピレーションを得ている。

よって春学期の2019/7/7に panasonic 展示室渋谷区100BANCHIにて展示を行う。生物の普及を主な目的としている。そのほかに東京にもキャンパスがある筑波大学学生が関東圏といった広い地域の中で展示を行い地域を活性化することは非常に意義のあることだと考える。

7/7の展示時間について

準備開始 8:00

展示会開始 11:00

展示会終了 17:00

片づけ終了 19:00

展示内容についてく多少の変更・追加可能性あり

インスタレーションによる巨大展示 (プロジェクター等使用)

遊べる作品展示 (3Dプリンタ等使用)

アプリ・ゲーム展示 (ipad applepencil 等使用)

空間可視化作品 (特殊なスクリーン等使用)

映像作品展示 (モニター等使用)

絵画作品 (アクリル画)

活動場所

つくば・東京

活動期間

2019/06/01～2019/10/31

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：島田千聖 (芸術専門学群3年)、佃優河 (情報メディア創成学類2年)、水木陽菜 (生物資源学類3年)、大森功太郎 (情報メディア創成学類2年)、野原大揮 (生物学類3年)、田口将大 (生物学類3年)

P：村上史明 (芸術系)、臼井健郎 (生命環境系)

備考

生物系の知見は臼井健郎 (生命環境系) 先生に、芸術系の知見は村上史明 (芸術系) 先生にお願いしました。そこでフィードバックをもらいつつ、展示内容に不備がないように致します。

活動報告

実際の活動内容

2019/7/6-13に panasonic 展示室渋谷区100BANCHIにて展示を行った。生物の正しい知識の普及を主な目的とした。

東京にもキャンパスがある筑波大学学生が関東圏といった広い地域の中で展示を行い地域を活性化することは非常に意義のあることだと考えたためだ。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- 1 展示の台が当日うまく立たず困った。
- 2 チームのメンバーのやり取りや意識が統一できなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- 1 チームメンバーの協力により材料の買い足しや組み立ての手伝いなどを役割分担することでなんとか展示の3日目からは想定していた什器を使用することができた。
- 2 チームでやってる上で意識の統一は非常に重要なものにも関わらず、やるきの差に個人で違いがあった。反省点としてはミーティングがリモートが多かったり仕事の役割に差があったためだと思う。当初の志から意識が離れてしまったメンバーは残念ながら秋には脱退することになった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

チームでやることの大変さや、一般の人に伝える難しさを知った。チームメンバーの意識統一が難しく、作品制作以外の部分でも人として成長しなければいけない部分をたくさん発見した。一般に伝える難しさというのは、本プロジェクトでは地域貢献を目的としているがどのようにすればより広い人に伝わるのかを考えるのとても重要であり難しいと感じた。

参加者への影響

東京で展示も行ったことにより幅広い層に作品を見せることができた。当日は約6000人の大勢の一般客がきて作品を見てくれたことにより我々の作品展示への思いの強さや自身にもつながった。普段展示などを行ったことがない生物系のメンバーからは「この展示を通して作品を作る意義や展示による地域貢献の重要性を強く感じてとても楽しかった」と言ってくれたこともありメンバー内の心境の変化も感じた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

本企画の未来のプランナーは自分になってしまうので、未来の自分に言うとなれば時間管理やチームメンバーの役割分担の明確化などをしっかりと企画を成功させるように努力してほしい。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

書類の作り方を丁寧に教えてもらったので、excelの作り方や予算の管理など今後社会に出た時とても大事なことを教えてもらった気がします。普段はデザインやプランニングしかやりませんが、チームでやる時は予算案が必要だったり誠実な態度で周囲の協力を仰ぐなど他にも重要なことが目に見えてきました。

要望としては最初の説明時に説明されたことに加えて、後々に情報が小出しになっている部分もあると感じました。聞けなかった自分たちも非常に悪いのですが、最初の説明で全部資料に載っていたらありがたいなと思いました。例えば販売元はモノタロウ優先などや excel シートの見本などを最初の資料にすでに載せておいてくれると今後のチームも作りやすいんじゃないかなと思います。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

● もっと、インプロをやろう！（19010A）

T-ACT プランナー 岩川 光一郎（教育研究科修士課程2年）

活動目的

2018年度下半期「インプロをやろう！」を実施しました。その結果、筑波大学において、インプロを紹介するという役目は果たせたと思っています。

そこで、次に、インプロを活用する。という視点で、インプロの持つ人と人を「繋ぐ」役割を体験するだけでなく使ってみるという視点を持つためのワークショップを行っていきます。

あいかかわらず、楽しく温かい交流の生まれるワークショップにしていきたいと考えています。

具体的な活動計画

7/10（水）・7/17（水）・7/24（水）にかけて3回のインプロワークショップを行います。いずれの日程も時間は18：30～20：30で、場所は文系修士棟8B210です。

ワークショップでは、理論とワークを1対1で配置して行っていきます。

ワークショップのファシリテーターは、申請者の岩川が行う予定ですが、事前にインプロのファシリテーターの見習いを募集し、一緒にファシリテートしたり、ワークごとに分けてファシリテートするような試みもしてみたいと思っています。

前回の「インプロをやろう！」ワークショップでは扱わなかった、相手を動かす視点のワークを多めに取り入れて、ファシリテーションという視点でインプロをとらえていくようなワークを行います。

人に指示をしたり反応をしたりするワークを行っていきます。

また、リーダーシップについて考えるワークも行いたいと思っています。

リーダーシップは、集団において一定にならないというモデルを示すことができたらいいと思っています。

対象者は、広く一般の方でインプロに興味を持っていただける方を対象にしたいと思います。

<各回の大まかなワークショップの流れ>

第1～3回目共通部分（7/10・7/17・7/24）

『コミュニケーションの3段階』

①伝える②受け取る③続けるに関するワーク
例)

1. 拍手回し（円になって拍手を隣の人に回す。受け取った人が次の人に回す）
2. ボール回し（円になりキャンディーボールを隣隣に一定のリズムで回す）
3. 「あなた」「はい」（円になり円の中の誰かに「あなた」と呼びかけ呼ばれた人が「はい」と答え、呼んだ人が「はい」を聞いたなら「はい」といった人のところに歩いていく。歩いてくる途中で「はい」と答えた人は「あなた」と呼ぶ、以後繰り返す）
4. ランバージャック（木と木こりがある。円になり3拍子で、木「ウォー（木が立つ動作）」きこり（木の両隣の2人）「ウォー（木を切る動作）」木「ウォー（倒れる動作）」倒れた先にいる人が新たに木になり立ち上がる。これを繰り返す。）

『コミュニケーションを続ける』

インプロのイエスアンドの考え方について

例)

1. クイックドロウ（2人組で、A4用紙に、シンプルな目を2点書き、一筆ずつ書きポートレートを描く。ポートレートが出来上がったとどちらかが判断したら、一文字ずつ書き、ポートレートの人物に名前を付ける。）
2. 知ってるよ（お題に対して、知ってるよと言って話を続ける）
3. 私は木です（5人くらいで、1人目が「私は木です」と言い手を広げる、2人目から順番に木の周りに「私はリスです」等言って、木にくっつくなど、かかわっていく。）回によって行う内容（次のA.～J.のうち1つか2つ参加者の様子を見て行う）

A. 「リーダーシップ」

例)

1. ミラー（2人組で、1人の動きを、もう1人が鏡として関わる）
2. 主人と従者（2人組で、1人が手をかざし、もう1人が手のひらを顔の動きとしてついてゆく）
3. プライドウォーク（1人が目を閉じて、指先の動きでもう1人がついていく）

B. 「コラボレーション」

例)

1. シェアードストーリー（3人のうち2人が、指揮者役にさされた人が話をして物語を作る）
2. ワンサウンド（2人で、一音ずつで話す）

3. ワンボイス（10人くらいで一斉にしゃべる）
- C. 「想像力の共有」
例)
1. ブラックボックス（2人組で、1人が箱を渡し、物を出させる。出したらそれが何かを言ってもらう。言ったら捨ててもらおう。）
 2. ワンワード（2人で、一文節ずつ話して物語を作る）
- D. 「ファシリテーション」例)
1. 「はい」「いは」（3人組で、2人が手のひらをミルフィーユ状に重ねて、もう1人が、「はい」か「いは」を言う。「はい」なら一番下の手が一番上に、「いは」なら一番上の手が一番下に移動する。「どん」と言ったら、一番下の手が上から叩く）
 2. あとだしじゃんけん（じゃんけんのルールを（勝ってください・負けてください・あいこにしてください）など指示をしながらリアクションをしながらじゃんけんをしていく）
 3. 芸術家（モデル・粘土・美術家役を決めて、粘土に触れずに、モデルの体の形を作るワーク）
 4. スピットファイヤ（一人が話をしていて、周りの人が無関係な単語を言い、言われた瞬間にその単語を話している人が言わなければいけない）
 5. ピョピョ（1人が3人に対して話をしながら、それぞれにアイコンタクトを送り続ける）
- E. 「正当化」
例)
1. 解決社長（5人くらいで一人が社長。社長に周りの社員が問題を持ち込む問題に対して必ず「それはちょっといい」と言って解決策を言う）
 2. ディグジットストーリー（2人組で1人2枚計4枚のカードを裏向きで引き、カードに書かれた絵を、1枚ずつ開けて、連作でストーリーを話す）
 3. 占い師（2. のカードを使い架空の悩みを占い師に打ち明け、カードをめくった瞬間にタロットのように運命を話す）
- F. 「ステイタス」
例)
1. トランプによる（トランプをインディアンポーカーの要領で頭に掲げ、同窓会のシーンをやる。）
 2. 目の大きい人小さい人（目がおっきくてゆっくりしゃべる人グループと、目が小っちゃくて早口でしゃべる人グループで、社長たちの集会のシーンをやる。）
- G. 「エンダウメント」
例)
1. 他人の見立て（2人で演じる。1人が【相手が自殺しようとしているのではないかと】仮定して関わるなど、相手を仮定して関わる）
 2. 物の名前を言う（周りにあるものの名前を言い、慣れてきたら、物の使い道を勝手にでっちあげる。）
- H. 「身体表現」
1. 歩く・止まる（みんなで歩いて誰かが止まる。止まった人に集まる。全員集まったら再び動く）
 2. 近くを通る（3人でお互いの近くを通り過ぎる動きをする）
 3. 即興ダンス（1人が話をして、3人でその時の身振り手振りを覚えておいて、その動きを曲に乗せて行う）
- I. 「今にいる」
例)
1. なにやってるの（2人で、例えば窓を拭くような動きを1人がする。もう1人が「なにやってるの」と聞く。窓を拭いている人は、窓を拭く以外のことを言う）
 2. チェンジングオブジェクト（物を使った動きをする。そのものの名前とともに隣の人に渡す。もらった人はその動きをして、そのうちに違うもの・ことに変わったら次の人に渡す）
- J. 「パフォーマンス」
例)
1. 入り口と出口（あるシーンを演じる。舞台上に3人出てきてはいけない。3人目が出てきた瞬間に誰かが舞台からいなくなる）
 2. フリーズタグ（1人がストップして、体で何らかの形を作る、それに誰かが関わる、シーンを始める）
 3. 小さな生き物（2人で、1人が何かやっていると小さな生き物に話しかけられる。見つけたら、その生き物を決める。その生き物は解決したいことがあって、一緒に物語を作る。）

活動場所

文系修士棟8B210で行います。

活動期間

2019/05/15～2019/08/31

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：大林潤子（教育研究科修士2年）、沢田遼子（システム情報工学研究科博士前期課程2年）、山本響平（障害科学類2年）

P：茂呂雄二（人間系）

備考

本企画の予算については、すべて無料で行います。
 （会場費：学内で行います・講師料：プランナー＋参加者がワークショップを運営します・広報費：T-ACTの援助を受けてできる範囲で行います）

活動報告書**実際の活動内容**

昨年実施の「インプロをやろう！」3回連続インプロワークショップに続き、今年度は「もっと、インプロをやろう！」3回連続ワークショップを行った。

<インプロとは？>

インプロとは、①台本のない演劇②即興演劇の俳優のための訓練をさす言葉で、近年は、②の訓練がコミュニケーションやコラボレーションなどの様々な能力を開発するということから、企業研修や、学校場で応用されている。そのように様々なものにインプロを応用することを、応用インプロと呼ぶ。特徴としては、構成度が低く、自己開示を必要としない、時間的に短い、心理的障壁が低いワークが多数あり、決まった正解があるわけではないので、参加者それぞれがそれぞれの視点で学びを得る活動が可能である。

<もっと、インプロをやろう！ワークショップ>

本ワークショップは、このインプロを演劇の手法としてではなく、生活に応用してもらいたいという視点での応用インプロワークショップを行った。

今回の計画では、1回目のワークショップで、2回目、3回目のファシリテーターを募るということを考えていた。その予定通り、第1回のワークショップの参加者のうちの3人が、第2回目、第3回目のファシリテーターになった。

第1回目は、プランナーが1人でファシリテーターを行った。

第2回目は、プランナー＋3人

第3回目は、プランナー＋2人の共同ファシリテーションで行った。

<第1回ワークショップ>

第1回のワークショップの目的は、参加者の皆さんにインプロを知ってもらうことと、次からのワークショップでファシリテーターをやってみたいという人をさがすことであった。

2時間のワークショップで、12人の参加で10種類のワークを行った。基本的には、

- ①ワークについての説明
- ②実際のワーク
- ③振り返り

の3つを1サイクルとして繰り返した。

<第2回ワークショップ>

参加者12人（ファシリテーター4人、院生1人、学類生3人、高校生4人）で行った。

第2回目を行うにあたり、ファシリテーターの打ち合わせを行った。どのようなワークをファシリテーションしたいか、どのような順番でワークを行うかなどについて話をした。



実際は、9つのワークを4人のファシリテーターで分担して行った。打ち合わせとほぼ同じ流れであったが、ワークの要素をその場で付け加えたり、省略したりという微調整をその場でファシリテーター間の感覚で行った。

<第3回ワークショップ>

参加者19人（院生3人、高校生5人、小学生1人、中学生2人、学類2人、社会人3人、ファシリテーター3人）で行った。第2回目同様第3回目についても3人のファシリテーターによるワークショップを行った。

第3回目は今までで1番人数の多い会であった。しかも、非常に多様性があり、車椅子の参加者があったことから、打合せしていたインプロのワークをワークショップの場で組み替えて、座った形でのみ行うワークに急遽差し替えたりした。

また、最初親御さんと一緒に来られたお子さんがやりたくないということで、見ていたが、いつの間にかやりたくなくなってみんなで楽しくワークを行っているという状況が生まれて非常に、運営側に学ぶことの多いワークショップになった。



企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒120%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

2度目の企画だったので、手順等で特に困ったことはなかったです。強いてあげるならば、修士論文が忙しすぎて、なかなか企画に集中できなかったこと。

アクシデントとしては、教室を抑える前にポスターを作ってしまった、使用教室に予定が入っていたこと。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

教室は、知っている先生だったので、お願いをしに行きわけを話して無事教室の使用を譲っていただけました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

2年連続でやらせていただいて、1年目は、企画をおっかなびっくり進めていくという部分が大きかったですが、2年目は、企画に関してやることは全部見えていたので、企画の中身について様々考えることができました。

具体的には、1回目は自分自身が全て企画、広報、実施まで、やったのですが、今回は、広報は前回やったことをそのままやって、ポスターなども人に託して貼ってもらったりと機械的におこなうことができました。また、実施については、ファシリテーターを複数に増やせた経験が非常に大きかったと思います。これは、やはり経験値と仕事の分散により余力ができたことで幅が広がったということが言えると思います。

自身のとりあえず全体像は把握しておかないと動けないという性格にも気付きました。逆に全体像が見えていれば、大胆に他の仲間と協働できるということも分かりました。

一つの活動を地域やコミュニティーに紹介したり根付かせていくのは非常に時間も労力もかかるが、今回のような活動をもっと長期間行っていくと確実に認知度は上げていくことができるということに気づかされました。

参加者への影響

初めてインプロのファシリテーションをしていただいた方に様々きいてみたのですが、やはりやってみたということが、非常に大きな経験になったし今後またインプロのファシリテーションを行って以降という気になっていただけそうです。

また、企画を行う際の周りの友人の反応も非常に好意的で「あーまたあれやるんだ。何か手伝えることは無い?」「楽しみにしてるよ」というような関わりをしていただきました。

未来のプランナーに伝えたいこと

とにかく動き出すこと、期限を決めることで全てが転がり出すような気がします。

期限に向けて動くことで様々できたりできなかったりすることをチョイスしながらあるべき形の活動になっていくと思います。

せっかくの大学生活自分で、又は友人に乗っかってアクションするという経験は自分の人生において非常に重要な要素になると思います。

もし、何かやりたいけど具体的なものがないという人も全然問題ありません。

何かやりたいという気持ちを持って T-ACT のオフィスに行けば全てが転がり始まります。是非、あなたの学生生活に T-ACT を！

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望など

とにかく人脈が広がりました。学内で歩いていても知り合いに会わないことはないというくらいに知り合いが増えました。

また、学外にも人脈の輪は広がっていて、今年の活動報告会で知り合った方から、今回、2つの案件をいただいて、インプロを用いた企画が実現しています。

学内での活動が、どんどん外に広がって行き、自分自身の意識も社会や地域に向いて行きました。今まで難しいと思って立ち止まってしまうようなことも実は地道な作業の繰り返しで成し遂げることができるということを実感を持って知ることができました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



つくばランウェイプロジェクト (19011A)

T-ACT プランナー 杉山 理佐 (芸術専門学群2年)

活動目的

生きることに重要な三つと呼ばれる衣食住のうち「食」と「住」に関しては多くのサークルやコミュニティがあるのに対し、「衣」に関しての集いがここ筑波大学にはないなと感じ、筑波大学で衣服に関するイベント、ファッションショーを開催したら今まで出会えなかった人との交流が生まれるのではないかと思い発案に至った。

また、衣服に興味のない人でも楽しめるようなパーティのような形式も取り入れ様々な人と出会えるイベントにできたらいいなとも考えている。

具体的な活動計画

まず最初は教室内で筑波大生を対象とした小さなファッションショーを開けたらと思っている。最終的には屋外での、学外からも集客をした開催を目標としている。

会場

教室：5C507教室

日時

金曜日に開催

・7月26日

・19:00~

設備

・ランウェイの形は「つ」

お客さんの周りをモデルが歩く形式で、足場を組む必要がないため、安全。入場の導線と、ランウェイが重ならないように注意して道を引く必要がある。

・照明

フットライト、スタンドライトは学生生活課から借用

・音響

スピーカーを T-ACT から借用

・パーティーション

芸祭・事務班から借用

・軽食

コストコで購入

収入源

・入場料を取る(500円程度) その他未定

広報

・ポスター(メインビジュアル 杉山担当)

・ツイッター(質問箱の設置 小野田担当)

・Facebook(今後、学外にも宣伝していくときに利用 小菅担当)

申請が通り次第早急に広報を開始する。

原則、モデルとデザイナーはチームになってもらって応募、出場してもらう。洋服を作るための機材や材料は出場者もち。

1 チーム最低1コーデ以上のパフォーマンスからテーマの設定をして、それに沿ってコーディネート(服)を作ってきてもらう。服を一から作らなくても、リメイクや既製品の組み合わせでテーマに沿ったものでも可。

その他

・プロジェクターでテーマに沿った映像と音楽を流しながらショーをしたいと思っている

・ファッションショーを利用してファッション好きとつながることが目的なので交流の場も作りたい。ショーの後にモデル、デザイナー、観客が交流できる軽食会なども予定。

当日のタイムスケジュール感

17:00~ 会場設営開始

17:30~ 控え室解放(モデル、デザイナーの準備開始)

18:15~ 音響、照明を含めたりハーサル

19:00~ お客さん入場開始

19:20~ ファッションショー開始

20:00~ ショー終了 軽食会開始

20:40~ 終了

活動報告の形として

- ・ T+ での展示
{今の段階では、制作された衣装の展示とランウェイを歩いているシーンの写真を展示する予定。}
 - ・ ZINE 制作
{位置付けとしては、“図録”のような位置付けを想定している。デザイナーが何を思って服を作ったのか、普段の衣服に対する意識などをインタビューし、まとめることも決まっている。}
- をする。

活動場所

ミーティング場

基本、体芸図書館のユーリカ（埋まっていた使えない場合は芸バチ、体バチなど臨機応変に変更をする）

ショー会場

5C507教室

交流会会場

芸バチ

活動期間

2019/06/01～2019/11/01

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：櫻村宙子（芸術専門学群 2 年）、小野田女日名（芸術専門学群 2 年）、松浦妃那（芸術専門学群 2 年）、小菅静流（知識情報・図書館学類 1 年）、成田和香（看護学類 3 年）

P：原忠信（芸術系）

備考

企画を立ち上げるのは初めてですが、最終目標である屋外での開催が成功するようにまずは小さなところから頑張っていきたいと思います。

活動報告書

実際の活動内容

ファッションショーの準備・開催交流会の準備・開催

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

自分も仕事内容を把握し切れていなかったためメンバーに仕事を振るのが難しかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

最後まで解決はできなかったが、できる限りラインなどで「〇〇までに△△してください」などを伝える努力はした。次回もし、何かリーダーになったら、仕事内容を最初に予想して初めからこういう仕事はこの人に（例えば、お金関係はこの人に、設備関係はこの人に）と言ったようなことを決めてからやるといいのではと思った。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

初めて、自ら企画を立ち上げ、ショーと交流会自体は大成功を取められたことはとても喜ばしかったし、ことから何か自分のやりたいことで人を喜ばせられたらいいなと感じた。また、これをきっかけに、自分でも服を作るようになり、自分の世界が広がったことはとてもよかったと思う。

しかし、自分のリーダーとしての自覚の低さや、能力の低さから、そのあとは全く何もうまくいかず、メンバー達に不満が溜まってしまおうという事態になってしまい、悔しい思いも体験した。

全体を通して、これから何かを始めるときには責任感とやる気と思いやりを持って行動しないといけないのだなということを学べ、自分の成長の後押しをしてくれたと思う。

参加者への影響

当日参加してくれた人の中にも、私と同じようにこれを機に服作りを始め、続けて行きたいという人や、今回作ったものを売りたいという人などがいて、当初の目的だった衣服を通じた交流は生まれたと考えている。

一緒に運営してくれたメンバーも、イベントを立ち上げる大変さはなんとなく分かったのではないかなと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分のやりたいことを実現できるのがT-actです。やる気と責任感があれば大抵のことはうまく行きます。頑張ってください、応援してます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

自分一人では絶対に判らなかつたであろう、イベントに関するノウハウや人とのつながり（今まで何かを立ち上げてきたプランナーの二兎との繋がり）などが得られてとてもよかった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4



Tsukuba Research Project (19012A)

T-ACT プランナー 王 彦浩 (知識情報・図書館学類3年)

活動目的

本学では卒業研究などによる研究活動だけでなく、有志の学生による自発的な研究活動が行われている。しかし、他分野の研究活動をはじめとする学問に触れる機会が少なく、その魅力を十分に伝え合うことはできていない状況である。本活動では、自発的な研究活動を行なっている1～3年生が、各々の研究活動を発表し学生同士の交流の場を設けることで、学問領域の知見を広げ自発的な研究活動をより盛んなものにするとともに、多くの学問の魅力に触れることで、学びの場とされている大学での学習活動をより豊かなものにし、さらに、学生だけでなく、一般の方が学問に触れる機会をつくることを目的とする。

具体的な活動計画

6月中旬に研究活動を行っている1～3年生に声をかけ、参加者を募集し、8月上旬に一回目のイベントを行う。イベントは月1回程度開催し、参加する学生がそれぞれの研究内容について発表を行う。学生によるリベラルアーツを目指しているため、参加する学生は自身の研究を専門外の人にも理解しやすいような発表を行う。また、発表後には交流会を開き、学生同士が様々な学問領域についての意見交換を行う。さらに、学外の方にも参加してもらう為、SNS等を利用し、学内外に宣伝を行う。

具体的なスケジュールは以下に示す。

12:00～13:00	会場設営
13:00～15:00	プレゼン発表 (一人当たり5～10分)
16:00～17:00	交流会

活動場所

筑波大学サテライトオフィス (BiVi つくば)

活動期間

2019/06/10～2019/11/10

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：佐藤開 (工学システム学類3年)、小原慶吾 (工学システム学類3年)

P：佐藤哲司 (図書館情報メディア系)

活動報告

実際の活動内容

研究活動を行っている学生に声をかけ、参加者を募集し、イベントを開催した。

イベントに参加する学生がそれぞれの研究内容について発表を行った。学生によるリベラルアーツを目指しているため、参加する学生は自身の研究を専門外の人にも理解しやすいようなプレゼンになるよう心がけた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒50%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

宣伝を行い、参加者を集めること。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

授業の場で宣伝などを行った。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

人生経験においても貴重な経験となった。学会発表、就職活動、期末試験がある中、T-ACTにどう時間を割くかのタイムマネジメントに苦労した。一方、授業中の宣伝など、自身の強みにも気づくことができた。

参加者への影響

他分野への興味関心を示すようになった方もいた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

精神的にも体力的にも余裕がある時にイベントを開催すれば、不足な事態に対処できると思います。是非頑張ってください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT は夢や想いの実現を助けてくれるところです。本当にありがとうございました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3

● 菟玖波現代短歌会 (19013A)

T-ACT プランナー 竹下 太崇 (日本語・日本文化学類2年)

活動目的

第一の目標としては、短歌の面白さを知ってもらうことです。

短歌というと、古典的で、堅苦しいというイメージがあります。このイメージを払拭し、現代短歌という新しい日本文学に触れてほしいと思います。

短歌の特色は、大きく三つあります。

一つ目は、心をほぐしてくれること、二つ目は想像をすることの楽しさを知ること、そして三つ目は、自分や他人の詠んだ短歌を話しあうことで、新しい視点を得ることが出来ることです。

短歌の歴史は、和歌を含めると1300年もの歴史があります。

若々しい短歌の根底にある太古からの息吹に触れてみませんか。

最終的な目標としては、月に一回の歌会。そしてサークルとして発足することです。可能であれば、短歌についての勉強会も開こうと思っています。

また、短歌が皆さんの身近なものになればいいと考えています。

今回で現代短歌会は第二回となります。

前回の反省としては、大きく二つあります。

一つは、短歌会が身内のだけの短歌会となってしまう、短歌の面白さをあまり広げられなかったことです。

二つ目は、短歌は敷居が高いため、興味をもってくれた方がいても、参加してくれなかったことです。

これらの反省に共通する点として、広報力の不足と広報に対する知識の不足にあるとおもいます。

今回の活動では、短歌に興味のない方が積極的に参加できる短歌会を目指して活動していきたいと考えています。

この目標を達成するためには、短歌について知ってもらうことが大切であるとおもいます。前回の活動を通して、多くの人に物事を知ってもらうためには、Twitter が有効的であり、確実に短歌会の活動を知ってもらうためには、LINE が有効であることが分かりました。

この経験を生かして、今よりももっと積極的に SNS を使って短歌を発信していこうと考えています。

また短歌会に参加した方にも楽しんでいただけるように、作者の許可があれば短歌会で選ばれた歌を Twitter のアカウントに投稿するつもりです。

SNS での短歌会を充実させていくつもりです。

具体的な活動計画

主な活動内容としては、歌会の開催、そして Twitter での短歌の発信です。

歌会の内容

- 1、SNS やメールをつかい事前に自由詠、テーマ詠をそれぞれ 2 首あつめる。回収する歌は未発表の歌とする
- 2、歌会当日に歌だけが書かれた紙を配り、そのなかから好きな歌を 1 人 2 つ選ぶ。
- 3、順番に一人ずつ自分が選んだ歌について批評していく。
- 4、最後に歌の作者を発表し、歌の作者自身が歌の解説をする。
- 5、すべての歌会が終わったあと、すべての歌の批評や解説を行う。

当日のタイムスケジュール

開始～10分 挨拶、自己紹介やテーマ確認、

10分～1時間半 歌会

10分休憩

1時間40分～3時間(時間が許すまで) 批評会

Twitter の短歌の発信について

会員が作った歌を発表する

もしくは、短歌を募集し、批評する

会員の好みの短歌があれば、解説をつけて投稿する。

今後のスケジュール

隔週火曜日にミーティングを行っています。

6月 テーマと短歌会の告知、短歌の募集

7月 第三回短歌会開催

10月 テーマと短歌会の告知、短歌の募集

11月 第四回短歌会開催

11月 サークル申請予算について

収入

科目	細目	単価 (税込)	数量	金額	詳細
運営費		100	10	1000	運営スタッフによる実費
収入合計				1000	

支出

科目	細目	単価 (税込)	数量	金額	詳細
消耗品代	菓子代	500	2	1000	短歌会参加者に配布
支出合計				1000	

収支差額：【収入】1000－【支出】1000＝0

ただし、見学者は無料

活動場所

学内ならどこでも
可能であれば、2C403

活動期間

2019/06/06～2019/12/06

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：藤谷佳輝（日本語・日本文化学類2年）、瀬邊風馬（日本語・日本文化学類2年）、岡迪瑠（日本語・日本文化学類2年）、坂本茉優（日本語・日本文化学類2年）、山梨歩果（日本語・日本文化学類2年）、鈴木楨（日本語・日本文化学類2年）、奥智佳（日本語・日本文化学類2年）、小川竜駆（日本語・日本文化学類1年）、立石すみれ（日本語・日本文化学類1年）、巖村魁斗（人文学類2年）、布花原楓（日本語・日本文化学類1年）、廣間菜月（比較文化学類1年）、筒井飛丸（生物学類1年）、伊藤光星（人文学類1年）

P：清登典子（人文社会系）

備考

歌会について

- ・見学だけの参加もかまいません。
 - ・感じたこと思ったことなんでもおっしゃってください。
 - ・一か月前から歌会の告知や短歌の募集を始めています。
 - ・告知については Twitter や LINE といった SNS もしくは、構内にピラを貼っています。
- 何かわからないことがございましたらメールアドレスまたは、以下の Twitter のアカウントまでお願いいたします。

Twitter：@Tsukuba_tanka

この Twitter のアカウントは現代短歌会が T-act と企画として終了しても継続いたしますので、気兼ねなくご連絡ください。

もし運用が困難になった場合には、告知をした上で終了いたします。

基準といたしましては、1 か月間アカウントに一人しか短歌を投稿しなくなり、3 か月間更新できない場合でそれ以降、誰もツイートできないと判断された場合短歌会のアカウントを停止いたします。

歌会においては、お菓子やお茶を用意しています。気楽にご参加ください。

活動報告書**実際の活動内容**

2 か月に一度の顔を合わせた歌会

一か月に一度のディスコードを用いての歌会 Twitter による短歌の発信

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒80%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

会員の日程が合わず、歌会が開催できなくなったこと

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか
ディスコードでの歌会に変更した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自分の短歌を作るための技量が向上した。

また適切に短歌に対して、評を加えることが出来た。

組織の一番上の役割として、会員に適切な仕事分担ができるようになった。

参加者への影響

いつも歌会に参加してくれる人がふえた。

最初と比較しても、参加者の歌の技術が向上した。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分だけで企画を進めるのではなく、仲間と協力しながら、適切な仕事分担をすることで、より良い企画を作り出すことができます。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

黒田先生の適切なアドバイスのおかげで、短歌会を成功させることができました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感はありましたか?⇒4

茨城県 現代 短歌会

● あなたの小説が読みたい！——第十二回筑波学生文芸賞の作品及び一般選考委員の募集——（19014A）

T-ACT プランナー 三井 鴻志郎（心理学類3年）

活動目的

小説を書くこと・読むことに興味を持つ学生の活動及び交流の活発化を手助けしたい。またつくばに関わる、筑波大学外の学生との交流のきっかけにしたい。最終的にはつくばに関わる学生全体の創作活動の活性化を目指す。

今年度は昨年度より新設したテーマ部門を、筑波大学の標語でもある「Imagine the future」にかけた「未来」をテーマとした。これからの未来を担う若者に対してかけるテーマとしても、筑波大学のイメージとしても最適であると考えられる。

また、昨年度より開始した企業との協賛について、そのノウハウを確立して次世代に引き継いでいく必要がある。加えて、例年冊子の在庫を運営委員の家に保管していたが、これは個人への負担が大きいため、図書館に依頼して自由配布の場を設置するなどの対応策を考えている。

具体的な活動計画

週一回定期ミーティングあり

5月1日 作品募集開始

6月 一般選考委員（パーティシパント）向け説明会&選考体験会

7月 一般選考委員（パーティシパント）向け説明会

*説明会および選考体験会は中央図書館セミナー室で行う

7月15日 作品募集締め切り

8月 一次選考：集まった作品を筑波学生文芸賞運営委員（オーガナイザー）のみで選考する。

9月 最終選考：一次選考通過作品を一般選考委員（パーティシパント）と共に選考し、受賞作を決定する。一般選考委員参加者との交流及びアンケートを行う。

10月 受賞作を発表・受賞作掲載冊子を編集する（オーガナイザーのみ）

11月3日～11月4日 雙峰祭にて冊子配布。筑波学生文芸賞運営委員（オーガナイザー）のみで最終振り返りを行い、活動報告書をまとめる

活動場所

主に大学図書館のセミナー室

活動期間

2019/05/28～2019/11/27

対象

教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：箱崎玲音（知識情報・図書館学類4年）、饒波美香（知識情報・図書館学類4年）、小川奈々（知識情報・図書館学類3年）、岡村桂奈（人文学類1年）、伊藤花紅（人文学類1年）

P：綿抜豊昭（図書館情報メディア系）

備考

Twitter：@tbaward

活動報告書

実際の活動内容

週1回定期ミーティング行った

5月1日 作品募集開始

6月 一般選考委員（パーティシパント）向け説明会&選考体験会

7月 一般選考委員（パーティシパント）向け説明会

*説明会および選考体験会は中央図書館セミナー室で行った

7月末 作品募集締め切り

8月 一次選考：集まった作品を筑波学生文芸賞運営委員（オーガナイザー）のみで選考した。

- 9月 最終選考：一次選考通過作品を一般選考委員（パーティシパント）と共に選考し、受賞作を決定した。
 10月 受賞作を発表・受賞作掲載冊子を編集した（オーガナイザーのみ）
 11月3日～11月4日 雙峰祭にて冊子配布。筑波学生文芸賞運営委員（オーガナイザー）のみで最終振り返りを行った。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

編集作業

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

メンバー全員で作業を負担した

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

読書体験を共有できたのがよかった。世の中には様々な感想があって価値観があるのだということが改めて分かった。そして、それぞれの意見について尊重の態度を示すことも、建設的な議論において大事なことであると思った。

参加者への影響

読んだ小説の感想を言い合い、定められた評価基準に従い優れた作品を選出する一連の活動は、やはり滅多に経験できないものであり、非常に貴重な体験になったのではないかと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分ひとりでは仕事を負いきれないと感じたら、誰かに頼ることも大事だと思います。T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください。

スタンプラリーに参加させていただいたことで、そうでなかった年よりも確実に人が来てくださいました。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3



つくば子育て外国人家族サポートプロジェクト (19015P)

T-ACT プランナー 澤田 浩子 (人文社会系)

活動目的

筑波大学では、留学生・外国人研究者の受け入れ拡大に伴い、夫婦や子ども連れで来日し、子育てをしながらつくばで暮らす外国人の世帯が増えています。子育て世帯の外国人にとって、つくばでの生活に必要な情報や、子どもの教育等に関して困っていることなどを調べるとともに、教員・学生・大学院生がチームになってその課題を共有し、解決にむけて一緒に考えることを目指します。

具体的な活動計画

具体的に、以下2点の活動を行います。

(1) 留学生・外国人研究者の生活・子育てに関するアンケート

①新宿区多文化共生課が2012年に実施した「外国にルーツを持つ子供の実態調査」を参考にし、家族帯同で来日している留学生や外国人研究者、またその子どもたちの使用言語や言語教育の現状、またつくばでの生活において困難を感じている点などを中心にアンケート項目を策定します。項目策定に当たっては、オーガナイザー学生やパートナー教員と協議しながら決定します。また、多言語翻訳については、留学生を短期雇用し、依頼します(予算については備考欄を参照)。

(参照) 新宿区「外国にルーツを持つ子供の実態調査」

https://www.city.shinjuku.lg.jp/tabunka/tabunka01_001000.html

②アンケートの実施に先立ち、企画申請者の責任で、人文社会系研究倫理審査委員会に申請を行い、承認後に実施します。

③アンケートは無記名方式で、WEB 媒体・紙媒体で実施します。配布については、オーガナイザー学生や、メンバーとして募った留学生等の協力を得て行います。

④アンケートの回収、集計・分析は、メンバーが複数名で行いますが、最終的な管理は企画申請者が責任を持って行います。無記名でのアンケートですが、個人特定につながる可能性のある情報を含むため、データはインターネットに接続していないポータブルHDD等に保存し、鍵のかかるキャビネットで保管することを徹底します。

⑤結果は、個人が特定できない情報に加工したうえで、留学生課や学生支援室と共有し、学内の留学生支援の向上に貢献します。

(2) 子育て外国人家族との懇話会

①学内の留学生会などの団体を通じて、子育てをしている留学生や外国人研究者に呼びかけてもらい、懇話会を実施します。子育て家族同士のネットワークづくりと、そこでの意見交換により、子育てや教育に関する課題の共有を行います。

②各回5～10名程度の留学生・外国人研究者と、3～5名程度のメンバーの参加を見込んでいます。また、通訳やコーディネーター役として、オーガナイザー学生にも同席してもらいます。典型的な懇話会のタイムテーブルは以下のように考えています。

【学期中(1回40分程度を想定)】

0:00～0:05 互いの自己紹介

0:05～0:40 ふだんの生活で困っていることなどの聞き取り

【夏休み中(2時間程度で親子で参加可を想定)】

0:00～0:10 互いの自己紹介

0:10～1:00 親子で楽しめるゲーム会

1:00～2:00 ふだんの生活で困っていることなどの聞き取り

③半年間の期間内で、合計で3～5回の実施を予定しています。スケジュールは以下の通りです。

6月末 メンバー募集

アンケート項目の策定・多言語翻訳懇話会企画

7月 人社系研究倫理審査委員会申請

倫理審査委員会承認後、アンケート配布・実施懇話会実施(2～3回)

8月 アンケート集計・分析

懇話会での情報収集のまとめ

9月 中間報告

活動振り返りと秋学期に向けて計画の調整

10月 懇話会の継続実施(1～2回)

11～12月 アンケート・懇話会の結果を踏まえて、学内支援施設の開設へ向けた提案作り

活動場所

人文社会学系棟・一ノ矢宿舎交流室・グローバルcommons等

活動期間

2019/06/24～2019/12/20

対象

学生・教職員

**T-ACT オーガナイザー／パートナー**

O：五十嵐真結（日本語・日本文化学類3年）、伊東義雄（知識情報・図書館学類4年）、大城ひろ乃（日本語・日本文化学類2年）、大橋香奈（日本語・日本文化学類3年）、笹原すみれ（日本語・日本文化学類2年）、須藤菜里（日本語・日本文化学類2年）、田崎遥香（日本語・日本文化学類2年）、内藤花菜（日本語・日本文化学類3年）、野本すず（日本語・日本文化学類2年）、廣瀬久美（日本語・日本文化学類2年）、古谷梨菜（日本語・日本文化学類3年）、丸山陽菜（日本語・日本文化学類3年）、矢澤笑子（日本語・日本文化学類3年）、関玲（人文社会科学研究科一貫制博士課程5年）、RODRIGUEZ GOMEZ Juan Pablo（人文社会科学研究科一貫制博士課程2年）

P：松崎寛（人文社会学系）

備考

【教職員サポーター（五十音順）】

明石純一（人文社会学系）、井出里咲子（人文社会学系）、入山美保（人文社会学系）、長田友紀（人間系）、唐木清志（人間系）、菊地かおり（人間系）、隅田詩織（学生交流課）、田川拓海（人文社会学系）、Tkach Kawasaki, Leslie（人文社会学系）、Tastanbekova, Kuanysht（人間系）、徳永智子（人間系）、Tsygalnitsky, Elena（人文社会学系）、那須昭夫（人文社会学系）、橋本修（人文社会学系）、一二三朋子（人文社会学系）、吉原ゆかり（人文社会学系）

多言語翻訳などで必要な学生の短期雇用は、下記予算からの支援を受ける予定です。

- ・筑波大学社会貢献プロジェクト「多文化背景の子どもたちのための社会貢献プロジェクト」代表：松崎寛（人文社会学系）
- ・科学研究基盤研究費（c）「グローバル社会・多言語多文化社会に対応する日本の国語教育の再構築の基礎的研究」研究代表者：長田友紀（人間系）

活動報告**実際の活動内容****（1）留学生・外国人研究者の生活・子育てに関するアンケート**

計画実施が少し遅れたが、6月から9月にかけてアンケートの項目を選定し、留学生等を短期雇用して多言語翻訳した。言語は、本学の留学生数の多い10言語（英語、中国語（繁体字）、中国語（簡体字）、韓国語、インドネシア語、マレー語、ポルトガル語、ベトナム語、タイ語、ロシア語）である。アンケート内容や実施方法に関しては、人文社会学系研究倫理審査委員会に申請を行い、8月に承認を得た。アンケートは無記名方式で、Google フォームで拡散した。

内容は、(a) 本人の日本語力をきく「大人編」、(b) 子供の教育に関わる日本語力（連絡・相談や、宿題を見る等）、学校の支援の現状や要望、悩み、相談相手等をきく「親編」、(c) 子供の日本語学習環境や、学習・生活上の日本語力をきく「子供編」の三部からなる。活動期間内に、(a)「大人編」は100件近くの回答が得られたが、「親編」は10件程度しか集まらなかった。しかし自由記述欄には、大学内に学童保育所の設置を望む声等の貴重な意見が寄せられた。

量的調査項目の集計・分析はまだ終わっていないが、今後、メンバー複数名で行い、個人が特定できない情報に加工したうえで、結果を留学生課や学生支援室と共有し、学内の留学生支援の向上に貢献する予定である。

（2）子育て外国人家族との懇話会

11月16日16：00～18：00に、中国人留学生とその家族を対象とした「子育て外国人家族のための懇話会」を開催した。6家族20名ほどの参加があり、就学前、小学校低学年のお子さんをお持ちの家庭の実情を聞くことができた。会場であるスチューデントcommonsの一角を子供コーナーとし、大人が懇話会に参加している間、お菓子・ジュースやゲーム、塗り絵等を用意して遊べるようにした。募集方法は、オーガナイザー学生がポスターを作製し、掲示板、facebook、ツイッター、WeChat等で、子育てをしている留学生や外国人研究者に広く呼びかけた。

懇話会当日は、留学生のオーガナイザーが司会兼通訳を務め、参加者に様々な「困りごと」を語ってもらった。

その結果、「保護者用日本語教室や、意見交換の場」「保育園や学童保育の情報・中学高校進学相談情報」「子供の母語保持」等に関する話題が多く聞かれた。まずは、このような子育て家族同士のネットワークづくりと、そこでの意見交換により、子育てや教育に関する課題共有をいかに継続的そして効果的に行っていくかが課題である。今回を第一回として、次回また異なる言語で、懇話会を定期的に開催していきたい。

なお、11～12月に行われた日本語・日本文化学類の「日本語教育実習」履修者に本活動のパートナーやオーガナイザーがいたため、懇話会で、希望者に日本語コースへの参加を呼びかけ、学習内容を「生活者としての外国人」向けにするなどして対応した。コースに参加した留学生家族からの評価は、高いものであった。

【備考】短期雇用は、下記予算からの支援を受けた。

- ・筑波大学社会貢献プロジェクト「多文化背景の子どものための社会貢献プロジェクト」代表：松崎寛（人文社会系）
- ・科学研究基盤研究費（c）「グローバル社会・多言語多文化社会に対応する日本の国語教育の再構築の基礎的研究」研究代表者：長田友紀（人間系）



企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

アンケートのうち、特に「親編」「子供編」のデータがなかなか集まらなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

SNSによる広報だけでなく、個人のネットワークを通じて回答をお願いしたが、芳しくなかった。本当に困っている人のところに情報がいきわたっていないのかもしれないし、知っていても忙しくてアンケートに協力できないのかもしれない。どのようにして繋がりを作っていけば良いのか、今後更にみんなで考えていきたい。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

今回懇話会を実施したことで、強く感じたのは、このような会等を開催して留学生家族間のネットワークを上げ、自らが情報を発信し、問題解決に動いていくことを、参加者側が強く望んでいるということであった。

すなわち、懇話会で語られた「困りごと」=ニーズと見做して、教職員や日本人学生が、その要求の実現に答えようと尽力することは、もちろん重要ではあるのだが、その一方で、このような活動提供の場、市民活動に参加する場こそが彼らのニーズであり、従来の固定化された「支援する側／される側」という枠組みでこれら取り組みを考えるのではなく、「外国人留学生・研究者こそが市民活動の担い手」という認識を持つことが重要な点だという気づきが得られた。

参加者への影響

以上の活動および結果報告について、2020年1月12日（日）・13日（月祝）に筑波大学で開催された「第2回国際シンポジウム「地域社会と多文化共生」」にて研究発表を行い、フロアとの間で意見交換・情報交換を行った。ここでは、オーガナイザーのうち2名が、今回の活動で得たものを更に発展させるかたちで、自身の研究手法やフィールドを深化させて調査を行う姿も見られ、地域社会における生活者としての外国人に関する研究に、良い波及効果が見られたことも特筆に価する。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

さまざまな人脈が広がります。ぜひやるべきです！

T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

さまざまな人脈が広がったこと。大学の学生交流課の皆様が広報に最大限ご協力くださったことに心より感謝申し上げたい。また、懇話会会場としてお借りした「スチューデントコモンズ」は、立地条件的にも設備的にも、人が集う場所として最適な場所であった。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

● BLUE ONE BEAT! 2019 (19017A)

T-ACT プランナー 村上 達哉 (人文学類2年)

活動目的

○動機

小学校や中学校、高校では自分や自分の将来を深く考える機会が少ないと感じ、そのような機会を小中高生に提供したいという考えのもとこの活動を始めた。2018年に活動した「BLUE ONE BEAT ～可能性を拓ける～」では、小中高生を対象として『未来ディスカッション』というワークショップを企画した。小中高生が多様な人々と交流し、自分の考えを深めることができるような学びの場を作りたいと考える。

今回は、小学生に「SDGsを知ってもらうこと」と「SDGsの視点から将来について考えてもらうこと」を目的としたイベントを企画、実施する。小学生に地球課題について考えてもらうことやそのような視点から自分にできることについて未来を考えてもらうことが出来ると思い、SDGsをイベントの軸として考えた。このイベントを通して、小学生に多角的で幅広い視野と未来を考える力をつけてもらいたいと考える。また、自分の将来を考える一つの端緒になってもらうことも目指す。

○目標

1. 他者との交流を通して、自己と他者を知ってもらう。
2. 自分の将来や未来に対して深く考えてもらう。
3. 地球課題について関心を持ってもらう。

○企画名について

企画名は「若者にとって胸を高鳴らせるような一つの衝動」の意味合いを持つ。この活動が児童、生徒にとって、将来の選択肢を増やすきっかけになることや、活動を運営する学生もワクワクするような学びの場を作りたいということを考えてこの企画名にした。

具体的な活動計画

○内容

- ・小学校高学年を対象とするワークショップを企画する。(茨城県教育委員会が主催する「いばらき子ども大学」(<https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/syogai/kodomodaigaku/index.html>)の事業の中のK-ACTの一環としても活動を行い、ワークショップを開催する。)
- ・「いばらき子ども大学」から運営として参加してくれる小学生には、「企画班」としてイベントに対して意見を述べてもらったり、「広報班」としてイベントの広報活動(友人を誘うこと)をやってもらう。
- ・ワークショップでは個人ワークとグループワーク(5人1組)をしてもらう。運営側の大学生がファシリテーターとして参加する。
- ・運営にかかわる学生は活動の準備のために週一でミーティングを行う。

○スケジュール

- 7月 企画、子ども達とのミーティング#1(7/20、県南生涯交流センター)
- 8月 企画、子ども達とのミーティング#2(8/31、県南生涯交流センター)
- 9月 準備、イベント本番(9/7予定、吾妻交流センター予定)
- 10月 反省

○ワークショップ日程

2019年9月7日(土) 13時から16時(予定)

活動場所

ミーティングは筑波大学の中央図書館で行います。

活動期間

2019/07/01～2019/12/31

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

- O: 安藤萌華(人文学類2年)、高松柚子(日本語・日本文化学類2年)、直井蒼太(教育学類2年)、西村大祐(人文学類2年)
- P: 長田友紀(人間系)

備考

- 備品

基本的にはプロジェクターを用いて活動するため、プロジェクターを T-ACT から借りる必要がある。
- 予算

施設費や交通費は「子ども大学」負担。
ワークショップにおいては費用がでた場合、運営者負担。(今のところかからない予定)
- 倫理面のルール
 - ・本イベントで知った個人情報や SNS 等にあげず第三者に口外しない。
 - ・参加する児童には徹底したルールをもって接する。

活動報告

実際の活動内容

茨城県教育委員会が主催する「いばらき子ども大学 (<https://www.edu.pref.ibaraki.jp/board/syogai/kodomodaigaku/index.html>)」の一環である「K-ACT」という事業を中心に活動を行った。7/20、8/31に茨城県県南生涯学習センターで小学 5 年生二人と交流をした。この交流では「SDGs を知ってもらおうこと」や「SDGs の視点から地域を考えてもらうこと」を大きな目的として、SDGs の観点から生活を考えるワークなどを行った。小学校の夏休み期間には SDGs に関する調査をしてきてもらい、その発表もしてもらった。



また、二人の小学生にはイベントの企画にも協力してもらい、9/7に『いまみんなが知っておきたい17の目標』という小学校高学年向けのイベントを実施した。このイベントは BiVi つくば筑波大学サテライトオフィスで行い、当日は 4 名の小学生と保護者の方々に参加いただいた。そのほかに、SDGs やイベントに興味を持っていたつくば市内の 6 名の方々にご観覧いただいた。また、当日のボランティアとして、筑波大学生や早稲田大学の学生にも参加いただいた。参加してくれた小学生には大学生や他の小学生とのディスカッションの中で SDGs の内容を楽しみながら学んでもらった。11/30には、茨城県県南生涯学習センターでイベントを一緒に企画してくれた小学生二人と振り返りをした。SDGs に関連した今回の活動は筑波大学の SDGs に関する取り組みとして紹介された (<https://www.osi.tsukuba.ac.jp/sdgs/effort/effort-960>)。

○イベントの具体的なタイムスケジュール

- ・9/7 (土) SDGs 関連イベント『いまみんなが知っておきたい17の目標』【小学生高学年対象】@ 筑波大学サテライトオフィス 13:00~導入、アイスブレイク (他已紹介)、小学生の SDGs 自由研究の発表 (エシカル消費、貧困問題について)
 - 13:30~ SDGs の〇×クイズ、SDGs について
 - 14:00~ 個人ワーク (17の目標の優先順位をつける)
 - 14:15~ グループワーク (意見の共有、気づきの発表)
 - 14:45~ SDGs に関する取り組みについての説明とまとめ (自分にできる行動を考える)

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか?⇒95%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ・広報: 9/7のイベントの広報が遅れてしまった。それに伴い、イベント参加者は目標数の15名にとどかなかった。
- ・準備: 小学生と関わる 1 週間前にスライドなどの準備が整っていないこともあった。
- ・小学生との接し方: 柔軟に対応していたが、常に適切な対応ができていたかは不安が残る。
- ・イベントの質: イベント (9/7) 後のアンケートでは企画の感想が「良い 100% / まあ良い 0% / ふつう 0% / やや悪い 0% / 悪い 0%」であったのに対し、企画のわかりやすさは「そう思う 83% / 思う 17% / あまり思わない 0% / 思わない 0% / 全くそう思わない 0%」という結果となり、「わかりやすさ」に課題があることがわかった。
- ・組織体制: 役割分担が曖昧になってしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ・ 広報：イベントの2ヶ月前に広報を始められるようにする。広報手段としていままではチラシだけであったが、SNS を効果的に活用する。広報を重要視したスケジュールリングを行う。これまでかかわっていただいた機関、団体とのつながりを大事にする。
- ・ 準備：イベントや交流日の1週間前には必要なスライドが整い、リハーサルも出来ている状態にする。そのために、計画の確認、見直し等を毎週のミーティングで行う。
- ・ 小学生との接し方：イベントの準備の段階から、想定しうる児童、生徒の反応、対応の仕方を考えておく。実際に接する際は、倫理面でのルールを徹底するものの、緊張させないように大学生も笑顔で楽しむ。児童、生徒と接した後は、注意点や気づきなどを発表し合い、蓄積を増やす。
- ・ イベントの質：「わかりやすさ」という点では、イベントの内容・進行、伝え方・話し方、スライドの見やすさ・言葉遣い、補助（ファシリテーション）の仕方等の観点から改善を図る。イベントのリハーサルでは以上のようなことを指標として「わかりやすさ」を確認する。イベントの内容に関しては毎週のミーティングの中で意見を出し合い、協議する。
- ・ 組織体制：コミュニケーションをしっかりとる。役割を分担し、できない際はできないといえるようにミーティングで確認する時間を設ける。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

活動を終えて、率直に感じたことは「まだまだ成し遂げていない」ということだった。

2019年3月にT-ACT 支援室の黒田先生から一通のメールをいただいた。茨城県教育委員会が主催する「いばらき子ども大学」という事業で小学生と触れ合う機会があるとのことであった。私は2018年にもT-ACTで申請をいただいて活動を行っていた（【18025A】『BLUE ONE BEAT ～可能性を拡げる～』）。メールをいただいた際の自分はその前回の企画で失敗したことを気にしており、自分にできるのだろうかとお引き受けすることをためらっていた。前の企画では、仲間は4人いたもののやるべきことをうまく分担することができなかった。しっかりと組織を運営することができていなかったのだ。さらに、極めつけは広報である。広報の動き出しが遅く、企画したイベントの参加者は0人であった。そのような失敗をして、学ぶことは多くあったものの自信を失ってしまっていた。「いばらき子ども大学」はそのような状況の中での紹介であった。結果としては、お受けし、小学生と交流することができた。そして、小学生対象のイベントも開くこともできた。自分たちのやりたいと考えていたことができた。今思えば、お受けしたあの時の選択は間違っていなかったと感じている。その時に考えたことは「まだ自分のやりたいことができていない」ということであった。

「いばらき子ども大学」の事業の一つに携わり、二人の小学生と4回程交流する機会をいただいた。私たちは子供たちとの交流の機会がどれほど貴重かということを知っていたので、毎回の交流でやりたいこと、伝えたいことを明確にして臨んだ。二人の小学生だけでなく、団体のメンバーみんなも楽しんで交流している光景を見て、自分のやりたいことができていて実感した。毎回交流後に、帰路でメンバーと「今日も楽しかった」「あの対応はまずかったかな」「自分たちの方が学ぶことが多いよね」などと反省会をしたことが強く印象に残っている。

9月7日には「いまみんなが知っておきたい17の目標」（このタイトルは小学生に考えてもらった）というイベントを開くことができた。今回は広報の動き出しが遅く、参加者は少なかったものの、イベントを実際に行うことで自分たちの活動の可能性を感じることができた。小学生、中学生、高校生が「普段は関わらない人やものと触れ合う」ことで「視野を拡げる」ことや「自分の可能性に気づく」ことを目標としてイベントを企画した。今回は、SDGs（持続可能な開発目標）をテーマにしたことでSDGsに関心を持つ地域の方々にも参加いただいた。SDGsはあらゆる世代、地域の人々に共通する事柄であるのでより多くの方々に関心をいただけたのだと思う。（T-ACT 支援室、茨城県県南生涯学習センター、つくば市役所の教育局生涯学習課、持続可能都市戦略室、環境政策課推進係、つくば市中央図書館、つくば市内の児童館、交流センター、BiViつくば筑波大学サテライトオフィスなどの機関の多くの方々の協力の下、実施することができました。誠にありがとうございました。）このイベントや活動を通して、小中高生だけではなく、あらゆる世代の方々や地域の方々にも開かれた学びの場を作りたいと考えるようになった。漠然とした言葉ではあるが、より多くの人々の「可能性を拡げる」ことが自分の「やってみたいこと」であるのだと再確認することができた。だから、である。だからこそ、私は活動を終えて「まだまだ成し遂げていない」と感じた。これからもより多くの方々と「可能性を拡げられる学びの場」を作っていきたいと思う。



小学生たちと触れ合っただけ感じたことは「答えやゴールはない」ということであった。子供たちとの触れ合い方や内容の伝え方をどれだけ準備して考えても、接し方の定まった答えはないのだからと感じた。小学生たちは自分たちの準備をはるかに越える元気さと縦横無尽さを兼ね備えていた。定まった答えはないが、その一方で最適解はあると感じた。子供たちの反応など予想しうる状況を考えて準備することや自分たちもトコトン楽しむということが重要なのではないかと思った。また、自分たちが伝えたいことを伝えて満足できたとしても子供たちに届いてない可能性もある（その逆も然り）と感じた。何がどう子供たちに届いているかがわからないことに関して、子供たちとの関わりにおいて「ゴールはない」のかもしれないと考えた。子供たちのことをいかに考え続けるかが大事だと思った。



幸いなことに、今回交流をした小学生の一人が素敵な一言を最後にくれた。「今度イベント作る時は僕も手伝うよ！」

その言葉は私の心に今でも鮮明に残っている。彼らの人生の一部に《BLUE ONE BEAT!》が素敵な記憶として残っていてくれたら、それ以上の幸せはないです。

参加者への影響

◎イベント（9/7）の参加者、観覧者のコメント（イベント後のアンケートから抜粋、一部編集）

- ・「世界の目標が分かって楽しかった」
- ・「SDGsなどが勉強になった」
- ・「大学生と活動してみても初めは緊張したけど楽しかった」
- ・「BLUE ONE BEAT!の企画がまたあったら、参加したい」
- ・「参加者同士が仲良くなれるアイスブレイクがあったのが良かった。大学生の説明がはっきりとした声でも聞き取りやすかった」
- ・「SDGsを子供たちにどのように伝え、考えさせるか興味があった」
- ・「アイスブレイクやクイズを通して交流し、子どもにとっては難しい課題を考えるきっかけとなっていたと思う」

◎運営（オーガナイザー）の感想、気づき

- ・「SDGsをテーマに活動してみて、今まで自分自身もあまり深く知らなかったようなSDGsに関する知識を逆に子供達に気づかされたりして非常に面白かったです！自分達でイベントを作り上げることや、そのために何が必要かを学ぶのにも良い機会となりました。」
- ・「大学生とは異なる視点を持った小学生との交流は、非常に新鮮だった。社会の課題に対し、異なる年代間で対話を行うことの重要性を認識できた。」
- ・「実際に子供を前にした時に、ワーク内容をさまざまな場面に対応できるように用意しなければならないと感じた。ただ、実際のワークでは予想外のことも発生するため、臨機応変に対応せねばならないことも学んだ。更にワークに参加する人の学年によっても工夫しなければならないところは異なるため、複数の年代層を想定したワークでは留意点が多いように感じる。」
- ・「この活動を通してSDGsというこれからの社会に必要な知識を身近に感じる事が出来ました。T-ACTの活動として自ら企画し動くことでその難しさや楽しさを改めて感じました。企画力や提案力、行動力、そして、人との繋がりの大切さを改めて認識することが出来ました。また、SDGsという題材を小学生と一緒に考えることで新鮮な観点や好奇心の旺盛さに圧倒されることが多く、これからの人生において糧となるような貴重な学びとなりました。」

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

チャンスは常に自分の中にあります！勇気をもって一歩踏み出してみてください！T-ACTを利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください。

今回も黒田先生、飯島さん、加納さんをはじめとするT-ACT支援室の方々に手厚いサポートをしていただきました。自分が「やってみたいこと」を温かく受け入れていただき、企画について真摯に考えていただきました。好奇心から踏み出した、か弱い一歩を前に進ませていただけるサポートがT-ACTを利用して良かったと感じる点です。自分自身もT-ACTサポーターとして、誰かの「やってみたい」を応援できたら幸いです。

自分ほどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5

● 第2回あおぞら絵画遠足～日本を描きに出かけよう～ (19018A)

T-ACT プランナー 大森 春歌 (芸術専門学群2年)

活動目的

第1回の開催で、この企画の価値を感じることができたので、是非もう一度レベルアップさせた写生会を今年は愛知、佐久島において開催したいと思います！

私は、高校時代に有志を募って10人前後の写生会を企画し、約1年半で10回の開催を実現させました。この写生会は、画力向上を目的として始めたものでしたが、会を重ねるごとにメンバー同士の交流が生まれ、絵を描くことを通して得る出会いの価値の大きさも実感できる機会となりました。各々の熱意が広がり、学年を超えた交流、活発な意見交換、意識向上の場として成長し、仲間とのつながりも深まり、地元の方などと交流する機会にもなったのです。

運営側は開催地の検討やしおりの作成、企画などで美術を使った人と人とのつながり方を模索することができ、参加者は新たな画材を使って、普段とは異なる表現に挑戦したり、1日中作品と自分の意思で向き合うことで新鮮な感動や充実感を味わえたりしました。これらは私たちにできる、遠足の開催という方法で芸術に主体的に関わったからこそ得られたものであると思います。

そして現在、その中心メンバーだった7人が、京都、尾道、徳島、沖縄、岡山など全国各地の大学に散らばっています。そこで、各々の大学でそれぞれ仲間を集め、他大学合同の写生会を実現させたいと考えています。ただ絵を描きに旅行に行くのではなく、写生会という場が、人々の交流をうみ、アートが、各々の参加者の世界を広げるツールになる事を目的としています。

具体的な活動計画

●開催日：9/2-3

- ・場所：愛知県佐久島
- ・集合：名鉄名古屋駅に8：45
- ・解散：西尾駅で16：25

参加人数：9人

予算

- ・フェリー往復：1640円
- ・その他交通費：バス代570円+各自名古屋まで
- ・宿泊費：7500円（1泊夕食・朝食付き）
- ・昼食費：約2100円（2食）

計11240円（事前集金）+各自名古屋までの交通費+お土産代

スケジュール

8：45	名古屋駅集合
9：03～10：00	名鉄名古屋駅から名鉄電車で西尾駅へ
10：15～10：43	バスで一色さかな広場へ
11：30～11：55	フェリーで一色港から佐久島へ
12：00	荷物を預ける
12：30～13：00	島で昼食（サクカフェ aohana）
13：15～17：30	班で散策と共同制作・写生タイム 4
18：00～19：00	夕食
19：00～20：00	お風呂
20：00～21：00	宿で作品共有タイム
21：00～	交流タイム

7：00～8：00	民宿（千鳥）で朝食
8：00～13：30	写生タイム 5.5
13：30～14：00	昼食（べんてん）
14：00～14：30	お土産を買いに島の駅へ→フェリーへ
14：50～15：17	共有タイム（船内）
15：35～16：05	さかな広場から西尾駅へ（最終便）

解散

- *国内旅行保険についてはこちらで加入の呼びかけを行う
- *しおりを制作し配布。

前半で佐久島についての基本情報やマップを掲載し、後半では、写生に際しての注意点や準備物を記載。



(通行の妨げへの留意に関する呼びかけも含む)

活動場所

愛知県佐久島

活動期間

2019/06/12~2019/09/10

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：櫻村宙子（芸術専門学群 2年）

P：林みちこ（芸術系）

備考

よろしくお願いします。



活動報告

実際の活動内容

8:45	名古屋駅集合
9:03~10:00	名鉄名古屋駅から名鉄電車で西尾駅へ
10:15~10:43	バスで一色さかな広場へ
11:30~11:55	フェリーで一色港から佐久島へ ¥2120
12:00	荷物を預ける
12:30~13:00	島で昼食 ¥1000
13:15~17:30	班で散策と共同制作・写生タイム 4
18:00~19:00	夕食
19:00~20:00	お風呂・集金
20:00~21:00	宿で作品共有タイム
21:00~	交流タイム

7:00~8:00	民宿で朝食
8:00~13:30	写生タイム 5.5
13:30~14:00	昼食
14:00~14:30	お土産を買いに島の駅へ→フェリーへ
14:50~15:17	共有タイム（船内）
15:35~16:05	さかな広場から西尾駅へ（最終便）

解散

予算

- ・交通費：4240円+各自名古屋まで
 - ・宿泊費：7500円（1泊夕食・朝食付き）
 - ・昼食費：約2000円（2食）
- 計13740円+各自名古屋までの交通費+お土産代

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

天気には恵まれたが、当日はかなり暑く、熱中症等の体調管理が懸念された。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

事前に帽子・タオル等の持参を呼びかけたり、当日、塩飴を配ったりした。3人ごとの班行動にし、安全対策を行った。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

愛知県にある島、佐久島は、海も山もあり、自転車で島を一周できる大きさで、スケッチに行くにはとても適していた。多忙な中、第一回に参加したメンバーも多く集まってくれ、作品制作を通して交流を楽しんだ。

穏やかな波の音を BGM に、1 日中スケッチブックを広げ、陽を浴び、風を感じつつ描きとる時間はとても贅沢だった。島内なので、到着してからは、移動時間も少なく、前回よりも多くの時間を制作に割くことができたのもよかった。

前回は終わり、半年以上前から計画を練っていた。

企画を開催するに至るまでには、場所決めやしおり製作、下見など様々な段階があり、共同で運営を考えてくれた京都の友人となんども話し合いを重ねた。

実は最初の頃、栃木的那須方面で開催しようと考え、だいぶ具体的に話を進めていた。

しかし、交通の便の問題や、雨天時の懸念点が解消できず、春先に予定を変更し、1 から考え直した。その時は少し焦っていたが、無事、理想的な写生場所を見つけることができ、とてもよかったと思う。

帰りのフェリーを待つ間に行った交流タイムに、作品を前に、大学や出身関係なく、みんなが楽しげに語らう姿を見て、この企画を実現してよかったとしみじみ思った。

参加者への影響

参加者は様々な大学に所属する学生でしたが、開催 2 回目ということもあり、盛んな交流が見られた。1 年ぶりに再会したメンバーも多く、みんな楽しんでくれている姿がとても嬉しかった。

作品の共有タイムは、旅館の一室やフェリーを待つ待合室で複数回行い、多くの意見や感想、質問が飛び交う充実した時間になったと思う。

開催後には「刺激を受けた」「新鮮な体験だった」「楽しかった」「リフレッシュになった」「またぜひ参加したい」など、さまざまな感想をいただいた。

アトリエにこもりがちになる美大生のためにも、みんなの望む場を作れるよう、また継続して開催したいと思った。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分のやりたいことを楽しみながら実現させてください！大学生のうちしかできないこともたくさんあると思います。T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

- ・初期段階で、細かい内容について詰める際に相談にのっていただいたこと。
- ・緊急時の対応などについてアドバイスいただけたこと。
- ・配布するしおりを人数分プリントさせていただけたこと。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒3

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● Run for Haagen (仮19019A)

T-ACT プランナー 松下 未来 (生物資源学類1年)

活動目的

普段毎日通る大学のペDESTリアンで、逃走中をできれば面白いと思ったため。また、大学生活の中で他学類の学生と関わる機会が少なく、学類を超えた交流の機会をもつため。最終的な目標としては、運営もプレイヤーも楽しみつつ、運動不足を解消し、学生間の交流を深める。

具体的な活動計画

- 1) 本番当日までの準備のスケジュール
 - 7/16 ルールとか細かいところ決める
 - 7/23 広報の準備
 - 9月 ポスター印刷、備品準備
 - 10/1~10/20 広報期間
 - 10/7~10/13 受付期間
 - 2) 本番当日のスケジュール案
 - 9:45 受付開始
 - 10:15 ルール説明
 - 10:30 ゲーム開始(1分間で逃げてもらう)
 - 11:30 ゲーム終了
 - 3) 逃走中の参加者(プレイヤー)用ルール
 - ループ道路、建物内、駐車場は立ち入り禁止
 - ハンターにタッチされたら牢獄へ
 - 一度牢獄にはいると、特定のミッション達成で解放されない限り出られない
 - 安全第一でプレイする
 - 最後まで逃げ切るとハーゲンダッツがもらえる
 - 捕まった人はガリガリ君がもらえる
 - LINEで通達されたミッションに参加できる
 - 4) 安全に実施するための配慮事項
 - 主催側の安全対策
 - ・危険な場所(階段、合流地点、見えにくい場所)に立って注意を促す
 - ・怪我した時のために本部に救急箱をおく
 - ・逃走中を開催することを宣伝して、人が走るということを一般の方に把握してもらう
 - ・事前に作っておいたLINEグループでプレイヤーに危険な場所をまとめた地図などをみてもらう
 - プレイヤーにお願いする安全対策
 - ・危険行為を慎み、ルールを守り、安全にプレイしてもらう
 - ・一般の方が建物内から出てくること、階段が多く転落の危険があること、合流地点でほかのプレイヤーが飛び出してくる可能性があることを十分に理解し、プレイしてもらう
 - ・怪我をした時や体調が悪くなった場合は無理をせず、本部に戻ってきてほしい
 - ・LINEグループで見れる地図や注意は必ずみてもらうようにする
 - 5) 本番を実施するにあたって用意が必要な準備、品
 - ハンター役を10人集める
 - 運営を10人ほど集める
 - 公式LINEを立ち上げる
 - 買い出しに行く
 - 広報する(ポスター、Twitter)
- 笛
報酬品(ハーゲンダッツ)
参加賞(ガリガリ君)
ハチマキ(参加者用)
ピプス(T-ACTに借りる)
サングラス(ハンター用ハンター本人が持ってなかった場合、買う)

活動場所

ミーティング図書館のラウンジやセミナー室本番三学エリア
(ただし、駐車場と建物内、ループ道路から外は禁止)

活動期間

2019/07/04～2019/10/20

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：新井良和（生物資源学類1年）、鶴木海緒（生物資源学類1年）、住友亮太（工学システム学類1年）、本間伸太郎（生物資源学類1年）、山中悠（生物資源学類1年）

P：中島敏明（生命環境系）

活動報告**実際の活動内容**

①本番の内容

筑波大学の三学エリアで、ハンターから60分間逃げ切ることができれば景品にハーゲンダッツをもらえる、という企画であった。

②本番までの準備（当初の予定）

7月 実施までの準備のスケジュールの決定

7/23 広報の準備

9月 ポスター印刷、備品準備

11/25～12/8 広報期間

11/25～12/1 受付期間

12/8 本番

③実際の進捗

最初は、春Cモジュールに企画を実施しようとしていたが、3、4度延期になった。そのため、景品をアイスから飲み物に変更したり、ハンターをしてくれると申し出てくれた人を待たせてしまった。夏休みに、メンバーの都合が合わず、準備が思うように進まなかった。相談・ミーティングの結果、使いたいエリアへの交渉が大事であるということで、安全対策マニュアルを作成した。学生生活課の菊池さんに相談に行った際に想定していたよりも交渉しにいけない場所が多く、違う場所（元々運動や遊びのために作られている施設・場所）を勧められたことをきっかけに企画を断念した。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒65%

実施中の困難と解決策

○実施中に困ったこと

使用したいエリアを管轄している支援室や研究室の担当の方に許可を得ること

○解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

安全対策マニュアルを作成し、リスクマネジメントを徹底したつもりであったが、想定していたよりも許可を取らないといけない場所が多く、断念した。

活動の体験について

○自分にとってどんな体験であったか

T-ACTの授業で結成したグループであり、仲が良かったため、授業で考案した企画を実施しようとしたのはよかったが、実施が先延ばしになるにつれ、越えなければいけないハードルが見えてきて、メンバーにモチベーションの差が明らかに見えてしまい、大変であった。面白い企画を考えるのは簡単であるが、その企画が一般的でないほど、リスクマネジメントが重要であり、実施までの準備が大切であると感じた。

○参加者への影響

リスクマネジメントの大切さを身をもって感じ、ひとりひとりのタスクをしっかりとやってくれていた。

○未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

企画を考案することも大変だが、実行に移すことはさらに難しいから頑張ってもらいたい。また、自分自身のタス

ク（先生への報告・連絡、メンバーへのタスク分配）は早めに行うことを、私はあまりできなかったため、ぜひ心掛けてほしい。

○ T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

私たちに至らない点があっても優しく支えてくれ、常に私たちの成長に重きを置いてくれていることが伝わってきた。私はその優しさに甘えてしまったこともあると感じるが、これからもそういう場所であってほしい。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒3

19:29

検索・場所を検索する

第二エリア前

TARAセンター前

第三エリア前

第一エリア前

大学小園

図書館

大学公園南

千鳥軒

王久保三丁目

めしや荘さん

3丁目

メルブ

学内

図書館

1

階段有り。

2

赤線より先、学食やコンビニなどの人の出入りの多い場所や、柱が多くあるので、立ち入り禁止区域にする。逃走エリアにしたい。隠れ場所としての使用は禁止したい。

3

階段有り。下の道と二層横道になっている。

4

赤線より先、学食やコンビニなどの人の出入りの多い場所や、柱が多くあるので、立ち入り禁止区域にする。逃走エリアにしたい。隠れ場所としての使用は禁止したい。

5

赤線より先、学食やコンビニなどの人の出入りの多い場所や、柱が多くあるので、立ち入り禁止区域にする。逃走エリアにしたい。隠れ場所としての使用は禁止したい。

6

赤線より先、学食やコンビニなどの人の出入りの多い場所や、柱が多くあるので、立ち入り禁止区域にする。逃走エリアにしたい。隠れ場所としての使用は禁止したい。

7

赤線より先、学食やコンビニなどの人の出入りの多い場所や、柱が多くあるので、立ち入り禁止区域にする。逃走エリアにしたい。隠れ場所としての使用は禁止したい。

8

赤線より先、学食やコンビニなどの人の出入りの多い場所や、柱が多くあるので、立ち入り禁止区域にする。逃走エリアにしたい。隠れ場所としての使用は禁止したい。

9

赤線より先、学食やコンビニなどの人の出入りの多い場所や、柱が多くあるので、立ち入り禁止区域にする。逃走エリアにしたい。隠れ場所としての使用は禁止したい。

10

この先、狭小路につき、立ち入り禁止にしたい。

11

左右は駐車場で、車の通行有り。手前の歩道のみ通行可能としたい。

12

以上は、車の出入りがあるので禁止にしたい。

エリアの南限。左折した通りは車が通行するので、歩道のみ通行可。

赤線より東側の歩道は一学・図書館方面に向かうので、赤線の内側を逃走可にする。

図書館下の高架下空間は、鳥人間をはじめとするサークルが活動し、資材もたくさんあって速いやすいので、逃走禁止。

Bravo! Art (19020A)

T-ACT プランナー 丸子 さくら (社会工学類1年)

活動目的

T-ACT の授業を受け、そこでの企画を実行したくなかったことがきっかけです。

「気軽な国際交流」をコンセプトに、黒板アートをするイベントです。アートであれば、文化や言語の壁を越えて交流できます。筑波大学生や地域の人とつくばにたくさんいる留学生との交流のきっかけになることを目指します。

黒板アートに関しては、落書きにならないよう、抽象的なテーマを設定しそのテーマに合った絵を自由に描いてもらいます。絵を描くことが苦手な人も楽しめるように、最初にある程度線画を描いておき、色を載せるだけのスペースを作ります。

また、黒板アートのみでは交流が足りないと考えられるため、初対面の人でお互いを知れるようなゲーム（レクリエーション）をする時間を設けます。ここで自分の意見を言いやすい雰囲気づくりをしたいと考えています。

その他、国際性を感じられるようなものを作りたいと考えていて、「行ったことのある・出身の国に印をつけていく世界地図」「多言語でほめ言葉・ほめるジェスチャーを紹介」などが案としてあります。

黒板アートは残りませんが、イベント当日の黒板の様子をビデオ撮影しておき、のちに動画として発信することで、形に残る思い出にします。

この活動を通じて、グローバル化を実感する機会を作り、さまざまな価値観を受け入れることの大切さを伝えたいと考えています。

具体的な活動計画

【準備期間の動き】

8・9月は企画をさらに具体的に練っていき、並行して当日のスタッフをSNSで募集します。

10月上旬プレ（少人数で短時間でやってみる）

プレでの反省から当日の流れを変更。

10/17 協力者募集締切→企画概要説明会

【当日スケジュール】

11/3 (学園祭1日目)

8:00~10:00 準備

10:00~11:30 ターム1

11:30~12:30 交流1

12:30~14:00 ターム2

14:00~15:00 交流2

15:00~16:30 ターム3

16:30~17:00 交流3

17:00~18:00 片付け

準備時間は黒板に白チョークの線画を描いたり、看板の設置、ゲームの準備をします。

ターム中(90分)は最初にテーマの共有をしてからは主に黒板アートをやっていきます。交流タイム(60分)は初対面の人たちでやるお互いを知れるゲームをやります。

活動場所

当日会場：2H101

活動期間

2019/08/01~2019/11/10

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：糸日谷凜（社会工学類1年）、川崎僚介（情報メディア創成学類1年）、川端航平（人文学類3年）、高岡紗那（比較文化学類1年）、竹田つかさ（国際総合学類1年）、野村大地（人文学類1年）、沼田智帆（知識情報・図書館学類1年）、安井梨乃（国際総合学類2年）、山口果那（知識情報・図書館学類1年）

P：JACTAT BRUNO DANIEL PHILIPPE（人文社会系）

活動報告

実際の活動内容

雙峰祭1日目に、2H101教室でやりました。当初の予定とは異なり、タームと交流タイムの区別がなかったり、国際交流はできず地域交流になったりしました。黒板アートは、予定よりも統一感の無いものになりました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒30%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

人の集まりにくい場所であったため、呼び込みが難しかった。また、国際交流を図るイベントであるのに、多言語での宣伝ができていなかったことも問題だった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

教室外に出て呼び小見を積極的に行った。英語版ポスターを貼った。解決はできなかったと思う。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

周りの人にどう仕事を回していくかをとてもよく考えた。自分ひとりで仕事をためこんでしまうこともあり、その時に支えてくれた人の大切さを痛感した。

参加者への影響

よくわからない。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

やりたいことに挑戦するにはとてもいいサポートがあります。ぜひ活用してください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

機材を借りたり、相談に行けたことが良かった。

自分はこのくらい成長できたと感じますか?⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5



● Higa Coffee 1.0 (19022A)

T-ACT プランナー 芹川 聖頼 (教育研究科修士課程1年)

活動目的

【活動目的】「最適な一杯」を探すためのデータベースづくりとその運用。

【活動目標】「よむ、のむ、かく」の拡大(データベースを伴うコーヒーライフの提案)。そのためのイベント「コーヒーデイズ」の実施。

【動機】「選ばされる」から「選ぶ」へ

カフェに行くと、お店の人が美味しいと思うものの中から選択を迫られます。しかし、選択に必要な手掛かりが十分に提供されていると言えるでしょうか。なんとなく選び、良くも悪くも「予想と違った」という経験を繰り返しても、なかなか「自分好みのコーヒー」になかなか辿り着けません。そこで、吟味や選択の質を高めるための場所、すなわち「最適な一杯」を探究する場所をつくりたいと考えました。

【説明】「よむ、のむ、かく」の拡大——データベースづくり——

コーヒーを淹れて飲む習慣がある人は、目的や時間帯などによって飲みたいと思うコーヒーが変わることを知っています。また、その時々ニーズを適切に把握すること抜きに、最適な一杯をつくるのが不可能だということを知っています。私もその一人で、“どんなコーヒーを飲みどう感じたのか”を記録する習慣があります。そしてコーヒーを淹れる際には、必要に応じて過去の記録を参照しています。すなわち、「よむ、のむ、かく」の反復を習慣としているのです。しかし、自分一人で飲むことが出来るコーヒーの種類・量には限界があります。より厳密に「最適な一杯」を探究するには、同じ習慣を持つ他者の協力が多く必要です。そこで、“誰がどんなコーヒーを飲みどう感じたのか”を蓄積・公開するデータベースを運用したいと考えます。このデータベースの構築と運用は、コーヒーを好きな全ての人にとって有用なものだと確信しています。このデータベースは、持続的に利用されてこそ真価を発揮します。そこで「コーヒーデイズ」を企画します。これは Drinker (イベント参加者)に、コーヒーを吟味し、飲み、記録する機会を提供するものです。イベントを通して、データベースの利用を伴うコーヒーライフを提案したいと考えています。

具体的な活動計画

【活動内容】

①データベースシステム等の開発

- ・個々のコーヒー毎のリアクションを回収できるシステムの開発 (Google フォームを使用)
- ・上記システムと連動したデータベースの作成 (Google スプレッドシートを使用)
- ・上記データベースを公開 (Google サイトで作成したホームページ上に、Awesome Table で編集したものを公開。cf. 画像4,5)

②メニューの選定…焙煎度合の異なる二つの銘柄を扱う予定 (ミディアムローストとシティローストのコロンビアとキリマンジャロ)

③マニュアル作成…再現性を高めるためフレンチプレスで抽出する。また、そのためのマニュアルを作成する。

④イベント「コーヒーデイズ」の実施

- ・日程：11月11日～15日 (予定)
- ・場所：8B203 (文科系修士棟 B 内非常勤講師室) を中心に検討中
- ・時間：8時から19時までのうち以下の6時間 (予定)
 - (i) 8:00～10:00
 - (ii) 11:30～13:30
 - (iii) 17:00～19:00
- ・Drinker (イベント参加者) の動き：
 - (i) データベースを手掛かりにコーヒーをカスタマイズする
 - (ii) コーヒーを飲む
 - (iii) 感想・評価を Drinker' Note (データベース) に投稿する
- ・スタッフの動き：
 - (i) Drinker に対し Drinker No. を付与する
 - (ii) 注文に従いコーヒーを淹れる。その際コーヒーに関する情報 (銘柄等) を入力し、注文した Drinker とそれを紐付ける。
- ・その他：イベント前からスタッフがデータの蓄積を始める。

⑤フィードバック

【スケジュール】

- ・活動内容①～③は可及的早急に開始。
- ・④は11月中、5日間を検討。

活動場所

8B203 (文科系修士棟 B 内非常勤講師室)

活動期間

2019/08/15～2019/11/30

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：太田ななこ (芸術専門学群 4 年)、前山直道 (教育研究科修士課程 1 年)、竹内嶺 (教育研究科修士課程 1 年)、
小室嘉奈子 (教育研究科修士課程 2 年)

P：唐木清志 (人間系)

備考

- ・ホームページとデータベースは公開中 (cf. 画像4,5)。
- ・スタッフは「食品取届出店届」提出済。
- ・上記届出の都合上、イベント参加者は大学関係者に限定します。ただし、スタッフの知り合いはその例外とします。
- ・コーヒーの提供は無償で行う。豆を買うためのお金は店頭で募る。豆が無くなり次第終了。

活動報告**実際の活動内容**

- ①データベースシステム等の開発。・個々のコーヒー毎のリアクションを回収できるシステムの開発 (Google フォームを使用)。・上記システムと連動したデータベースの作成 (Google スプレッドシートを使用)
 - ・上記データベースを公開 (Google サイトで作成したホームページ上に、Awesome Table で編集したものを公開。cf. 画像 4、5)
- ②メニューの選定。…焙煎度合の異なる二つの銘柄を扱う (ミディアムローストとシティローストのコロンビアとキリマンジャロ)
- ③マニュアル作成…再現性を高めるためフレンチプレスで抽出する。また、そのためのマニュアルを作成する。
- ④イベント「コーヒーデイズ」の実施
 - ・日程：11月11日～15日
 - ・場所：8B203 (文科系修士棟 B 内非常勤講師室)
 - ・時間：8時から19時までのうち以下の6時間。ただし、豆の消費量を見て短縮・延長した場合がある。
 - (i) 8:00～10:00
 - (ii) 11:30～13:30
 - (iii) 17:00～19:00
 - ・Drinker (イベント参加者) の動き：
 - (i) データベースを手掛かりにコーヒーをカスタマイズする
 - (ii) コーヒーを飲む
 - (iii) 感想・評価を Drinker' Note (データベース) に投稿する
 - ・スタッフの動き：
 - (i) Drinker に対し Drinker No. を付与する
 - (ii) 注文に従いコーヒーを淹れる。その際コーヒーに関する情報 (銘柄等) を入力し、注文した Drinker とそれを紐付ける。
 - ・その他：イベント前からスタッフがデータの蓄積を始める。
- ⑤フィードバック
 - ・「Coffee Days Report」を作成 (https://drive.google.com/open?id=1w_IDLTOdCqtp3imCe2i7rkLSBTrSONa)。それをもとにスタッフから応答もらった。



企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

- ①当初、事前予約制を念頭に計画していたが、カンパ制にした。そのため多くの人が足を運んでくれた反面、必要な豆・水の量の見通しが立たなくなってしまった。
- ②イベント期間中に極イベント以外の用事を入れないよう配慮していたが、自分の意志と無関係に入り込んでしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

- ①車持ちの友人に頼んで買い出しに行ったり、まめぼっとなの方に焙煎のペースを合わせてもらったりすることによって解決した。
- ②睡眠時間の削減、栄養ドリンクの摂取によって解決した。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

劇的な体験であった。

この企画は、「コーヒーのデータベースをつくる」という個人的な趣味からスタートした。の中でふと、『「コーヒーを選ぶ』という当たり前の行為が出来る人は一部の特権的な人あり、その機会を提供することは需要があるのではないか』『データベースの規模を拡大するだけでその場をつくれるのではないか』などと考えるようになった。はじめは「いつかビジネスとして出来たら面白いなあ」程度に考えていたが、「いきなりビジネスを起こすのはリスクが高いから予行練習でも」と思い、T-ACTに足を運んだ。私がやりたかったことは、ただ一つ。データベースの規模拡大。たったそれだけである。この試みがどの程度面白がられるのか知りたかった。



この目標を達成しようと思った際、データベースシステムと協力者が当然求められた。しかしそのどちらも、はじめての経験で苦戦を強いられた。前者は、夏休みと引き換えに手に入れることが出来た。無料で有能なWebサービスのおかげで、お金も能力もない私でもなんとかそれらしいものをつくることが出来た。後者については、気さくで器用な4人のスタッフと、のべ232人の来場者とが協力してくれた。なぜこれだけの協力者に恵まれたのかは、本当によく分からない。

しかし、たくさんの協力者との関わりの中で分かったことはある。その一つは、「誰かと一緒に何かをやる」ということに責任が伴うことである。そしてこの責任感に私が敏感であるということである。「せっかくやるんだから」とか「協力者ががっかりされたくない」とか、そんな思いで睡眠時間を削り、ホームページを更新していた。一向に伸びないアクセス数を眺め、精神も磨り減った。企画そのものをやめてしまおうかと思う程度には疲れていた。

そんな折、スタッフに一冊の本を紹介された。田中元子『マイパブリックとグランドレベル』である。それを読んだ時、勝手に閉鎖的な思考に陥っていた自分がなんだかバカバカしくなった。お互いに期待しないような関係、自分も他人も何者でもない関係、そういう関係が許容される自由な空間が妙に恋しくなった。カンパ制（前日の協賛金により豆の供給量を定める制度）へシフトした背景にはこのような事情があった。この判断で随分清々しくなったことを覚えている。

強迫観念にかられなくなってからは楽しかった。協賛金が多なくても少なくとも、それを面白がる事が出来た。大掛かりなレポートの作成、新しい企画「Higa Coffee 1.5」の立ち上げなど、本来予定していなかったこともやってみたくて、ついやってしまった。こういうものが主体的と呼ばれるに値するものだと思った。主体性の喚起は、T-ACTの活動内部に留まらず、学問的関心にも及んだ。「強迫観念のあるところで『学び』は成立し得ないのではないか」という思いから新教育へ学問的関心を抱くようになり、キルパトリックとか梅根悟とかの著作を貪るように読みたくなったのである。

このような影響を及ぼすことになろうとは、はじめは想定していなかった。この体験は劇的であり、劇的な何かの始まりになった。それが喜劇になるか悲劇になるかは、これからの私次第だろうと思う。

参加者への影響

企画趣旨を理解し面白い人（データベースを活用したり、今後の活動に参加したいと思ったりしてくれる人）がいた一方で、企画趣旨を理解しないままイベントに参加する人も多数見受けられた。回答率から判断するに、その比はおおよそ3：1である。後者を排除しようとは思わないが、前者が増えるような仕組みを整えたいと思った。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

計画を実行に移そうとすると、「やりたいこと」と「できること」との間にギャップがあることに気づくと思います。そしてそのギャップを乗り越え実行できた時、社会や自分自身に対する認識が深くなっているのだと思います。その挑戦を面白いと思うのはいいのですが、なかなか乗り越えられなくて辛くなった時は辞めてもいいかもしれません。

誰かに強いられて始めたわけではないので、なんとなく立ち止まったり辞めたりしてもいいと思います。そして気が向いたらまた、なんとなく始めればいいと思います。楽しんでください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

【良かったと感じられたこと】気軽に相談できたこと。いつも誰かいること。設備を貸してくれたこと。制度が整っていること。

【要望】プロジェクトを進める側は、企画が進行するにつれ余裕がなくなり視野が狭くなるので、「こんなサポートができるよ」ってことを継続的に発信して欲しいです。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● クロスフィットを通じた新たな仲間との交流！（19023A）

T-ACT プランナー 嵯峨山 結菜（体育専門学群4年）

活動目的

みんなと競い合える。みんながいるから頑張れる。クロスフィットを通じた仲間との交流。

○クロスフィットとは？

クロスフィットでは、歩く、走る、起き上がる、持ち上げる、引く、押す、跳ぶといった日常生活動作がベースとなっています。その動作に負荷をかけて行うことで、基礎体力の向上と共に効率的に生活動作を行えるようになることをコンセプトとした今話題の新しいフィットネスの形です。クロスフィットは負荷を変えることで老若男女問わず同じメニューを行えるという魅力があります。言語も年齢も性別も超えて、みんなで同じメニューを行うことで競い合いながらも頑張ることができ、達成感を味わうことができます。

○なぜ筑波大学で行うのか？

筑波大学には日本各地さらに世界各国から学生が集まっています。年齢も性別も人種も超えてみんなで Workout することで新たな仲間の輪を広げます！

さらに現在茨城県にはクロスフィット専用のジムがなく、クロスフィットをするには東京まで行かなくてはなりません。クロスフィットに興味があるけど東京まで行くのはな～という学生にクロスフィットを体験する機会を提供したいです。

仲間と共に身体を鍛える新感覚 Workout「クロスフィット」

みんなで励まし合い、得られる達成感はこの上ない！そんな体験を筑波大生にも味わってほしい！

年齢も性別も言語も関係なく、みんなで Workout する事で仲間の輪を広げよう！

具体的な活動計画

【クロスフィット体験会の開催】

- ・筑波大生に向けた特別 Workout メニューを立案

オーガナイザーの学生を始め、有志の学生で毎週ミーティングを開催。

Workout メニューの選定と実際に Workout を行い、メニューの内容について話し合います。

筑波大生向けの特別メニューということで、限られた場所・器具の中で誰でも簡単にいつでも行えるものを組み合わせた特別メニューを考案します！企画内で出来た新しい仲間とともに企画外でも交流できるよう、簡単に安全に行える内容を提供します！

- ・講師として CrossFit level 2 trainer の資格を持つクロスフィットトレーナーの Yoshito さんをお招き！専門的な知識を教えてください！

- ・みんなで楽しく Workout！開催予定

日時：9/28 14：00～15：00

場所：雨天走路

活動内容：

①講師の紹介

②クロスフィットの説明

③アイスブレイク

グループに分かれて、ストレッチをしながら自己紹介。仲間のバックグラウンドを知ることにより一層関心を持つことができるので、Workout 中も互いに声かけしたり、積極的に関わり合い、交流するきっかけを作ります。

④ウォーミングアップ

様々な運動を組み合わせ、心拍数を高めることで Workout に向けて体を準備します。

⑤実際に Workout！！

1) Technique

クロスフィットの3大運動の一つ「器械運動」を行うにあたり、技術性の高い動作の練習を行います。

Ex. Handstand push-up, Kipping, Toes-to-bar etc.

2) Strength

クロスフィットの3大運動の一つ「ウエイトリフティング」を重点を置き、筋力の向上や効率性の向上のためのトレーニングを行います。

Ex. Clean&Jerk, Snatch, Back squat etc.

3) WOD (Workout of Day)

メインメニュー「WOD」。様々な運動を組み合わせ、高強度の運動を10～15分行います。とてもキツイと感じるものですが、終わった後の達成感は最高です！

Ex. 決められた回数をいかに早く終わらせられるかを競う「FT」
決められた時間内でどれだけ多くこなせるかを競う「AMRAP」

○参加費無料！

○対象

- ・クロスフィットについて知りたい人
- ・身体を鍛えたい人
- ・みんなで楽しく汗を流したい人
- ・身体を絞りたい人
- ・英語で交流したい人 etc...

※施設の利用制限のため、条件として

- ・学研災に加入していること
- ・トレーニング場利用講習会を受講していること以上を満たしている学生に限る

みんなでクロスフィットを楽しもう！！

活動場所

雨天走路

活動期間

2019/08/30～2019/10/12

対象

教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：徳田沙那子（体育専門学群3年）

P：大山（下）圭悟（体育系）

活動報告

実際の活動内容

クロスフィット体験会に向けた準備

- ・有志によるメニュー立案
クロスフィット初心者の有志に立案したメニューを実施してもらった。
感想と器具の種類などを参考に改善した。
- ・講師の方と相談
専門的な知識及びグループマネジメントについてご意見をいただいた

クロスフィット体験会の実施

10名の学生（陸上競技部、ボート部、TIAS など）が集まった。
最初は初めて会う人に緊張している様子だったが、共にワークアウトを行うことで最終的には仲良く交流していた。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

運動能力に差があり、特に注意して見なければならぬ学生がいた。
注意しなければならぬことが個人によって異なったため、十分な監視と指導ができなかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

講師の方にも指導の補助を行ってもらい、2人で巡視したことで事故が起らないよう努めた。結果、事故は起らず、怪我をした生徒もいなかった。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

自分がコーチという立場で参加者の指導にあたったことで、マネジメントの方法や分かりやすい指導の方法、注意しなければならぬポイントなど今まで見えていなかった部分が見えた。

参加者への影響

初めて会う人でもクロスフィットと一緒にワークアウトすることで仲が深まると考えてこの企画を立案した。実際に参加者たちは私が思っていた以上に仲良くなっていて、思った通りだった。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

企画が終わるまでは何が起こるか分からないので、柔軟な発想をもって最大限の準備で本番に向かうといいと思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

黒田さんが献身的にサポートしてくださり、短期間で実現することができました。的確なアドバイスとサポートを受けることができたことが T-ACT を利用して良かったと感じた点です。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● TSUKUBAX2 (19024A)

T-ACT プランナー 太田 明理紗 (芸術専門学群3年)

活動目的

本企画ではアートにより作品の背景の中で生物学の事実を伝えることができると考えている。そして生物学の魅力を中心に引き出しビジュアル化するという芸術的表現によって、生物学という専門的な内容を人の感情に訴えることができると思う。加えて、地域に広く広めて展覧会を行うことで地域の活性化を生み社会貢献をしたいと考えている。

また筑波大学は総合大学でありながら周りの学類がなにをしているのかということが現状ではよくわからないという難点がある。せっかくの開かれた大学であるため、他学類感での交流により学群を超えた化学反応を起こすことで1つの専門分野ではできない深いクリエイティブ作品を制作することを目的としている。

春学期に行った展示のナナナ祭では6000人を超える来場者が訪れ、本企画の目的である地域貢献の面で広く貢献出来たと考えている。しかし、反省点も多く作品が展示期間中にメンテナンスをする必要があるものも出てきたり、段取りがうまくいかないなどトラブルも多かった。この反省を改善しより完璧なものを来場者に見せるという意味でも秋学期の展示は必要だと考えている。

秋学期の展示場所と目的は以下のものだ。

まずは六本木のイノベーションフェスタで行いたい。理由としてさらに多くの来場者が望まれることや主催が筑波大学ということでつくば市民の来場者もたくさん望める。地域貢献と生物を広く広めたいという本企画において点において非常に重要な展示だと思っている。

最終展示にはT+において展示を行う予定だ。理由は春のナナナ祭、秋のイノベーションフェスタなど東京を中心とした展示であったが、つくば(筑波大学)に帰結することで地元住民や筑波大学内の学生に地域活性化をうむ展示ができるのではないかと考えている。

具体的な活動計画

先も述べたように生物の概念をわかりやすく噛み砕き、また美しく芸術作品として展示することで周囲への生物の理解度を高めることを主な目的としその上で他学類間との交流を大切にしている。

以下は秋学期の内容である。

9/28、29 会場11:00-20:00 (準備は前日)

で六本木のイノベーションフェスタにて展示。

イノフェスでは多くの来場者が予測され、本企画の目的である地域貢献の効果が見込まれる。イノベーションフェスタでは

- ・ロボット (3D プリンタ、アルディーノ等)
- ・映像作品 (モニター)
- ・VR 作品 (ヘッドマウントディスプレイ、モニター、ライト) 等
- ・筑波大学内の野生動物を写した写真展示 (一眼レフ、三脚) の新作を含む展示を予定している。

また最後の集大成として大学内のT+にて展示を行う。

内容に関してはイノベーションフェスタで展示予定の上記の作品に加え、春学期に行ったナナナ祭の展示を行う。詳しい展示内容は以下のものである

- ・映像作品 (モニター)
- ・太田のVR 作品 (ヘッドマウントディスプレイ、モニター、ライト等)
- ・野原の写真展示 (一眼レフ、三脚等)
- ・佃、太田、田口制作の系統樹の音のおもちゃ (アクリル板、ラズパイ等)
- ・島田制作の母胎内を模した音の空間アート (カメラ、スピーカー等)
- ・島田、野原制作の生物の群の行動を模したロボット (3D プリンタ、電子基板等)
- ・奥山、水木制作の微生物を利用した映像作品 (ディスプレイ等)
- ・大森制作のAIを利用した映像作品 (ディスプレイ、スピーカー、電力供給装置)
- ・佃のゴキブリの電気刺激を利用したライブアート、もしくは展示 (ゴキブリが電気刺激をしてメイクを行う) (メイク道具、アルディーノ等)

期間は12月中を予定しているが予約の関係によるので正確な時期は年内未定

活動場所

つくば・東京

活動期間

2019/09/28~2019/12/31

対象

学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：佃優河（情報メディア創成学類2年）、大森功太郎（情報メディア創成学類2年）、野原大揮（生物学類3年）
P：村上史明（芸術系）、臼井健郎（生命環境系）

備考

生物系の知見は臼井健郎（生命環境系）先生に、芸術系の知見は村上史明（芸術系）先生にお願いしました。そこでフィードバックをもらいつつ、展示内容に不備がないように致します。

活動報告**実際の活動内容**

生物の概念をわかりやすく噛み砕き、また美しく芸術作品として展示することで周囲への生物の理解度を高めることを主な目的とし、その上で他学類間との交流を大切にしながら展示を行った。

以下は秋学期の内容である。

最後の集大成として大学内のT+にて展示を行った。

- ・映像作品（モニター）
- ・太田のVR作品（ヘッドマウントディスプレイ、モニター、ライト等）
- ・野原の写真展示（一眼レフ、三脚等）
- ・佃、太田、田口制作の系統樹の音のおもちゃ（アクリル板、ラズパイ等）
- ・大森制作のAIを利用した映像作品（ディスプレイ、スピーカー、電力供給装置）
- ・佃のゴキブリの電気刺激を利用した作品（ゴキブリが電気刺激をしてメイクを行う）（メイク道具、アルディーノ等）

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒70%

実施中の困難と解決策**実施中に困ったこと**

本来は秋学期初旬に六本木のイノベーションフェスタで展示予定であったが、企画書が通らず展示が叶わなかった。解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

企画書が悪かったと反省している。解決はできなかったが、次の展示に作品が活かせたと思う。

活動の体験について**自分にとってどんな体験であったか**

秋は代表としてメンバーをまとめたことによって、リーダーシップが芽生えたと思う。色々な背景を持つメンバーたちとうまくやってさらにまとめるのはとても難しいことだとわかった。しかし、グループ企画は今後もあると思うのでとても勉強になったと思う。

参加者への影響

グループのメンバーは展示が初めての人もいた。その中で展示への思いや考え方が変わったメンバーもいて、人に感動を与えることの嬉しさをグループ全体として学べたと思う。

参加した人々からは筑波大学でこういった芸術や生物の活動をしているというのを初めて知った。いいね。といった賞賛の声も聞けた。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

メンバーをまとめることの大変さと大切さを学べる素敵な機会だと思います。地域貢献によって人に感動をあたえられる良い経験ができると思います。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

よかったことは、展示を通して参加者に筑波大の知名度を広げられたり、参加者と交流を広げられたことです。とても素晴らしい機会を与えていただけて感謝しております。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒4

● なんでも生き物相談所 (19026A)

T-ACT プランナー 山本 鷹之 (生命環境科学研究科博士前期課程2年)

活動目的

○はじめに

この企画は、夏休み子ども電話科学電話相談からインスピレーションを得て、大人にも科学について相談できる場を提供することはできないかと思いついたのがきっかけである。

○諸問題 (直面している課題、提案の背景)

1. 多くの人が生物に対する不思議や疑問を抱いているが、その疑問を晴らす機会を得ることは難しい。人々は大学主催の講座やイベントなどへの参加することで、不思議や疑問について聞く機会を得るが、講座やイベントではテーマや専門が限定されてしまう。そこで、人々が自身の抱えている生物に関する不思議、疑問を晴らすためには、容易に尋ねることのできるような場を提供する必要がある。
2. 学生は自身の研究に真摯に向き合い日々努力しているが、研究対象に関する知識を十分にもっているわけではない。したがって、自身の研究をより深く理解するためにも、研究対象に関する知識をより蓄える機会を増やすことが必要である。
また、学生の研究対象に関する知識の不足は知識の偏りを招き、それらは時に視野を狭めている。そこで、自分視点ではなく他の人々が自分の研究対象にどのような興味をもっているのかを知り、より視野を広げることは重要である。
3. 菅平高原実験所の学生は、菅平湿原や草原などの菅平地区に置いて地域と連携して活動を行っている者もいる。一方で、5大学連携の中心である上田市街地における当実験所の学生の活動はほとんどなく、学生の上田地区における貢献度は低い。そこで、上田地区において学生主体で行うイベントを計画する。

○企画の目的

1. 多くの人々が持つ生物に関する疑問などを解決する場を提供する。
2. 学生がより広い視野と知識を得る。
3. 筑波大学の学生が上田地区に貢献する活動をする。

具体的な活動計画

～企画の内容～

筑波大学の生物学を学んでいる学生が、一般の方 (小学生以上) から生物に関する疑問・質問を事前に募集して、募集した疑問・質問を学生がオムニバス形式で解説をするワークショップを開催します。発表方法は自由で、パワーポイントを使ったプレゼンテーションや紙芝居など相手に伝えられる媒体を用いていけばよいです。開催場所は長野県上田市のまちなかキャンパスうえだ (※) を予定しています。疑問質問は Google フォーム (※) にて応募・疑問募集ページを作成し、フォームの質問欄に書き込んでもらい集めます。また、上田地域の小学校 (神科小学校) で質問 BOX を設置し、小学生から質問を集めます。学生は集まった疑問・質問に対して科学的根拠をもとに答えるべく勉強会を開きます。

※まちなかキャンパスうえだ：地域と大学が連携し、大学生や教職員が活動の場として利用できるスペース

URL : <https://machicam-ueda.jimdo.com/>

※応募フォーム : <http://u0u0.net/TvjG>

イベントの様子を撮影し、後日実験所の報告会で利用します。写真を撮影する旨はイベント開始前に事前に確認し参加者に配慮します。

～活動計画～

◇イベント当日 (11月4日月・祝) 9:00~13:00

- 9:00 まちなかキャンパスうえだ着、準備
- 9:30 受付開始
- 10:00 ワークショップ開始
- 12:00 ワークショップ終了
- 13:00 撤収

◇7月

- ・運営に必要な役職 (企画、発表者、記録、広報など) 決定
- ・メンバーを募集
- ・疑問、質問の募集コーナーの設置の仕方を計画
- ・日時を決定

◇8月

- ・広報開始



- ・疑問、質問整理
- ・勉強会
- ◇9、10月
 - ・勉強会
- ◇イベント 3週間前
 - ・プレゼンテーション準備
 - ・イベント当日の流れ計画
- ◇イベント 1週間前
 - ・プレゼンテーション練習
 - ・イベント当日流れ確認
- ◇イベント当日（11月4日月・祝）
 - ・プレゼンテーション
 - ・記録（写真撮影）
- ◇イベント後日



ワークショップ当日に解説することのできなかつた質問・疑問に関しては、後日筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所のHPもしくはFacebookに特設ページを開設し回答します。

山岳科学センター HP; http://www.msc.tsukuba.ac.jp/news20190905_2/

山岳科学センター Facebook; <https://www.facebook.com/sangaku.center/>

活動場所

勉強会などイベントの準備：筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所
 イベント会場：長野県上田市「まちなかキャンパスうえだ」
 URL：<https://machicam-ueda.jimdo.com/>

活動期間

2019/08/22～2020/02/21

対象

学生・学外者

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O：奥西宏太（生命環境科学研究科博士前期課程2年）、細野天智（生命環境科学研究科博士前期課程1年）、湯本景将（生命環境科学研究科博士前期課程1年）、参輪佳奈（生命環境科学研究科博士前期課程1年）
 P：山中史江（生命環境系技術室）

備考

予算は不要です。

活動報告

実際の活動内容

事前に一般の方から生き物に関する疑問・質問を募集した。そして、それに回答するアンサーイベントを長野県上田市の「まちなかキャンパスうえだ」というフリーワークスペースで開催した。また、質問の募集にあたっては上田地域の神科小学校に協力をいただき、質問ボックスを学校に設置した。質問ボックスの横に質問カードを設置し、自由に生き物に関する質問を投書できるようにした。

集めた質問は事前に勉強会をして回答を作成し、アンサーイベントでプレゼンテーションをした。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか？⇒90%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

事前に高校生以上を対象に生き物に関する質問を募集したが、2件しか集まりませんでした。その後も十分な広報をしてきましたが、それ以上質問が増えることはありませんでした。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

対象を小学生以上まで広げました。そして、直接小学校へ行き質問ボックスを設置するなどして質問を集めたところ、173枚の質問カードとのべ200以上の質問がきました。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

質問が全然集まらなかったとき、自分が関心があるほど日ごろ一般の方は生き物に疑問や不思議を感じていないのではないかと思います。また、時々一般の方から来る質問も直接会えた時にふと思い出したくらいのもので、わざわざ質問をして回答を聞きたいという行動を起こすまでの関心はないのではないかと考えられます。また、今の時代自分でインターネットで調べるなどして解決させることもできます。そういったツールを使って日ごろから疑問を解決している可能性もあるのではないかと思います。

一方で、自分で調べるすべの少ない小学生からはたくさんの質問がきました。質問の内容も「植物は生き物なのか？（1、2年）」という生き物とはなにかをこれから学ぶ段階から、「人間の次に頂点に立つ生き物は何か？（5年）」という先のことまで見通した質問など幅広く大変興味深かったです。

質問を答えるにあたっては、そんなことがあったのか！と自分でも驚く発見があったり、こんなことを考えているのかと自分では思いつかないような質問と向き合うことが多く大変良い経験ができたと思います。そして、この質問の意図はなんだろうと相手に歩み寄ることで、質問の理解力や回答の幅が広がったと感じました。

参加者への影響

非常に忙しい中、運営をしてくれたオーガナイザーには感謝しています。最初はプランナーが一人で動くことが多かったのですが、仕事を割り振るようになってからは各々が自主的に活動してくれたり、積極的に意見を言ってくれたりするようになりました。事前に勉強会を何度かして発表練習をした際も、一回一回で考え方やスライドの作り方の質が向上している行ったと思います。そして当日は参加者も含めてみんなが楽しめる会にできたと思います。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

今回私は、遠隔地から T-act を利用していました。そのため、直接 T-act へ行き相談したり印刷したりすることはできませんでした。それでも、電話やメールでのやりとりで相談に乗っていただけたり、T-act への申請自体が自分のモチベーションになったりと悪いことばかりではありませんでした。是非遠隔地でもなにかイベントを企画したいという方はスタッフやサポーターに相談してみてもいいのではないでしょうか。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

やはり一番は T-act に申請することで「よし、やるぞ！」というモチベーションが上がったことです。過去に T-act を利用していたこともあったので、その経験がよみがえり活動を成功させたいという思いを強く持てました。

遠隔地対応は非常に難しいと思いますが、これを参考に今後もご検討いただけたらと思います。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● 書道パフォーマンス (19027A)

T-ACT プランナー 松下 幸奈 (芸術専門学群3年)

活動目的

書道パフォーマンスとは、音楽などに合わせて体全体を使って大きな紙に大きな筆で文字を書くパフォーマンスのことです。

私達は書道パフォーマンスをすることによって、パフォーマンスを見る方々に人と人とのつながりの大切さを書く文字やパフォーマンスによって伝えたいと考えております。また、書道パフォーマンスは、メンバーみんなで力を合わせなければ1つの作品として成立しません。そのためには、集団で協力する力や集団をまとめる力が必要となってきます。みんなで一つの目標に向かって活動することによってパフォーマンス、またはこれからの社会に出ていく上で必要な集団で行動する力を身につけられると期待できます。それに加え、自分達が見る人に何を伝えたいのか、どうすればそれが伝わるのか、見る人の立場になって考えることによって、創造力を養うことができるというメリットがあると考えます。

以上のことを活動目的にパフォーマンス団体を立ち上げたいです。

具体的な活動計画

TEDxTsukuba さんの活動の一環として大学内で書道パフォーマンスを11月10日(日)行います。場所は5C220(通称、体バチ)で行います。パフォーマンス時間は挨拶を含む約10分間です。

《当日までのスケジュール》

【10月】練習、広報活動の実施。

【11月10日】本番(体バチで13時30分から13時40分までの10分間行う。)

《安全対策》

・本番、床が汚れる⇒本番で使用する紙のサイズが約3m×12mの大きさである為、紙の下に敷くレジャーシートのサイズを紙のサイズの3倍にする。

床が汚れる可能性は極めて低い。

・体バチにそもそも置かれてある物(椅子や机、掲示物等)が墨で汚れてしまう⇒椅子や机等動かせることが可能な物に関しては墨が飛ばない安全な場所に退ける。掲示物等の動かせないものに関してはビニール袋を用いてカバーをする。

《リスクとその対処法》

・万が一床や壁が汚れた時⇒パフォーマンスを実行する前にバケツと雑巾を3点ずつ用意し対応できるようにする

《広報活動》

パフォーマンスの宣伝を行う為、学内でポスターを掲示する等の広報活動を実施します。また、学外での広報活動も実現できるのであれば市役所や学校周辺の個人経営しているお店等にポスターの掲示を依頼して広報活動を行いたいと考えています。加えて、SNS(TwitterとInstagram)を活用した広報活動も行う予定です。

広報活動で使用するポスターやチラシの印刷依頼をT-actにお願いしたいです。

《備品及び予算》

道具は筆、墨、桶、紙、ブルーシート、毛氈、文鎮、袴(衣装)です。

筆と袴は、それぞれのメンバーの母校(中学校や高校)から借りる予定です。それ以外のものは書コースの備品を使用予定です。

予算は1.5万円の範囲で必要な道具等を揃える予定です。

活動場所

【9月～本番まで】広告のデザインは知人に依頼をする予定ではありますが、その打ち合わせやパフォーマンス団体全員が集まって話し合う場所として体バチを使用する予定です。

【本番】体バチで本番を行います。

活動期間

2019/09/01～2019/11/10

対象

学生・教職員・学外者

T-ACT オーガナイザー/パートナー

O: 笠原綺華(芸術専門学群3年)、緒方まどか(芸術専門学群2年)、石原美麗(芸術専門学群2年)

P：菅野智明（芸術系）

活動報告

実際の活動内容

TEDxUTsukuba のイベントの一環として、書道パフォーマンスを行いました。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか？⇒100%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

活動が円滑に回るように割り振りを行ったつもりではあったが、自分が想像していた以上に時間がかかってしまった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

定期的なミーティング（週1～2回程度）を行った。



活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

はじめて芸術専門学群書専攻だけの書道パフォーマンスを実施し、たくさんのお客さんに見に来ていただけるよう色々な活動を進めてきました。その中で得た多くのことは私を含め、パフォーマンスに関わったすべてのメンバーにとって、とても勉強になりました。

参加者への影響

パフォーマンスが実施されることを多くの人に知ってもらおうと、ミーティングを何回も重ねるごとに様々なアイデアをみんなで出すことができました。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

自分がやりたいこと、やってみたいことが思いついたら、進んで企画運営してみてください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

黒田先生を含め、T-act 関係者の方々に様々な支援をしていただきました。企画運営を行っていく中で、先生方いただいた助言は私が企画を進めていく中で気づけなかったこともあり、大変勉強になりました。ありがとうございます。

自分はどのくらい成長できたと感じますか？⇒5

やりたいことができた充実感がありましたか？⇒5



● つくメイク (19030A)

T-ACT プランナー 四元 祐希 (心理学類3年)

活動目的

メイクの楽しさを共有したい、メイク初心者の人にも楽しさを伝えたい、という思いから企画した。一度 T-ACT を通さずにイベントをやったので、認知度を上げたい、規模を大きくしたいと思い、T-ACT 申請をしようと思った。

自己実現の手段としてメイクは重要だが、本学では情報が少ない。そのため本イベントを通して情報の共有ができるという意義がある。また、メイクは様々な領域に関係しているので、コミュニティどうしの交流を活性化できる。

具体的な活動計画

【期間内のスケジュール】

- ・プレゼンターを募集する。
- ・実施日の1ヶ月前から宣伝をし、参加者を募集する。
- ・10/18にオーガナイザーを集めて顔合わせと話し合いを行う。

【当日の流れ】

- 14:00～ 1日の流れ、注意事項等
- 14:10～ プレゼン①
- 14:40～ プレゼン②
- 15:10～ プレゼン③
- 15:40～ プレゼン④
- 16:10～ プレゼン⑤
- 休憩(10分)
- 16:50～ メイク実演
- 17:30～ グループに分かれてお話
- 18:30 解散

プレゼンでは、スライドなどを用いて発表をする。内容はメイクに関するものであれば自由。

メイク実演では、事前に希望者を募集し、みんなの前で当日その人にメイクをする。使う道具は、メイクする側・される側の私物。

グループに分かれてお話は、5,6人を1グループとして、自由に話す。自分のコスメを持ち寄って、実際に試しながら話しても良い。

(開始時間や実演をやるかどうかは、プレゼンターと相談して決める。)

以上は開催の典型例である。12/8に第1回目を開催する。3月中に第2回目を開催できたら良いと考えている。

参加費は徴収しない。

活動場所

1C306教室

活動期間

2019/10/01～2020/03/31

対象

学生・教職員

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O: 青木優樹(情報科学類1年)、伊藤梨乃彩(人文学類2年)、鶴尾麻衣(比較文化学類4年)、沼野千秋(芸術専門学群1年)、海野美優(看護学類3年)、常盤みなみ(心理学類3年)

P: 土井裕人(人文社会系)

備考

Twitter アカウント :@PIGDDQUINTLNtwZ

活動報告

実際の活動内容

12月8日に、第二回つくメイクを行った。内容は、プレゼン、メイク実演、参加者と懇親会を行った。参加者が多いときで10名ほどしかおらず、目標集客人数に対して非常に少なかった。

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%くらいですか?⇒50%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

参加者が少なかった。

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

解決できなかった。次回以降、日程や宣伝方法の見直しを行う。

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

やりたいと思っていたことが、周りの人の力を借りて実現できることが、とても楽しかった。

自分が全部やるべきことをやって、ひとりで突っ走るほうが楽だが、組織として動くにはそれではだめだと感じた。もっと勉強しようと思った。

参加者への影響

面白いと言ってくれる人が多かった。楽しんでくれたと思う。

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ

「つくメイク」を利用して、メイクについて好きなことを好きなようにやってください。

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

教室を借りられたところ。土井先生とスムーズに連絡が取れたこと。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒4

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒5



● Feedal (仮19032A)

T-ACT プランナー 和木 勇人 (情報科学類3年)

活動目的

この活動（サービス）の開発者であり、ターゲットでもある自分達が、持っている課題「エンジニアに特化した細かいカテゴリのキュレーションメディアがない」を解決するために、このサービスを作ってみようと思ったのがきっかけです。

「エンジニアのインプットに革命を起こす」という Missionのもと、エンジニアの誰もが“どんな情報でも、気軽に、すぐに”情報を仕入れられるプラットフォームを作る事を目標としています。



具体的な活動計画

現在、エンジニアのためのコンテンツ共有プラットフォームアプリを開発しており、そのサービスを学生間に普及したり、学生エンジニア間でイベントを開く事が活動の内容です。

[サービス内容]

あらゆるテクノロジーニュースをシェアしたり、それをカテゴリごとにキャッチでいりうサービスです。

活動場所

情報科学類生 4名で形成されているチームではありますが、インターネットサービスのため、活動場所はないです。

活動期間

2019/05/23~2019/11/23

対象

学生

T-ACT オーガナイザー／パートナー

O: 須田幹大 (情報科学類3年)、内田大暉 (情報科学類3年)、西山大輝 (情報科学類3年)

P: 川口一画 (システム情報系)

活動報告

実際の活動内容

- アプリ開発における法的な部分について、弁護士さんとのご相談
- アプリのテストユーザーを学内で集める際の戦略に対して、黒田さんのフィードバック

企画申請時の計画に対して、目標達成度は何%ぐらいですか? ⇒20%

実施中の困難と解決策

実施中に困ったこと

仮承認という形で活動を進めることになったこと

解決をどのように図ったか、困ったことを解決できたか

解決策なし

活動の体験について

自分にとってどんな体験であったか

弁護士さんと相談が出来た事はとても有意義なものとなった。

ただ、活動が仮承認状態であったため、T-ACTを通してやりたい事はほぼ何もできなかった。

参加者への影響

特になし

未来のプランナーに伝えたいことがあればご自由にどうぞ
特になし

T-ACT を利用して良かったと感じられたことや要望などを教えてください

T-ACT 申請と結果待ちの期間が長い。

テクノロジーに疎くない、運営側の人を設置し、企画の承認をしてほしい。

自分はどのくらい成長できたと感じますか?⇒1

やりたいことができた充実感がありましたか?⇒1

第13回つくば路100km徒歩の旅2019 (18032V)

受入団体名：つくば路100km徒歩の旅運営協議会 (16021G)

活動内容

100km徒歩の旅とは、毎年夏、茨城県南地域の小学生4～6年生が、学生・社会人スタッフとともに4泊5日をかけて100kmを歩き抜く体験型学習事業です。事業理念として「ひとづくり・まちづくり」を掲げ、子どもたちの「生きる力」の醸成、若い世代のリーダーシップの育成、地域コミュニティの活性化、家庭教育の重要性の再認識という4つの事業目的の下、活動しています。

学生スタッフは、子どもたち全員が完歩を達成し、大きな成功体験を得てこれからの人生の大きな糧とできるよう、そのサポートを行う立場にあります。その一方、本番では子どもたちに背中を見せる存在として、1年を通して様々な研修に取り組んでいます。

★通常ミーティング

日時：毎週日曜日午後1時～5時

(秋・冬は2週に一度になります)

場所：取手市内、守谷市内、筑波大学など

★100km本番

日時：2019年8月6日～10日(予定)

場所：取手市、つくばみらい市、守谷市、土浦市、つくば市など茨城県南

活動期間

4月1日～3月31日

★100km本番 8月6日～10日

参加学生

T-ACT ボランティア：13人



活動報告

●受入団体担当者

8月6日から8月10日にかけての本番では学生は、子どもの精神面をサポートする役割、子どもの健康面をサポートする役割、子どもの生活する環境を整える役割、子どもの歩行中の安全を守る役割、子どもの様子を写真や動画で記録する役割に分かれて、約140名の子ども達を全員100kmのゴールへと導いた。

本番前の期間は毎週日曜日に取手を中心に本番に向けて準備や、子どもに対する理解や救護的な知識の習得をスタッフ全体や役割ごとに分かれて行った。

本番後は10月に行う報告会に向け、役割ごとの発表や報告書、DVDの作成を行った。

どの期間も学生は自分の役割を自覚し、事業の成功のため、目の前のことに真摯に取り組んでいた。中には学生の代表の立場に立ち、他の学生を引っ張っていったくれた学生もいる。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

8月中の5日間で、小学校4～6年の子ども達と100kmを歩くことを通して、子ども達の生きる力の醸成を狙ったもの。また、その5日間のために1年を通してスタッフ同士で研修をし、スタッフの成長や本番に向けた準備を行なう。私の目標は、5日間を通して子ども達に①主体性をもって自分で課題を見つけること②仲間と協力することの大切さや喜び③自分を支えてくれている多くの人たちや住んでいる地域への感謝の気持ち、の3点

に気付いてもらうことであったが、本番を通してその難しさを実感した。私としては、子ども達の主体性を重んじて、最低限の干渉で子ども達を見守っていこうと考えていたが、対象が小学生であるため、その方向性で活動を行なうと子ども達の秩序を保ってなかったり、子ども達がただ100kmを歩くだけでつまらなさそうにしていたりした。本番前の目標と比べて、本番中のその達成度は50%程度であろうか。

今後の課題

上記の課題を通して、今後子ども達と関わる時には、もっと子ども達が楽しく課題に取り組むための仕掛けを用意しておくこと、子ども達の成長のために必要な働きかけに関して他のスタッフともっと意見を共有しておくことなどが必要だと感じた。

●学生参加者：藤原圭那（比較文化学類 3年）

活動の成果

この事業では子どもたちに成功体験をしてもらい生きる力を醸成することに重きを置いていますが、私が関わったのは子どもたちと関わる機会が少なく事務的な作業が多い役割でした。予めやらなければいけないことが決まっているので目標も立てずに任されたことに取り組んでしまったというのが正直なところではあります。

今後の課題

子どもたちが本番5日間を通して少しでも成長できるように、自分にできることはないかというところまで意識できていれば、より良い経験をしてもらうことができたのかもしれません。どんな状況であってもどんな立場にいても、自分が主体性を持って取り組むかどうかで得られる結果は大きく変わるものだと痛切に感じました。

●学生参加者：能勢結（芸術専門学群 2年）

活動の成果

通年のミーティングや研修を通して、子どもの前に立つスタッフとして、組織運営や事業理解、自身の人間力や社会性の向上をはかる。

私は、今年の1月～6月にかけて事業の中でも事務局スタッフとして専念し、スタッフ同士の交流や話し合いよりも、組織運営・事業開催に関わる準備などの仕事に携わった。PC作業やデータ処理など、事務的なスキルももちろんついたが、それよりも自分が物事に向き合う姿勢が変わったように思う。事務局では、学生同士の交流よりも社会人との関わりが圧倒的に多く、尊敬している人や目上の人はどうやって現状を伝えるか、今後の自分の考えやそれに伴う段取りがどこまでできているのかなど、客観的に仕事の進捗状況を把握し、こなしていく力がついた。自分に今できていること、今度しなくてはいけないこと、自分1人では出来そうにない場合、誰に手助けをしてもらえばいいのかなど、様々な仕事を同時に進めていくうちに、冷静な判断力がついた。

準備不足や経験不足ゆえの失敗も多くあったが、痛い経験を通して、自分に足りないものを把握し、1つのものをより良いものにしていこうとする向上心や責任感がついた。

この事業に参加して今年で2年目になるが、自分にとって失敗の多い年でもあり、挑戦的な活動が出来た年でもあると思う。自分の経験値からして入念な準備が不可欠な仕事を担当する機会も多く、負荷も多く辛い時期もあったが、事業実施後には達成感でいっぱいだった。

今後の課題

来年の実施に向けて、自分がやりたいことを考え直す必要があると感じた。今年は、与えられた仕事を確実に、順調にこなしていこうという心持でやってきたが、「こなす」ということに必死になりすぎていて、あまり回りの環境に目が届いていなかった。

2年間の経験を踏まえて、自分がやりたいこと、変えてみたいことなどを見つめなおし、事業の発展や充実につなげていきたい。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

4泊5日で100km歩く旅における休憩地の設営、昼食の手配等。市役所等との打合せや、リーダーとしてチームマネジメントを学ぶことができた。

今後の課題

温暖化等の影響か、今年は5日間晴天のうえ体感気温が40度程の日もあり、熱中症が続出した。行程の見直しや更なる熱中症対策、スタッフの知識経験の促進が課題である。

●学生参加者：石田智己（教育学類 2年）**活動の成果**

本番5日間、子ども達の歩行中の安全を守る役職につき、横断歩道での横断の補助や隊列から遅れた子どもの対応、先導などを務めた。また、コースの休憩地など茨城県県南の魅力を本番の準備期間に調べ、それを本番を通して子どもたちに伝えていくことで、5日間を楽しく歩行できるように促したり、郷土愛の育みにつなげていった。

今後の課題

隊列から遅れてくる子には体調不良やホームシックなど様々な要因があった。今年は暑さもあり、体調不良、とりわけ熱中症になりかけの子どもが多かった。そういった子に寄り添い歩いたわけだが、医療的な専門知識が最低限しかなく、不安に感じることもあった。本番までの期間、今年は安全管理のための勉強や実践を積んできたが、それらに加えて医療的知識や子どもに関する理解をもっと深めていく必要がある。

●学生参加者：匿名希望**活動の成果**

小学生が8/6~8/10の5日間にかけて4泊で南茨城を取手市からつくば市まで100km歩くという企画の中で私はマネジメント室歩行支援水かけ係として、熱中症対策として休憩地で子どもの首筋に氷で冷やした水をかける役を担っていました。また、当日に向けて日曜日にミーティングに参加し、準備をすすめました。ミーティングでの準備は直前期には事務的なものやマニュアルの作成を行っていましたが、それまでは子どもに責任をもって預かれるよう、リーダーシップを高め人間性を培うための勉強のようなものを行っていました。

全体の目標として全員100km完歩がりましたが、これは残念ながら達成出来ませんでした。個人の目標としては、当日スタッフ間のコミュニケーションを密に取るということと、子どもを元気づけられるような対応をするという2つを掲げていました。これはどちらも意識して活動することができましたが、そもそも目標設定が曖昧だったということもあり、改善の余地が残りました。

一連の活動の中で他人との関わり方や問題解決など様々なことで考える機会があり、その都度得られるものも多くありました。

今後の課題

全員が完歩出来なかったという点については熱中症対策を再度考え直す必要がある。また、自分の係については、休憩地の設営、運営、片付けをより効率化する必要がある。

●学生参加者：匿名希望**活動の成果**

小学生が5日間の間に寝泊りをする体育館の設営、食事の用意、荷物を運ぶ、等の仕事を行いました。普段の生活における美味しいご飯が出てくことや部屋がいつも綺麗であることは、当たり前ではないということを私たちの活動を通して参加した小学生に伝えることができたのではと思います。

今後の課題

近年の天候の変化により、熱中症等になる危険性が高く、十分な知識と対策が必要だと感じた。

●学生参加者：根岸創馬（教育学類 3年）**活動の成果**

特定の班を担当し、小学生たちの生活や学びを直接的にサポートした。

今後の課題

行程の押しと、それに伴う小学生らの学習機会の低減等。

●学生参加者：村上優介（応用理工学類 3年）**活動の成果**

子供たちが4泊5日かけて100km歩くのをサポートする。

自分は春C学期の定期テストが重なったため4日目の夜からしか参加できなかった。

来年以降は5日間参加したい。

一緒にサッカーしよう！ (19002V)

受入団体名：FC ジョイア (14006G)

活動内容

サッカーを通して、知的障がい・発達障がいのある人達と関わり、障がいや障がい者を知るきっかけにしてほしい。

◎活動日 日曜日 10:00～11:30

2019年 4/14 5/12 6/2 7/14 8/11 9/29 10/27 11/17 12/1

2020年 1/12 2/9 3/8

指導者は明るく元気なつくばFC所属コーチ達、アシスタントコーチは筑波大学大学院生です。サッカー未経験者はもちろん、スポーツが苦手な方も、笑顔で活動できます。活動に参加できる日だけでも、1度だけでもOKです。

活動期間

4月14日～3月8日

参加学生

T-ACT ボランティア：1人

活動報告

●受入団体担当者

膝を痛めた学生さんが、走れない体調のなか、できる範囲で選手・スタッフのサポートをしてくれました。

●学生参加者：HANIF HASSNA (生物学類 4年)

活動の成果

障害を持つ社会人の方とサッカーしてます！みんな元気いっぱい体を動かすことができました。



外国籍子ども校外学習サポート教室 (19003V)

受入団体名：非営利ボランティア団体伴の会 in Tsukuba (18010G)

活動内容

外国からつくば市に転校してきた子どもは、日本語が不自由で、コミュニケーションの難しさや文化の違いに、学校での学習と生活に戸惑うことが多くあり、学校で満足な学習ができないこともあります。私たちの校外学習サポートにより、安心感を持てる居場所を作ることで、子どもがのびのびと自己表現したり、不安な気持ちや緊張を取り除くことができます。子ども達の心身の健全な成長を見守るとともに、日本一の教育都市に貢献し、安心で魅力ある「国際都市つくば」を目指して活動しています。

毎週木曜日 (18:00~19:00)

日曜日 (15:30~16:00)

※吾妻交流センターで市内外国籍小中学生を対象に日本語、学校の授業、宿題のサポートをする。

活動期間

4月1日～2月23日

(内訳)

4/11、4/18、4/25、5/9、5/19、5/23、5/26、6/13、6/20、6/23、6/27、7/4、7/11、7/21、7/25、8/1、8/8、8/22、8/29、9/1、9/22、10/3、10/6、10/10、10/17、10/20、10/27、10/31、11/10、11/14、11/17、11/21、11/24、11/28、12/1、12/5、12/8、12/12、12/15、12/19、12/22、1/9、1/16、1/26、1/30、2/6、2/13

参加学生

T-ACT ボランティア：7人



活動報告

●受入団体担当者

- ・小学生の算数プリント、漢字プリント、学校宿題などの学習を丸付け、説明などのお手伝いをさせていただきました。
- ・本ボランティアの主な目的である外国籍の子どもたちに居場所を提供するという意味で、勉強以外の活動においてもゲームなどを通して、子どもたちに優しく対応していただきました。
- ・留学生は、英語を活用し、外国籍の子どもにとって安心できる居場所もなったのではないかと感じました。
- ・学生は、活動内容をよく理解していただき、子どもたちに優しく、笑顔でサポートし、素晴らしいと思いました。
- ・学生からボランティア活動に参加する経験は、今後の卒論や将来の仕事に活かしたいと聞き、学生に市民ボランティア活動に参加機会、場所になって良かったなあと思います。
- ・活動の参加によって、他のボランティアとの交流は、年代、国を超えて交流ができたと感じます。



●学生参加者：匿名希望

活動の成果

外国籍の児童・生徒の学習を支援することを半年の期間行った。その結果、日本語教育に関する理解をより深められたと思う。また、他者に寄り添うということが重要であるということを実際に感じることができた。

今後の課題

外国籍の児童・生徒は日本語を学ぶという点での困難を持っているというだけではなく、日本語を使った学びについても他の児童・生徒に比べて困難であるということに気づいた。しかし、日本語を話せる外国籍の児童生徒に対する支援がまだ十分ではないように感じた。私自身、日本語を話せる外国籍の児童・生徒に対する学習支援はどうしても科目の指導になってしまいがちだったように感じた。今後は、教科指導をする際に日本語学習で足りていないものを確認しながら日本語教育・科目指導の双方をやっていくことが課題であると考えている。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

放課後や休みの日に、交流センターにてつくば市の学校に通っている外国籍の子どもたちの宿題を手伝ったり、勉強を見たりしました。子どもたちの国籍はエジプト、中国など多くにわたり、彼らを感じている悩みや問題を聞くことができました。子供たちの話から、外国籍児童の教育の問題点も明らかになりました。

今後の課題

子供たちの中には課題をやらずに遊び始めてしまう子もいました。そのような児童に対して、どのようにすれば学習に取り組んでもらえるのか悩むことがありました。

●学生参加者：ALAWI ASEEL WALEED（生物資源学類 4年）

活動の成果

子供たちを支えながら、これからの進路が少しずつ見えてきた。それは、教育や子育て支援に関わる歩であれば嬉しい。また、日本語で周りの人達や他の学生とコミュニケーションを少しでも取れるようになった

今後の課題

初めて教室に来て日本語が全然分からない子達、不安で遊びでも自信はなくて積極的に参加できないことが多い。それは、学校でも受け取らないことやいじめられたことと繋がる。これからも、そのことを踏まえて自分の不安を乗り越えるように子供たちをより信頼できる教室を作ることに努力を尽くすつもり。

●学生参加者：HANIF HASSNA（生物学類 4年）

活動の成果

今年は生徒もボランティアの人も増えて楽しい時間を過ごすことができました。



☆スクールフェロー☆つくばみらい市内の小学校で養護教諭の活動補助ボランティア（19004V）

受入団体名：茨城県県南生涯学習センター（12001G）

活動内容

茨城県県南生涯学習センターの生涯学習ボランティア事業（スクールフェロー）として県南地区の小中学校の授業、部活動、学校行事等のサポートを行います。将来、子どもに関わる職業を希望している方にもおすすめです。

- ① 養護教諭の児童の健康管理にかかる教育活動補助【通年】
検診の補助、掲示物の作成、児童対応の補助、事務手伝いなど
【活動期間】週に1回程度（1年間でなくても可）
- ② 未就学児検診補助【1日限りの活動】
10月31日に行われる、未就学児検診の補助を募集しています。
午前：会場準備
午後：検診の補助や待ち時間に絵本を読むなど（都合がつかない方は午後からの参加も可能）

活動期間

4月11日～3月27日
（内訳）各日1人参加
4/19、4/25、6/11、6/18、
9/4、9/11、9/18、
10/31（3人）、11/20、
11/21、2/27

参加学生

T-ACT ボランティア：5人



活動報告

●受入団体担当者

保健室来室者への対応や健康診断の準備、健診当日の補助をしてもらいました。児童数が多く、健診時には特に人手が必要なので、スクールフェローの学生さんに来ていただきとても有り難かったです。内科検診の際の補助では、自分で考えて臨機応変に動いてくれたおかげで、児童の流れがスムーズになりました。とても感謝しています。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

主に保健室で、救急処置や健康観察のデータ整理、健康診断の補助などを行った。実践を通して養護教諭の職務に対する理解が深まった。また、児童や他の教職員との関係づくりも学ぶことができた。

今後の課題

救急処置における優先順位、重症度の判断については自己学習していきたいと感じた。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

身体測定の補助、運動会の予行練習におけるケガの手当てなどを活動として行った。実際に養護教諭として働いておられる先生の姿を間近で見て、養護教諭が普段どのような仕事を行っているか今まで見えていなかったことも知ることができたように思う。私も子ども達が健やかに成長できるようサポートを行う養護教諭になりたいと改めて感じた。

今後の課題

小学生という自分と年が大きく離れている子ども達とどのように関わっていけばよいのか分からない場面があった。養護教諭は子どもの心に寄り添えなくてはならない。したがって次年度では子ども達とたくさん関わる機会をもち、子どもの個性や特徴をより理解できるようになることを目指す。

☆スクールフェロー☆土浦の小学校で養護教諭の活動補助ボランティア (19005V)

受入団体名：茨城県県南生涯学習センター (12001G)

活動内容

茨城県県南生涯学習センターの生涯学習ボランティア事業（スクールフェロー）として県南地区の小中学校の授業、部活動、学校行事等のサポートを行います。将来、子どもに関わる職業を希望している方にもおすすめです。

保健室に来室する子どもたちの対応、健康課題に即した掲示物を作成したりしていただきます。

【活動期間】週に1回程度（1年間でなくても可）

活動期間

4月11日～2月25日

（内訳）1/17、1/30、2/25

参加学生

T-ACT ボランティア：1人



活動報告

●受入団体担当者

時間をかけないとできない書類整理や書類作成を手伝ってもらえたこと、また、自分の日々の執務を見直す機会にもなり得たものは大きかったです。今年度も素晴らしい学生さんをご紹介くださり、本当に感謝致します。



●学生参加者：匿名希望

活動の成果

養護教諭の幅広い業務内容を学ぶことができた。保健室に来る子どもたちの各々のニーズを汲み取る必要性を学んだ。子どもたちの小さな変化に気づき、家庭での問題などに対処していくことを学んだ。

今後の課題

養護教諭として、いち早く課題を見つけ、対処していく力が必要であると感じた。

水戸市チャレンジ・ザ・原始人事業『チャレ原2』(19008V)

受入団体名：NPO 法人 FIELD UCHIHARA (18003G)

活動内容

大自然の中での体験を通して、生きる力、忍耐力、自立心、物を大切にできる心など、青少年の心のたくましさや育む。また異年齢構成の班活動や長期の自然体験活動を実施することにより、ジュニアリーダーとしての人材育成を図るとともに、この事業をサブリーダーの活躍の場として位置づけ、水戸市における青少年指導者の養成に努める。

水戸市チャレンジ・ザ・原始人事業『チャレ原2』において、研修生（小学校5・6年生・中学生）やサブリーダー（高校生ボランティア）とともに生活し、4泊5日の様々な活動プログラムをとおして起こる課題を、サブリーダーとともに考え、研修生たちが自発的に行動できるように導くための助言や安全管理を指導者の立場でサポートしていただきます。※初参加でも安心できるよう、指導者研修会を実施いたします。(7/27～28)

【活動場所】

国立那須甲子青少年自然の家

(福島県西白河郡西郷村大字真船字村火6-1)

※集合場所（水戸市 内原市民センター）から現地まで貸切バスで移動します。

活動期間

8月17日～21日

参加学生

T-ACT ボランティア：1人



活動報告

●受入団体担当者

4泊5日のキャンプ生活の中で、参加した子どもたちへのアドバイス、安全管理。

参加した学生さんは普段から子どもを相手にしたキャンプや、サッカー少年団のコーチをしていることもあり、子どもとすぐに打ち解け楽しそうに活動しておりました。

またキャンプインストラクターの資格を取得しており、安全管理、プログラ運営などについても、しっかりできておりました。いろいろな知識があり、こちらが勉強になりました。



●学生参加者：三井陸（体育専門学群 3年）

活動の成果

子どもの成長と自主性を促す接し方ができた。手を出しすぎず、目を離しすぎない指導の形とその成果を体験することが出来た。また、研究室活動とは異なる組織体制・役割での組織キャンプを経験したことで、新たな知見や自分が所属している研究室の良さを客観的に知ることが出来た。

今後の課題

足首の手術をした直後であったため、いざというときに走れない不安があった。水辺活動やがれ場のある登山を含む活動であったが、安全への配慮が足りなかった。

つくばサイエンスツアー～小学生対象工作実験教室サポートスタッフ～ (19009V)

受入団体名：つくばサイエンスツアーオフィス 一般財団法人 茨城県科学技術振興財団 (13002G)

活動内容

「つくばサイエンスツアーオフィス」は、ノーベル賞受賞者 江崎玲於奈のもと科学技術の普及啓発等を図ることを目的に、つくば市内の約50か所の研究機関とつながる公共の機関です。小学生を対象に簡単な工作や科学実験をとおり、驚きや感動を提供し、科学・技術に対する関心を高めてもらうことを目的としています。年間を通して、月1～2回 イベントの予定があります。

【内容】

- ★午前中は、理科の先生や研究所OBを講師に招いて、小学生対象「科学実験教室」、午後は、つくばサイエンスツアーバスを利用し、市内の科学館を見学します。
- ★1日で2施設を見学します。(場所は日程により異なる)

活動期間

6月30日～2月23日

参加学生

T-ACT ボランティア：3人

活動報告

●受入団体担当者

小学生対象の工作実験教室「ハンドランチグライダーをつくろう」、「砂を学び、砂絵と恐竜ジオラマづくり」、「草木染めで色の変化を楽しもう」、「色々実験、色の魔術師」にて講座の準備や片付け、講師および参加児童の実験補助、つくば市内の科学館見学時の引率や記録写真の撮影など、イベント当日の運営補助として活動して頂きました。活動中の様子は、3人とも積極的に児童に話しかけたり、講師の作業を手伝ったりとイベントの運営がスムーズになるように気を配り活動してくれました。イベント終了後に本人達に感想を聞いたところ、楽しかったので、また参加したいと希望がありました。



●学生参加者：西井明日香（物理学類 2年）

活動の成果

午前中は色の化学実験「色の魔術師」の実験補助をして、午後は地質標本館とJAXAの見学ツアーへ行きました。

色の魔術師の実験では、BTB溶液とフェノールフタレイン溶液の2つの指示薬を用いて、水溶液が酸性→中性→アルカリ性に変化するにつれて色が変化する様子を観察しました。他にも、キュウリの皮を用いた発光実験やカラーボール作りなどの実験を行いました。何でこんな現象が起こるのかということを知りたいのは大人の保護者の方が多く、子供たちは意外とどうやったらこの現象が起こるのか、もう一回再現するにはどうすればいいのかということに興味があったのかなという印象です。色の変化を見た時の子供たちはとても楽しそうでした。

地質標本館とJAXAでの見学では、実際に目で見て楽しい、触れる設備が多く、説明も子供たちにわかるレベルの話をしていたので子供たちも楽しそうでした。普段身の回りにはないものにやはり興味を示すようでした。

今後の課題

先ほどの内容で子供たちはなぜこの現象が起こるのかということはまだ聞けなかったということを書きましたが、おそらく「なぜ？」に興味がないというよりは話を聞いても少し難しく理解できなかったというところなのかなという印象です。

施設見学では大きいもの、触れるもの、珍しい物などに興味を持っているようで、普段はできない体験ができるということがイベントを実施する時に子供達を集める秘訣なのかなと思いました。新しくイベントを企画するときにはこう言った観点の目玉となるものが必要で、それを見つけるためにはやはり自分の足で1つ1つ場所を回っていかなければならないものであることを実感しました。

●学生参加者：本間伸太郎（生物資源学類 1年）**活動の成果**

サイエンスツアーのスタッフとして、会場設営や実験教室の実験器具等の準備、参加した子どもへのサポートや、子どもへのプレゼント配布など、イベントの全体的な運営に関わった。活動を通して、難しい科学的な事象を、いかに、子どもにわかりやすく説明するか、子どもたちの注目をどう集めるかについて学んだ。

今後の課題

大きな問題は生じなかったが、運営スタッフの方は博物館見学の時に、子どもたちの注目を上手に集めて誰でも興味を持つような説明をしていた。子どもを引きつけて、よりイベントを楽しんでもらうためのスキルを習得したいと思った。

●学生参加者：齋田友梨（応用理工学類 2年）**活動の成果**

・活動内容

月に約1回開催される、つくばサイエンスツアー実験教室の運営のお手伝いを行いました。午前中はおもしろ実験教室にて、子どもたちがスムーズに実験を行えるように材料の準備やアドバイスをしました。午後はサイエンスツアーバスに乗って、つくば市内の科学館を2か所回ります。引率をするとともに、子どもたちが興味を深められるように声掛けを行いました。

・学んだこと

実験を通じて、机に座ってノートを取っているだけでは得られない体験をすることができると思えました。

今後の課題

幼稚園生から小学校6年生までが参加するため、幅広い年代の子供たちに楽しんでもらうために、一緒に参加している親御さんにとっても学びの場であるために、工夫を重ねられたらと思っています。



第2回霞ヶ浦トライアスロンフェスタ (19011V)

受入団体名：霞ヶ浦トライアスロンフェスタ実行委員会 (19002G)

活動内容

地域のシンボルである「霞ヶ浦」や全長180kmにも及ぶ「つくば霞ヶ浦りんりんロード」を舞台にトライアスロンの普及のみならず、郷土資産のPRによる霞ヶ浦周辺地域の活性化や人と湖とスポーツの融合による「泳げる霞ヶ浦」の実現さらに霞ヶ浦の水質の浄化に繋げることを目的として設立いたしました。

昨年末より、第2回開催に向けて実行委員会を開催し、準備を進めております。

大会当日は下記の内容を手伝っていただきます。

- ・手荷物預かり所
- ・コース誘導
- ・給水所・参加賞の配布等の軽作業

活動期間

7月6日(木) 7:30~15:00

参加学生

T-ACT ボランティア：1人

活動報告

●受入団体担当者

今回ご参加いただいた学生さんですが、本部で作業をするボランティアスタッフとしてご参加いただきました。本部スタッフの方々には他のボランティアスタッフより早めにきていただき、競技参加者450名、ボランティアスタッフ70名の受付からお手伝いいただきました。忙しいながらも一生懸命活動していただきました。その後は手荷物預かり所や、選手の応援。最後の抽選会までとても楽しんで活動していただいたと思います。

次回開催時には、ぜひもっと多くの学生の方々に一生懸命なトライアスリートたちと一緒に応援していただきたいと同時に、大会の運営についても学べる機会を作っていきたいと思います。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

It was my first volunteering experience in Japan, and I liked it. I was volunteering in a running area, watching triathlon competitions is my hobby, but being a volunteer helped me experience the competition from another perspective.

今後の課題

I have not yet used to Japan's weather, it was a little bit hot that day.

6月23日(日)に発達障がい児と遊んでくださる方募集♪(託児見守りボランティア)(19012V)

受入団体名：茨城 LD 等発達障害親の会 星の子 (15014G)

活動内容

私たちは、茨城県に住む LD、ADHD、高機能自閉症、アスペルガー症候群など発達障がいのある子どもたちを持つ親の会です。当事者支援のための勉強会や、療育キャンプなど当事者のための活動、発達障がいの啓発事業などを行っています。私たちの活動において当事者及びその兄弟児と交流して下さるボランティアさんを探しています。

本活動の目的は以下の通りです。

- ボランティアとの交流を介した当事者の社会性の向上
- ボランティア参加者にとっての発達障がい児(者)理解の場の提供
- 保護者の当会での活動参加への障壁を取り除く

当会の年に1度の総会が実施されます。

その際に別室にて子供達の見守りと話し相手・遊び相手をしていただきます。

12:00 集合

子供達とその保護者の皆さん数名と昼食を摂りながら交流

13:00 保護者は別室にて総会参加

子供達の見守りと話し相手・遊び相手

(最低1名の保護者はご一緒に見守ります)

17:10 片付けをして終了

*子供達の人数や年齢は現在確定していませんが、例年は小学生数名です。

*それぞれの子供の特性に合わせた対応が必要となる場合があります。

*各子供の特性等については保護者から当日、簡単なメモをお渡しします。

活動期間

6月23日(日)

参加学生

T-ACT ボランティア：4人 (託児人数12人)

活動報告

●受入団体担当者

託児の人数が12人と多かったため、T-ACT でお願いした方の他に以前より当会にご協力いただいている方にもお願いし、6名の方で12人の子供達を見守っていただきました。

昨年はボランティアの方と入れ違いで親は総会に参加したため、子供達も学生さんも初対面で戸惑いが大きかった反省から、今年は総会の始まる1時間前に集合し、親も同席して顔合わせの会を実施しました。そのため子供達も学生さんもお互いに慣れたところで子供達をお願いできたのではないかと思います。

見守り中はおしゃべりをしたり、女の子たちはファッションショーごっこ、男の子たちは体を使った遊びなど、思い思いに過ごしました。子供達が危険なことをしそうになったり、遊びに夢中になって備品を傷つけたり羽目を外しそうになった時には、さりげなく他のことに気持ちを向けさせたり、危険のないようにサポートしたりしていただきました。少し盛り上がりすぎた面もありましたが、半日を楽しく事故なく過ごすことができました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

活動内容は発達障害のある子どもを対象とした託児ボランティアで、私にとっては初めての経験だったので、適切な対応がとれるか不安でしたが、特に困りごとはなく、自分も子どもたちと一緒に楽しく遊ぶことができました。「この子たちは発達障害のある子たちなんだ」と構えるのではなく、それぞれの興味に寄り添い、向き合うことが大切だと学びました。

今後の課題

安全管理や子どもたち同士でトラブルが発生した際の適切な対応を学生スタッフ全員がとれるように、リスクマネジメントを徹底するべきだと感じました。

●学生参加者：藤田翔子（応用理工学類 2年）

活動の成果

総会中の親の子供たちの見守りをした。楽しく遊びつつ、感情的になってしまった子の面倒をみた。障がいのある子をもつ親御さんと関わって話を聞いたり、自分で子供たちと遊んだり話をしたりできて、とても有意義だった。

●学生参加者：内山雄太（工学システム学類 1年）

活動の成果

発達障害の子供たちと遊ぶ。

子供たちと楽しく遊べたので目標はだいたい達成できたと思います。

活動を通して発達障害を持った子供たちと遊ぶ方法を学べたと思います。

今後の課題

もっと積極的に自分から遊んでいく必要があると思いました。

遊ぶ方法をたくさん提示する必要があるなと思いました。

子供をもっと安全に遊ばせる必要があったかもしれない。



【子どもと遊ぶボランティア】お休みの日に子どもと関わりながら自分を磨こう！（19013V）

受入団体名：茨城 YMCA（18013G）

活動内容

子どもたちに野外（キャンプ）活動を通して、生きる力を養います。

現在170名の登録があるディキャンプクラブは、各対象（年齢）によって実施を行っております。幼児、小学生、中高生とそれぞれの年齢に合わせて野外活動を実施、お友だちとの関係づくりや様々なチャレンジを通して、心と体を育てることを目的にしております。

子どもたちがさまざまな体験を通して、成長していきます。共に寄り添ってくれるボランティアリーダーとの出会いも大切な目的です。

○準備期間

毎週木曜日19時～21時でボランティアリーダー企画会を実施。

（事前確認のため、活動前の2週は参加いただけるとありがたいです。）

ボランティアリーダー会では、活動場所やプログラムの案出しから当日の流れ確認なども行います。また子どもについてのトレーニングも実施。

活動期間

5月25日～7月15日

参加学生

T-ACT ボランティア：3人



活動報告

●受入団体担当者

小学生を対象とした野外活動には、複数の役割があります。企画を練る中心となり、子どもたちが楽しい時間を過ごせるように考える「プログラムリーダー」というもの。5～6名の小集団（＝グループ）の担当となり子どもたちの成長を導く「グループリーダー」。

この活動でも、YMCAのボランティア活動に4年間精力的に参加してくれている学生さんが企画内容を考え、当日も全体の進行役を担い、楽しく活動を行えるように取り組んでくれました。プログラムリーダーは全体を見ながら動く役割のため、子どもたちの状況などを確認しながら臨機応変に対応することが求められます。全体で60名近い参加者がいましたが、子どもたちの様子を細かくみながら、たくさんの笑顔を引き出してくれました。子どもたちの笑い声が公園に響く様子を、保護者の方も目を細めてくださいました。

また、グループの担当となった学生さんたちも、安全面に配慮しながら、子どもたちの挑戦を応援してくれました。集合した朝は顔がこわばっていた初参加の子どもも、いつの間にかグループの輪に馴染み大きな声で「そうだ！こうしたらいいんじゃない？」と笑顔で活動のアイデアを出す姿が輝いていました。リーダー経験を通して、子どもたちのはつらつとした明るさにたくさんの元気や勇気をもらうと、多くの学生さんが口にしています。最初はボランティア＝貢献しようというつもりで始めた活動のなかで、仲間と切磋琢磨していくことや子どもたちの一瞬一瞬の輝く表情を通して、いつの間にか学びが深まり、自分が多くのことを与えられていることに気付くと、社会人になった今でも活動に帰ってきてくれるOB・OGも多くいらっしゃいます。

2019年度も多くの活動を学生ボランティアの皆さんが支えてくださいました。そのなかで、自らの学びを深め、社会に出た際に自信となる多くの経験を積んでくれたことと思います。これからもたくさんの学生さんがYMCAに出会い、やりがいを感じながら楽しくボランティアする場を提供していきたいと考えています。ご参加いただきありがとうございます。

●学生参加者：細川怜椰（知識情報・図書館学類 4年）

活動の成果

つくわいクラブ第一回活動に進行役のプログラムリーダーとして参加しました。1回目の活動だったため、新しいリーダーや子供達への配慮を考えつつプログラムを作成しました・当日はゲーム大会やウォークラリーを実施し、リーダーとメンバーやメンバー同士、リーダー同士が楽しく距離を縮めることができました。1回目の活動として、つくわいの楽しさを子供達に伝えることもできました。

今後の課題

年度始めだったため、グループの編成には頭を悩ませました。また、ウォークラリーのコースが長かったため、グループごとの進度に気を使う必要がありました。第1回目の活動として楽しさを伝えることはできたので、次回以降のつくわいではより多様な楽しみ、面白さを伝えていけたら良いと思います。



塾に行きたくても行けない子どもたちのための無料塾 (19015V)

受入団体名：特定非営利活動法人 居場所サポートクラブロベ (16006G)

活動内容

多忙もしくは経済的に子どもにおやつも用意できない、塾の送迎ができない、子どもを塾に行かせたいが経済的に難しいなどの子どもたちに無学年教材を使用し、その子の学習状況に合わせた指導・学習を行います！

—経済的な理由で子供達の未来をあきらめさせない無料塾—

【対象】

小学生・中学生・高校生

【日時】

谷田部地区 毎週火・木 18:30~21:00 (食事 19:30~20:00)
竹園地区 毎週月 18:30~21:00 (食事 19:30~20:00)

【内容】

ボランティアさんには担当の児童・生徒についていただき、学習計画及び目標にそって学習指導を行っていただきます。小学生は主にドリルの採点、中学生は強化科目の指導をお願いしています。また子供達の学習指導経過については、ロベスタッフとボランティアさんの間で振り返りミーティングや研修等を行い、チーム一丸となって子供達の「安心できる学習環境づくり」に取り組んでいきます。

活動期間

4月1日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：14人



活動報告

●受入団体担当者

・無料塾 ROBE つくば学習会（谷田部教室・竹園教室・万博教室）の学習支援

●学生参加者：山口和紀（障害科学類 3年）

活動の成果

子どもたちに勉強を教えた。生活環境に問題を抱えている児童・生徒が多いため、ソーシャルワークの勉強になった。

今後の課題

生活困窮者自立支援制度そのものに問題があると思うが、参加している NPO については学習支援機能においてはきちんと回っている一方で、生活支援の体制をどのように作っていくのか、という点が課題だと考えている。



●学生参加者：小林真子（看護学類 1年）

活動の成果

子どもの勉強に付き添い、わからない問題を解説する。

普段小学生と話す機会がないので、話し方に気を付けている。

今後の課題

やる気がない時の勉強のさせ方。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

小学生の問題集の採点や指導などを行った。活動を始める以前は小学生に勉強を教えたことがなかったため、わかりやすく教えることの難しさや楽しさを学ぶことができた。また、活動終了後に毎回行うボランティアコーチ同士のミーティング内で、子どもたちの間で起こっている様々な問題について知ることができ、大学の講義だけでは知ることができない教育現場の様子についても多くの知見を得られた

今後の課題

この無料塾は、子どもたちに勉強を教えるだけではなく、子どもたちと話をしながら彼らの心身の健康状態を把握することも活動の1つであったが、勉強に関する話をする時間と雑談をする時間のバランスが難しかった。複数の小学生と交流したが、長時間でも集中して学習できる子どももいれば、すぐに飽きてしまう子どももいたため、それぞれに適したバランスで接しようと思ったが、なかなかうまくいかなかった。今後は、さらに密接に子どもたちと交流し、より良い関わり方を模索していこうと思う。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

塾に行きたくても家庭の事情等によりいけない子どものために主に学習支援をするという内容です。単にわからないところを教えるだけでなく、相談にのることもあります。実際に関わりあうことで、塾に行きたくてもいけない子どもたちの実情、塾に行きたくてもいけない子にとって学習をするための環境の確保は難しいこと、居場所づくりとしても大切な役割を果たしていること等多くのことを学びました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

自分が担当していた生徒が無事志望校に合格して報告してくれた時、とても達成感がありました。また、子供たちと関わることで日々パワーをもらっていました。

子供たちは大学生との交流をととても楽しみにしてくれているので、もっと多くの学生さんに参加してほしいと感じました。

今後の課題

勉強自体が嫌いな子供たちにどのようにやる気を引き出したら良いかなど、もっと考えていきたい。



つくばこどもの青い羽根学習会（子どもの学習支援事業）(19016V)

受入団体名：NPO 法人子連れスタイル推進協会（18015G）

活動内容

つくば市が実践する、こどもの青い羽根学習会では、生活困窮者自立支援法に基づき、生活困窮世帯の子どもに対して、教育の格差を解消するため、無料で学習支援や居場所の提供を行っています。

市内の小学校・中学校・義務教育学校に在籍する、生活保護・就学援助を受給する世帯の4年生から9年生（小学4年～中学3年まで）を対象に、学校の勉強の復習、宿題の習慣づけ、学び直し、受験のための進学支援や、日常生活習慣や社会性を育み、「生きる力」をつける支援を目的とした活動です。

子連れスタイル推進協会では、茨城県八千代町と境町でも学習支援事業を実施しており、令和元年につくば市梅園教室を開設いたしました。ユニークな講師陣と一緒に子どもたちの未来を応援しませんか？まずは見学からでも大歓迎です。気軽にご連絡ください。

▼つくば青い羽根学習会詳細 HP

<https://www.city.tsukuba.lg.jp/kosodate/kosodate/1006976/1006979.html>

活動期間

5月11日～3月28日

参加学生

T-ACT ボランティア：1人

活動報告

●受入団体担当者

主に参加生徒（小・中学生）の学習指導を行っていただきました。とても穏やかな指導で、積極的に取り組む姿勢がみられました。

生徒とのコミュニケーションの取り方にも工夫がみられ、子どもたちも心を開いている様子で安心してお任せできました。また、運営についての意見交換会にも積極的に参加され、事業に対する想いを語る場面もありました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

子どもたちの持っている能力の大きさを感ずることができた。教科書に沿った学習に縛られない自由な学習に取り組む子どもたちの生き生きした姿を見ることができた。

今後の課題

子どもたち同士の中で起こることに、大人がどこまで介入するべきかを考えさせられた。

外国人児童・生徒の学習サポート（19019V）

受入団体名：認定 NPO 法人茨城 NPO センター・コモنز（16003G）

活動内容

常総市には約4000人の外国人が住んでおり、市内には多くの外国につながる子ども達があります。来日直後で授業の理解が難しい子どもや、日常会話は問題なく話せてもサポートが必要な子どももいます。学習サポーターとして子どもたちに勉強を教えるボランティアを募集します。

コモنزでは、週一回放課後に行う「アフタースクール」（土曜日）や平日に学童保育を実施し、外国につながる子どもたちの学習支援を行ってきました。

<活動の概要>

場所：えんがわハウス（常総市水海道橋本町3571-1）

日時：【小中学生】毎週土曜（14：00～16：00）

外国人に教えた経験や塾講師の経験などは必要ありません。外国や教育に興味がある方、子どもが好きな方などたくさんの方が関わってくださることをお待ちしております。

活動期間

4月1日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：2人

活動報告

●受入団体担当者

コモنزでは、毎週土曜日（14：00～16：00）に外国にルーツを持つ子どもへの学習支援「アフタースクール」（小中学生対象）を実施している。ボランティアには、子ども達の学習サポートとして活躍している。宿題のサポートのみならず、日本語指導も丁寧にしてくださり、子どもとの信頼関係も構築していただいている。英語、ポルトガル語が堪能なボランティアのため、子ども達も母語で会話ができることに安心感を抱いている。

●学生参加者：小西裕美子（教育研究科 修士課程2年）

活動の成果

毎週土曜日の14時から16時まで、茨城 NPO センター・コモنزが常総市で行っている外国人児童・生徒の学習サポート事業にて、小・中学生が学校の宿題を行う際に、理解につまずいている箇所、図や例を多用するなどして相手に応じてわかりやすく伝えるための工夫を、体験的に学ぶことができたと思う。

今後の課題

学校と NPO の間で、対象の子どもへの教育について目標や方針が共有され、ボランティアにも伝わっているとよいと感じた。対象の子どもが学校から課されている、本人の日本語の能力より数段高いレベルの宿題に時間を使うより、本人の日本語の能力レベルに応じた内容を段階的に学習させてあげる方が効果的なのではないか、と思うことがあった。

子どもと一緒におもいきり遊ぼう！YMCAボランティア募集！（19023V）

受入団体名：茨城 YMCA（18013G）

活動内容

野外（キャンプ）を通して、子どもたちの心と身体をたくましく育てます。ディキャンプクラブは、幼児から高校生までの幅広い年代に声をかけて、対象ごとに集まる活動です。遊び場が少なくなった今だからこそ、リーダーが寄り添い、のびのびと過ごす環境でたくさんのチャレンジをしてほしい。失敗も成功も笑顔も涙も、すべてが糧となる。そんな子どもたちの生きる姿に向き合うことで、大学生リーダー自身も成長していきます。

○準備期間

毎週木曜日19時～21時でボランティアリーダー企画会を実施しています。
実施場所は【茨城 YMCA 東新井センター】（国際会議場・デイズタウンお向かい）です。
参加したい活動の【2週間前】から企画会にご参加ください。
アルバイトやサークルで難しい場合は、別途必要な情報をお知らせしますのでご相談ください。

○企画会

ボランティアリーダー会では、活動場所やプログラムの案出しから当日の流れ確認までを行います。
子どもと遊び慣れていない人でも大丈夫。
どんなことをすればいいか、歌を歌ったりゲームをしたり、あらかじめ企画会で練習ができます。

活動期間

9月1日～3月31日

参加学生

T-ACT ボランティア：4人

活動報告

●受入団体担当者

小学生を対象とした野外活動では5～6人のグループを1～2名でまとめる担当リーダーとして活動に参加していただきました。活動中は子どもたちの安全を守りながら初めて会う子どもたち同士が仲良くなれるように子どもたちに関わり、関係づくりをサポートしていただきました。

活動後は保護者の方にその日の子どもたちの頑張りや、お友だちの様子、今後の成長への期待を伝える役割もあります。初めて参加される学生さんは保護者の方とお話するなかでも緊張が見られましたが、先輩たちの様子を見てコミュニケーションをとるポイントを学んでくれたかと思います。YMCAの活動では、参加者の子どもたち、その保護者の方や共に活動する仲間の学生、社会人になってもボランティアとして支えてくれるOBOGの方など、多くの出会いがあります。これからもたくさんの学生さんにYMCAを通じて豊かなつながりをつくり、自分が少しずつ変わっていくことを実感する楽しさを感じてほしいと思います。活動に参加していただきありがとうございました。



●学生参加者：鈴木夏乃子（体育専門学群 1年）**活動の成果**

バスにてわんぱく公園に行きました。グループごとに地図をもって広大な公園内の好きところで遊んですごしました。大きなモアイ像のある広場で鬼ごっこをしたり巨大迷路に挑戦したり、子供たちと一緒にとても楽しく遊びました。お昼を一緒に食べながらみんなでおしゃべりをして、今日初めて会ったお友だちとも仲良くなれました。とても充実した一日になりました。

今後の課題

喧嘩して泣いてしまった子を前にして、自分は何もできませんでした。次はせめてお話を聞いてあげられるように、子供のことをしっかり見ること、そして見ていることが伝わるように接していきたいと思いました。

●学生参加者：山下恵太（教育学類 4年）**活動の成果**

今回は11月と1月の「つくわいクラブ」（小学生対象）に参加しました。11月の活動は栃木県のわんぱく公園でグループごとに園内を散策し、1月の活動では紙コップを使った簡単な工作をして遊びました。

活動内容は毎回異なりますが、いずれの場合もボランティアリーダーの一番大切な役割は「全力で一緒に遊ぶ！」だと思っています。時には子ども達と本気の鬼ごっこをしてヘトヘトになってしまうこともあります（笑）、目の前の子どもに全力で向き合う姿が子ども達に伝わり、信頼につながってくると思います。私も1年生の頃はどのように子ども達と接すればよいか分からず、上手くいかなかった時期もありました。しかし、今振り返って考えてみると、最初から積極的に関わっていきこうとする姿勢がお互いにとって良いと思っています。

4年間YMCAの活動に関わってきましたが、非常に有意義な経験をさせて頂いたと思います。関係者の皆さまありがとうございました。

今後の課題

今回の2回の活動の中では、特別支援が必要な子どもとの関わり方について考えさせられました。YMCAでは一人ひとりの個性を尊重しています。どのような「個性」のある子に対しても同じように、その子にとって最良と思うことを探ることに試行錯誤しました。その経験はこれからの人間関係でも活かせるのではないかと思います。

また、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、3月の活動が全て実施することができなくなってしまったため、学年最後、そして学生生活最後にこれまで関わってきた子ども達に対して別れの言葉やお話をする機会を持つことができませんでした。その場でこれまで見てきて伝えたいメッセージやまとめの言葉をしようと思っていたのですが、中途半端になってしまったのが、心残りではあります。



【チャリティーラン】 障がいのある人と共に走ろう！（19027V）

受入団体名：茨城 YMCA（18013G）

活動内容

「私たちは障がいのある子どもたちを応援しています」

遡ること1987年。東京で始まったこのYMCAの「チャリティーラン」という活動は、世界中にネットワークを持つYMCAの活動を通して現在は全国21か所に広がっています。

年間を通して15,000人以上が参加するこの活動では、いただいたご寄付やご支援を「障がいのある子どもたちの笑顔のために」用いています。

茨城YMCAのチャリティーランは今年で第6回目を迎えます。今年の開催日は…2019年11月16日（土）!!!

障がいのある子どもたちがわけへだてを受けることなく、ともに幸せに生きていける社会の実現を目指すために、毎年秋の洞峰公園で300名の人が集まり、爽やかに汗を流しながら共に手を取り合って楽しく社会貢献をしています。もちろん走ることに自信がなくなっても大丈夫！ボランティアの形は様々です。

受付、コースでの応援など、自分に出来る形を相談しながら関わるすることができます。

さあ、あなたも一緒にスポーツの秋に社会貢献をしながら楽しみませんか？

■活動内容

前日の準備作業、当日のコース整備、大会運営補助、代走者、片付けなど。

■事前準備

当日までに1回～2回、役割とスケジュールの確認をさせていただきます。

茨城YMCA 東新井センターにご来館いただき、担当者とお話をお願い致します。

来館される日程は応相談です。1回の打ち合わせは30分～1時間ほどです。

平日10時～20時までのスケジュールでご相談ください。

活動期間

11月16日（土） 7：30～16：30

参加学生

T-ACT ボランティア：4人



活動報告

●受入団体担当者

会場設営から片付けまで、積極的に参加してくれました。大会中は主に「チームランナー」として、障がいのある方と4人一組のチームで交流を深めながら、公園内に設置されたコースを爽やかに走り抜け、参加者の方と「たすき」と「心」をつないでいきました。朝は緊張も見られましたが、1日を通して幅広い年代の運営ボランティアスタッフたちとも打ち解けて、豊かな出会いの場になったのではないのでしょうか。ご参加に心より感謝致します。

●学生参加者：高田哲維（生物学類 4年）

活動の成果

障害のある方々と関わり、共に完走することで達成感を得られた。

今後の課題

自分から話しに行くなど、もっと積極的になれたら良かった。

●学生参加者：鏡沙弥香（看護学類 3年）

活動の成果

T-ACTの授業でボランティアを知りました。人と関わるのが好きで、もっと多くの人と知り合いになりたい、誰かの助けになりたいと思いボランティアに参加しました。障害の方と接する機会が少なく、手助けをした、もっと障害の方との接し方を理解したいと考え今回このプロジェクトを選びました。

実際多くの方と知り合いになることができ、自分の行動や発言が障害の方にどのように伝わるのか、どのような説明がいいのか、など看護の分野において考えることがたくさんでした。このような機会は少なかったのも良い時間でした。「ありがとう」と感謝されたり、多くの人との友達になれたのはとても嬉しいです。

今後の課題

生じた困難は特にありません。自分からどんどん声をかけてやることを見つけられました。初めての人と関わるのに少し緊張しましたが、終わる頃には笑い合いながらお話できたと思います。

今後の課題としてもっと多くのボランティアに参加して、自分のできることを広げていきたいと思っています。そして無理のないように活動していきたいです。

●学生参加者：LU YILAN（図書館情報メディア研究科 研究生）

活動の成果

洞峰公園で一週走った。ポジティブネットという四人チームとして完走した。

今後の課題

競走に参加する人はほとんど成人なので、これから子どもたちが参加する姿も見たい。



☆スクールフェロー☆吾妻中学校で学習支援・部活動指導・養護教諭の活動補助ボランティア (19028V)

受入団体名：茨城県県南生涯学習センター (12001G)

活動内容

茨城県県南生涯学習センターの生涯学習ボランティア事業（スクールフェロー）として県南地区の小中学校の授業、部活動、学校行事等のサポートを行います。将来、子どもに関わる職業を希望している方にもおすすめです。

- ① 学習支援
各教科の補助、特別学級、外国籍生徒への日本語指導など
- ② 部活動指導
放課後（16：00～18：30）の部活動で顧問と一緒に指導や安全確保への支援
- ③ 養護教諭活動補助
保健室での生徒対応、各種検査、掲示物や資料の作成のサポート

①～③活動時間、頻度等は要相談。

活動期間

10月1日～3月10日

（内訳）11/20、11/21、11/27、12/11、1/14、1/20、1/21（2人）、

1/22、1/23、1/24、1/30、1/31（2人）、2/4、2/17、2/25 各日1人

参加学生

T-ACT ボランティア：3人

活動報告

●受入団体担当者

年度末に近づき、様々な学校行事や学級指導が行われ、授業だけでなく様々な教育活動に関わってもらえることが出来た。特別支援学級の生徒にも関わってもらい、一人一人に応じた対応を診てもらえることができた。教員志望の学生の数が伸び悩む中、学校の仕事に少しでも興味をもった学生を大切にしたいと思い、スクールフェローを受け入れてきた。来校する学生はとても意欲があり、是非教員を目指して欲しい。

●学生参加者：總山萌（看護学類 3年）

活動の成果

保健室でのボランティアが主たる活動でした。特に、スキー合宿前後の期間だったため、校外学習前の保健指導や、保健管理物品の作成（嘔吐物処理セット、部屋ごとに体温計セットなど）を実際に見せて頂きました。自分が養護教諭として勤務する際のイメージが膨らませる、教員採用試験での場面指導などに生かせる内容が多かったと感じています。またそれ以外にも、保健室での日常的な業務の手伝いも行いました。具体的には、水質検査や照度計などの環境衛生管理業務や、出欠確認及び欠席理由や来室生徒の間診内容などのパソコン入力などが挙げられます。大学の講義で習った知識技能を実践に落とし込む、自分の経験として還元するということことができました。また講義では習わないような内容もボランティアでは学ぶことができます。保健室の掲示物作成において、定期購入している養護教諭向け雑誌からイラストや資料を抜粋することで業務の効率化を図っていたり、保健だよりは昨年のもとの今年度の生徒たちの傾向を踏まえてどんな情報を発信したいか考えて作成していらっしやるとのことでした。このような実際の保健室における工夫やコツは、大学では中々教えてもらえません。養護教諭は1校に1人しか配置されないことがほとんどであるため、養護教諭志望の学生こそ、新卒でも実践力が必須であり、それを身につけておくためにはこのようなボランティアが有用だと思いました。

今後の課題

特になし。とても良くしてくれる先生ばかりでした。特に養護の先生は、来室人数が少ないとき、保健室にいる時とは違う子どもたちの授業での様子を見せてくださったり、また私が教員採用試験を来年に控えていると知るや否や、試験に出やすいポイントを沢山教えてくださいました。

●学生参加者：匿名希望

活動の成果

吾妻中学校で養護教諭の職務の支援を行った。健康観察の記録を入力したり、保健室を訪れた生徒たちと交流したりするなど、多くの貴重な経験をする事ができた。2週間に1度程度の活動であったため、活動した回数は少なかったが、1回毎の活動時間が長く非常に充実していた。また、先生方から教職についてのアドバイスをいただき、今後の大学生活でどのような力を身に付ける必要があるのかを考える事ができた。

今後の課題

初対面の生徒とあまり積極的に話すことができなかった。話しかけてくれる活発な生徒が多かったが、そうではない生徒に対してはこちらから話を聞きだすべきであったと感じた。また、急に体調が悪くなった生徒や授業中にけがをした生徒が保健室を訪れた時に、迅速な対応をすることができなかった。今後は、どのような状況においても積極的かつ臨機応変に対応することができるように、さらに経験を積んでいきたいと思う。

【スキーキャンプ】子どもの成長を白銀の世界で応援しよう！（19030V）

受入団体名：茨城 YMCA（18013G）

活動内容

「冒険心が自信に変わる」そんな挑戦をしたことはありますか？
YMCAのスキーキャンプでは、子どもたちがスキーへの挑戦を通して成長していく姿を見守ります！
「ちょっとドキドキするな…」の気持ちを応援して、子どもたちの「やってみよう」につなげてあげる、そんな存在が大学生の「リーダー」です。
この冬は、子どもたちの笑顔を見にゲレンデへ！

- 事前準備ミーティング：毎週木曜日19時～21時
- スキートレーニング：12月6日（金）夜発～9日（月）@群馬県
- 1日準備会：12月中旬～キャンプ5日前頃
- 顔合わせ会：12月15日（日）*
- キャンプ：12月27日（金）～30日（月）
- 思い出会：1月25日（土）*

※参加する子どもたちや保護者の方と集う会です。

活動期間

11月13日～1月25日

参加学生

T-ACT ボランティア：5人



活動報告

●受入団体担当者

キャンプ中は3泊4日の間子どもたちと寝食を共にし、絆を深めていきます。生活グループとして6名前後の子どもたちをまとめるリーダーとしての役割と、スキー指導として学生それぞれの技術に応じて3、4名程度の子どもたちを対象にスキーの指導をしていただきました。スキーキャンプに参加するにあたり、初めて子どもたちにスキーについて技術的な指導をすることに不安を感じる学生もいましたが、スキーの指導について学ぶキャンプに参加してもらうなどして、子どもたちとのキャンプを迎えることが出来ました。また、キャンプ中は子どもたちが就寝後にリーダーたちで集まり、リラックスした雰囲気の中で、子どもたちの体調面、生活やスキーでの成長や課題を共有し、子どもたちに還元していきます。子どもたちが主役の日中だけでなく、夜は仲間同士で振り返る時間を持ち、学生自身もキャンプを通して自分たちの悩みや課題に向き合い協力しながらキャンプを作り上げていきます。大学生生活は自分を磨く時間と捉える方も多いですが、そのなかでボランティア活動を通して他者が主役となる活動に身を置くことは、巡り巡ってたくさんの経験を与えてくれる豊かな時間になります。仲間たちと共に作り上げたキャンプの時間は社会に出てからも大きな自信につながるのではないのでしょうか。今回ご参加いただき、子どもたちと楽しい時間を過ごしてくれた学生の皆さんの、今後の活躍を応援しています。ありがとうございました。

●学生参加者：北沢佳苗（比較文化学類 4年）

活動の成果

私は今回のスキーキャンプの活動で、プログラムリーダーという企画・全体進行役を務めました。事前の準備は卒論執筆期と重なり苦労したものの、ボランティア参加の大学生（リーダー）たちと毎回楽しく準備の時間を共有できたため、苦労の中にも充実感があつたと振り返って思います。本番では子どもたちにスキーを教えながら、彼らと生活を共にしました。子供のスキーが上達し、次のレベルへと上がった瞬間や、キャンプソングを楽しく歌えた瞬間、夜のゲーム大会が大いに盛り上がった瞬間には、「キャンプに来てよかった」「このキャンプを作ることができてよかった」と感じる事ができました。自分の卒業に際して、子どもたちやまわりのリーダーたちが独自にサプライズプレゼントを用意し、キャンプでそれを渡してくれたときには、涙があふれました。

今後の課題

事前準備のやることが多いため、新しいリーダーが入ってきたときに、彼らへのきめ細かいフォローアップが必要。きちんとリストアップし、共有したい。

●学生参加者：高田哲維（生物学類 4年）

活動の成果

1人1つの生活グループを持ち、4日間子供たちと協力し成長しながら過ごせた。スキーが全く初めての子たちに、スキーの楽しさを伝えられた。子どもたちと一緒に泊まったり、スキーを教えたりと初めてのことが多く心配だったが、僕自身とても楽しい時間を過ごせた。

今後の課題

スキーを教えるにあたり、途中で飽きてしまう子もいたが上手く休憩を挟んだり、気を遣ってあげられなかった。



●学生参加者：鈴木夏乃子（体育専門学群 2年）

活動の成果

小学1年生から高校2年生までの子供たちと生活を共にし、スキーのレッスンをを行った。様々なプログラムの中で、子供たちの挑戦する姿やグループの団結力を高めていく様子を見ることができた。短い時間の中であらゆる工夫を凝らし、一つのキャンプに創り上げていくお手伝いできたことに達成感を感じた。

今後の課題

子供たちの何気ない言葉に対するフォロワーができず、悲しい気持ちになってしまう子がおり、難しさを感じた。自分がわからないことが多く、焦ってしまうことが多かった。

●学生参加者：山下恵太（教育学類 4年）

活動の成果

スキーキャンプは、その名の通り「スキー」と「キャンプ」を同時に経験します。日中は子どもを引率してスキーのレッスンをを行い、それ以外の時間は7人の小学生グループとキャンプの生活を行いました。今年は雪が少なく、使わせて頂いたスキー場では開いているコースが2つしかなかったため、いかに飽きさせずにレッスンをを行うのかも重要になってきました。1本ずつ目標や注意するポイントを提示して丁寧に滑ったり、滑る順番やタイミングを工夫したり、間でおもいっきり雪遊びをする時間を取りながら、楽しく、スキーの成長につながるようなレッスンができたと思います。キャンプの生活に関しては、近くにいる分時にはけんかをしてしまう場面もありましたが、それを乗り越えることでさらに仲良くなる経験を目の当たりにして非常に感動させられました。

いつも貴重な経験をさせて頂いている茨城YMCAさん、キャンプの度にあたたかいお言葉を下さる保護者の方々、そして良いキャンプにしようと共に努力してきたボランティアリーダーの仲間達には感謝してもし尽くすことはできません。ありがとうございました。



今後の課題

スキーに関しては、開いているコースが少なかったために、例年以上にコースが混雑していたことで、安全面に気を付けることが難しく感じました。他の団体の方とも譲り合いながら、安全を第一に意識してスキーレッスンに臨みました。

また、キャンプの生活に関しては、毎回担当するグループによって、子どもたちによって「どうすれば楽しくキャンプを過ごすことができるのか」という方法が異なるので、関わり方にはいつも考えさせられます。「どうしたら相手を楽しませることができるか」を考えることは、子どもと関わる活動に限らずどのような場面でも重要なことであるので、貴重な経験であると思います。

●学生参加者：鏡沙弥香（看護学類 3年）

活動の成果

前回も参加させていただいたYMCAのボランティアで、子どもたちにスキーのインストラクター・生活グループのリーダーとして参加させていただきました。子ども達は3泊4日で大きく成長し、私の言葉にもいつも耳を傾けています。私のちょっとした仕草、表情で様々なことを考えていることがわかりました。特に5年生などの高学年の女の子では、同学年、上下の人との人間関係を構築していく時期であり、短い期間でも喧嘩や仲間はずれ、嫌がらせなど多くの問題がありました。しかし最後にはみんなで笑って仲直りをし『楽しかった!』と帰っていく姿が見れました。私自身も初めての体験で、子どもたちの純粋な質問や想いに自分を見つめるいい機会になりました。

今後の課題

良いこと、悪いことの区別をただ伝えるのではなく一緒に考えることが大切だと終わってから考えました。一方安全面に関わることはしっかり教える、伝える、理解してもらったことが必要です。特に「なんで年下に優しく（重たいものを持つなど）しなければいけないのか」「なんで年上だからってたくさんしたこと（みんなを連れて行く）をしなければいけないのか」と純粋な疑問にうまく答えられなかったと思いました。

『年上だから、年下だから』そんなこと関係なく困っている人がいたら助ける、年下はまだ経験が少なくできないことがみんなより多いから一緒に手伝って教えてあげる、このようなちゃんとした答えのない問題がたくさんあります。ボランティアの精神、みんなと協力することを子どもなりに考えてほしいと思いました。



2019年度 実施状況報告

つくばアクションプロジェクト（以下、T-ACT）は、学生が自らの関心に基づく多種多様な自発的活動を、新たな人間関係を構築しながら実行するよう促進することで、学生の人間力を育成する筑波大学の人間力育成事業である（図1）。その始まりは、2008年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に採択された事業「共創的コミュニティ形成による学生支援—学生・教職員が一体となった新たな自主的活動の創生—」にある。学生支援GPが終了後も、筑波大学の人間力育成支援事業の一環として続けられている。

T-ACTには、学生が企画立案し展開するT-ACTアクション、教職員が企画立案し展開するT-ACTプラン、地域活動団体が実施する社会貢献活動に学生が自発的参加をするT-ACTボランティア（2012年度から開始）の3種類の活動がある。

T-ACTが支援する諸活動は、学生・教職員・地域による共創的コミュニティをベースに、半年以下の単発的・短期的活動であるため、アクティブな流動性をもつことを特徴としている。学生はそれらの活動を通して、様々な活動へ積極に加わる参加力、経験からより豊富な気持ちや教訓を感じ取る体験力、他者と関わり協調するコミュニケーション力、人をまとめ率いる統率力、ビジョンを具現化し創造する企画力といった「人間力」を養うことになり、自主性と社会性を備え、将来社会を担う人材として成長することができると期待されている。2018年度からは、T-ACTアクションの支援対象として、ビジネスにつながりうる活動も含めるようになった。すなわち、プレ的なビジネス体験を支援し、ビジネスに関するノウハウを体感しつつ、さらに発展的な支援につなげるという機能も担いつつある。

本報告では2019年度のT-ACTの支援活動についてのデータをまとめる。なお、データは2020年3月までにT-ACT推進室で把握できたものに限られる。その中でも過去10年分のデータを示すこととする。データの出自である学生からの活動報告等の資料は、提出されるタイミングが様々であるため、これまでの活動の全てが本報告の執筆時点で出揃っていないわけではない。したがって、本報告のデータは今後更新されることがある。

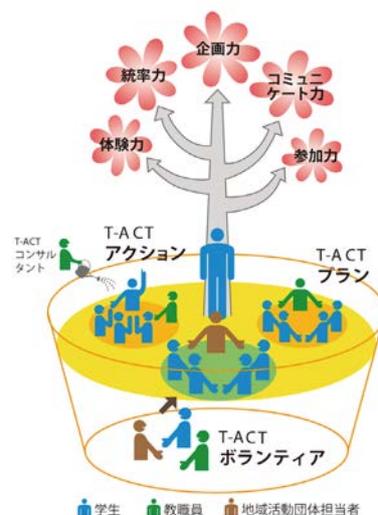


図1 共創的コミュニティ形成によるT-ACTの展開と学生の成長

1. T-ACTで申請された企画等の状況

2019年度のT-ACTアクション・プランの企画申請数は53件（アクション49件、プラン4件）であり、そのうち42件（アクション38件、プラン4件）が承認された（図2）。また、2019年度までの累積承認企画数は827件となった。2019年度に申請された企画における、プランナーは55名（重複者を除く実数は43名）であり、そのうち教職員のプランナーは4名であった（図3）。なお、プランナー数がアクション・プラン企画申請数よりも多いのは、前年度に申請された企画が2019年度に承認される等によって、年度の申請数と認められる企画数が異なってくるからである。学生オーガナイザーは225名（実数は194名）、教職員パートナーは54名（実数は41名）であった（図4、図5）。企画のパーティシパントは、各企画によって報告された参加者の概数を足し合わせた数のみを報告する。2019年度のパーティシパントの報告された総数は8059名であった（図6）。T-ACTボランティアに登録されている団体数は35件であり、登録団体から申請され、募集が承認されたボランティア企画は31件であった（図7）。また、T-ACTボランティア登録団体で活動した筑波大学生の数については、2019

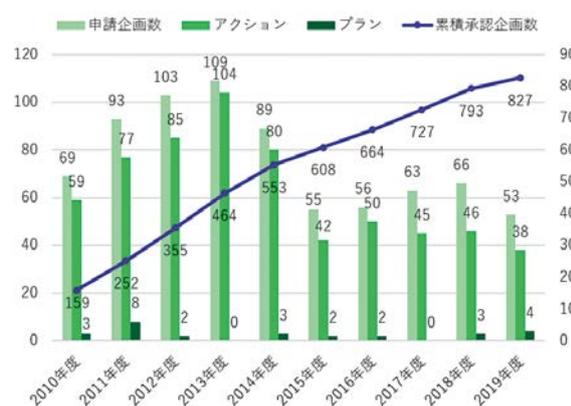


図2 アクション・プランの企画承認数の変遷



図3 プランナー数の変遷



図4 学生オーガナイザー数の変遷



図5 教職員パートナー数の変遷

年度から集計方法を変更し、T-ACT ボランティアに参加した筑波大学生の実数としての数を報告する。その数は97名であった(図8)。

T-ACT アクション・プランの申請数および承認数は2018年度から減少した。それに伴って、プランナー数、教職員パートナー数も減少がみられる。特に企画申請数について、ここ数年は微増であったものが転じて13件の減少が見られ、過去最少の数となった。企画承認数も過去最少の数である。特に10月以降の申請数が伸びなかったという実情が見られた。これには2020年1月より日本でも感染者の確認された新型コロナウイルスの流行の影響もあると考えられるが、それによって審議、承認を断念した活動は少ない。社会全体の風潮を受け、積極的な課外活動は控えるべきとし、申請そのものを見送った学生がいることも考えられるが、その影響は2020年2月以降の時期に対してのみで限定的であろうと思われる。10月以降の申請数の少なさは、後述するT-ACT フォーラム利用状況を踏まえて報告することとする。

一方で、T-ACT アクション・プランにおけるオーガナイザー数は増加しており、一つ一つの企画が昨年度よりも多くの学生を巻き込む企画であったと考えられる。パーティシパント数も大幅に増加している。しかし、パーティシパント数は学生による大まかな概数報告であり、実数の把握が不可能であるうえ、学生の数え方の基準の統一も困難な指標である。かねてより指摘してきた通り、パーティシパント総数の単純な大小で企画そのものの良し悪しや、T-ACTの実績判断の指標とするのは妥当ではないであろう(T-ACT推進室、2019『つくばアクションプロジェクト2018年度活動報告書』より)。2019年度は、学内における不特定多数への啓蒙活動や、学外における展覧を伴う活動、SNS上でのキャンペーン活動などが例年に比べて多く行われており、そういった活動において情報に触れた程度の参加者もパーティシパントとして報告する活動があったため、パーティシパントが例年に比べ大幅に高い報告数になったと考えられる。

T-ACT ボランティアへの登録団体数および承認活動数は例年と同程度であった。グラフには示していないデータを見ると、2018年までの登録団体のうち2019年度も登録を継続した団体は30あり、これは2018年度の登録継続団体の24件より数が多い。2019

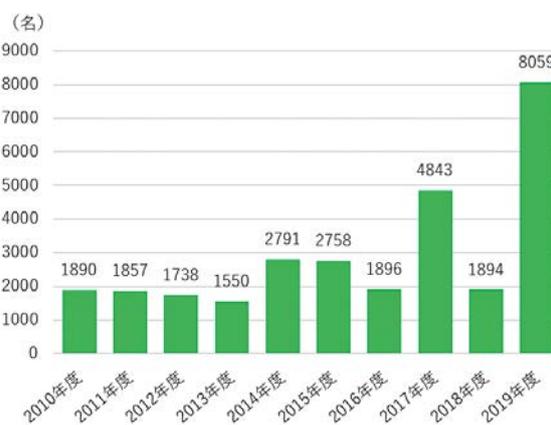


図6 パーティシパント報告数の変遷



図7 T-ACT ボランティアの登録団体数と承認活動数の変遷



図8 T-ACT ボランティア登録団体で活動した学生数の変遷

年度の4件の減少は新規登録団体の差によるものであり、むしろ2019年度は例年よりも継続更新を行った活動が多かったと言えるであろう。2019年度のボランティア参加学生数の増加については、一部の団体において参加人数が増えるといったことが見られている。一つの団体が複数の活動を募集し、それらの活動をまたいで学生の参加を促すという形で、学生に様々な体験を提供して下さるといったケースもあった。このように企画を横断したつながりで体験を提供できることは、T-ACT ボランティアを活用する学生にとって、一つの団体との信頼関係に基づいて、一つに留まらない活動を体験できるという点で、有意義であると考えられる。T-ACT を継続的に活用してボランティア活動を展開する上記のような団体を支援し、そのノウハウに学び、他の団体に活かせるように助言をすることで、登録された地域団体にとっても T-ACT のメリットとなるであろう。

T-ACT ボランティア参加者数は、少なかった2014年度や突出して多かった2016年度を除いて100名前後で推移しており、2019年度も97名であった。グラフには示していないデータであるが、ボランティアに参加する学生も2017年度からの3年間は新規で参加する人数の割合が半数を越えており、T-ACT がボランティア活動を始めるにあたっての窓口になっていることがうかがえる。先に述べたように、一つの団体が提供する複数の活動に参加する学生もいることから、継続的な利用も認められる。引き続き学生への周知を図り、ボランティア活動の入り口としての認知を広めつつ、登録団体の協力も得ながら、学生が様々な体験をできる機会を提供できると良いであろう。

2. T-ACT フォーラムの利用状況

T-ACT フォーラム来室者数の変遷を図9に示した。2019年度の延べ来室者数は1198名であり、実来室者数は796名であった。なお、2019年度からは延べ来室者の中に、T-ACT ボランティアに関連する学外者の来室者も含めることとした。したがって、2018年度からの延べ来室者数と2019年度からの延べ来室者数では意味合いが異なるが、同一グラフ上に示すこととした。また、来室者（学生、教職員、地域団体からの来客など）の来室目的の割合を図10に示した。来室目的についても、2019年度より集計方法を変更したため、これまでの変遷ではなく単年度の割合という形で示した。また、T-ACT ボランティアに関する来室者の利用目的も統合して集計した。T-ACT アクションの新規申請に関する相談などの利用（A 新規）が20.0%、T-ACT アクションの運営のための相談や作業といった利用（A 継続）が33.3%、T-ACT プランの新規申請に関する相談などの利用（P 新規）が0.3%、T-ACT プランの運営のための相談や作業といった利用（P 継続）が1.1%、T-ACT ボランティアに関する学生からの相談（V 学生）が5.9%、T-ACT ボランティアに関する地域団体からの相談（V 団体）が3.6%、T-ACT サポーターの来室（サポーター）が3.9%、総合科目に関する利用（授業）が17.5%、その他の理由による学生の利用（その他（学生））が11.5%、その他の理由による教職員の利用（その他（教職員））が1.2%、その他の理由による学外からの来室者の利用（その他（学外））が1.8%であった。

T-ACT フォーラムへの来室者数は2018年度に比較して減少した。例年通りの水準よりも少なめであると言える。では、こういった利用の減少が見られたかということ、2018年度の利用目的分類との比較とはなってしまうが、主にT-ACT アクション関連の利用やサポーターの利用が減少したと考えられる。2018年度のT-ACT アクション関連の利用割合は計68.5%であったが、2019年度は53.3%に落ち込んでいる。特に継続利用の数が低下している。また、サポーターによる利用も6.1%から3.9%に落ち込んでいる。この結果は、T-ACT におけるアクションの申請数の低下と連動していると考えられる。まず、学生によるアクションの企画運営という点では、メールによる相談で要件が解決した場面や、学生の独力で企画を進めることができた場面が多かったという点が継続利用の低下につながっていると考えられ、これらは悪い点ではないと言える。一方で、T-ACT の印刷機や各種物品を活用する企画が少なく、プランナーがオーガナイザーを引き連れて利用するといったことが少ないという面もある。これも学生の独力で実施できたという意味では良いことであるが、T-ACT を活用するメリットなどが



図9 T-ACT フォーラム来室者数の変遷

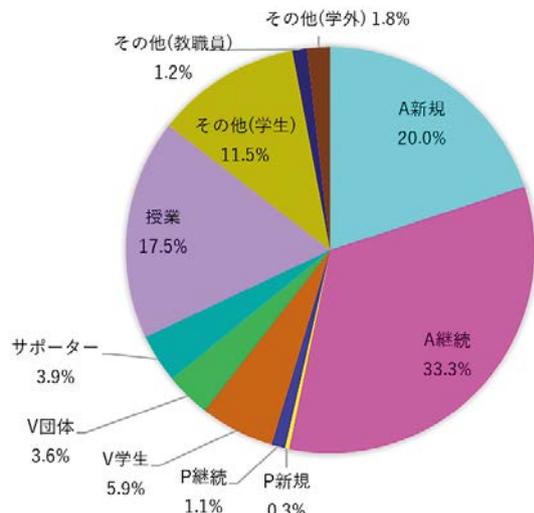


図10 2019年度のT-ACT フォーラム来室者の利用目的

十分に伝わっていないという可能性もある。せっかく利用できる T-ACT の資源を、「知らなかった」という理由で利用していないのだとしたら、それは望ましくないであろう。したがって、より積極的に T-ACT を活用するように促すことも必要であると考えられる。サポーターによる利用が少なかったというのも、同様のことが言えると考えられる。すなわち、サポーター自身も T-ACT をあまり頼らずに自身の活動ができたり、サポーターのサポートを他の学生が必要とせず活動できたりということも言える。また、2019年下半期の申請数が伸び悩んだことも含めて考えると、T-ACT のメリットなどの周知が不十分であるがために、企画を申請し、実行に移していく学生が T-ACT につながっていないという面もあると考えられる。したがって、既に T-ACT を利用している学生に対しても、まだ T-ACT がどんなところかを知らない学生に対しても、そのメリットをしっかりと伝えていく広報活動はますます重要であると言える。

利用割合が増えたものとしては、まず T-ACT ボランティアが挙げられる。2018年度はボランティア関連で計 4.2% の利用率であったが、2019年度は計 9.5% であった。T-ACT ボランティアは T-ACT フォーラムに入室してボランティア活動に参加するだけでなく、メールや電話といったやり取りで活動に参加することもできるので、実際の T-ACT ボランティア利用数は利用率以上に存在していると言える。T-ACT をボランティア活動の窓口として知り、活用する学生が増えていると考えられる。また、地域団体からの相談についても同様に、フォーラムに直接入室せずとも、メールや電話を通じた相談があり、地域団体のニーズに応じていると言える。こうした学生と地域をつなぐ機能を引き続き強化するとともに、より一層の広報が求められるであろう。

利用割合が増加した授業については、2018年度よりも履修人数が多く、かつ全体の利用者数が減ったための結果であろう。他の利用目的については大きな変化がないが、その他の割合が引き続き 10% を越えていることから、T-ACT に特に用事はなくとも利用できるような「居場所」としての機能や、とりあえず「やってみよう」を相談した上で他の適切な支援につながる最初の窓口の機能なども、引き続き保っていると考えられる。総じて、T-ACT フォーラムは、T-ACT に関する活動を促進する機能だけでなく、学生が気軽にかつ安心して過ごせる「居場所」の機能や、学生および地域団体にとって新たな活動を創生するためのコワーキングスペースのような機能など、多様な学生支援機能を持ちつつあると言え、その機能を十分に生かすための視点も今後の T-ACT を考える上で必要であろう。

3. T-ACT による人間力の成長

T-ACT アクション・プランの利用者の活動終了後の人間力の成長に関する調査を、Web アンケートで行っている。参加力、体験力、コミュニケーション力、統率力、企画力の 5 つを人間力の指標として想定し、それに代えて体験を通じた自己理解の深まりについて、それぞれを測定する質問項目を定めている（表 1）。

表 1 人間力を測定する項目

参加力：積極的に活動に取り組む力
活動の実現に向けて自分なりに努力できた
活動に積極的に関わることができた
活動の実行に貢献することができた
活動にできるだけ多く参加できた
互いに協力し合いながら、活動を進めることができた
体験力：活動の中で感じたり考える力
活動を通して、新しいまたは忘れていた自分の長所に気づくことができた
活動を通して、自分の改善すべき点を知ることができた
活動を通して、喜怒哀楽を感じる事ができた
活動を通して、なんらかの新しい発想を得ることができた
いろいろな出来事を見聞きできた
活動に参加して、いろいろと考えさせられる体験ができた
コミュニケーション力：他者と関わる力
他のメンバーに対して自分の意見を伝えることができた
他のメンバーと積極的に関わることができた
自分の気持ちを伝えることができた
他のメンバーの意見に耳を傾けることができた
統率力：メンバーをまとめる力
他のメンバーに対して公平に接することができた
孤立したメンバーがいなくどうか注意を払うことができた
指示を出し、効率よくメンバーを動かすことができた
活動の目的、あるいは目標を達成させることができた
リーダーシップを発揮することができた
企画力：創造し計画し実現する力
活動に関して様々なアイデアを発想することができた
活動を実現するために適切な計画を立てられた
活動を実現する際に生じる問題点を予測しておくことができた
ある程度計画通りに活動を遂行できた
活動に関係する情報を多く集めることができた
その他
自分について考えさせられる体験ができた

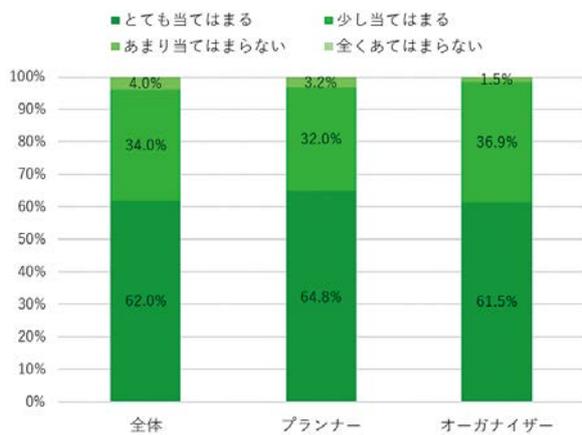


図11 T-ACT 参加時の役割と参加力の成長

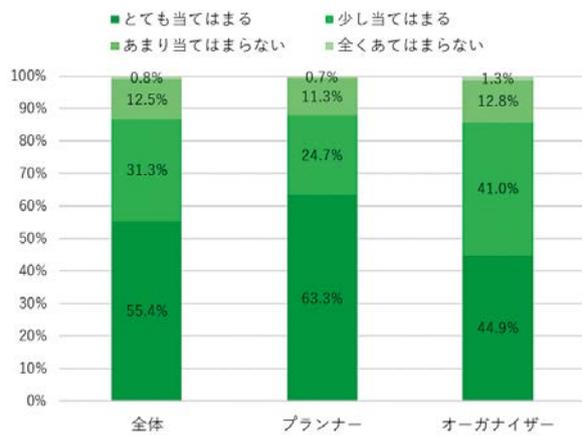


図12 T-ACT 参加時の役割と体験力の成長

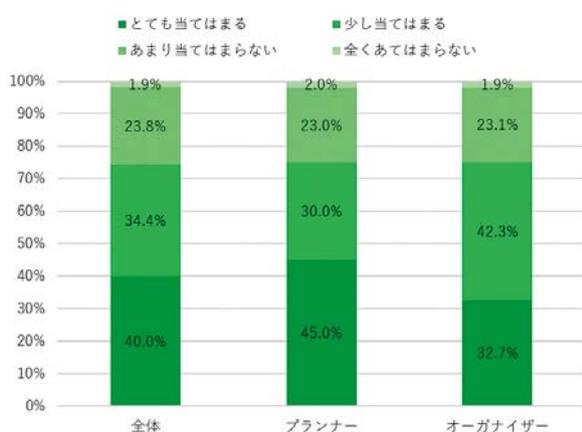


図13 T-ACT 参加時の役割とコミュニケーション力の成長

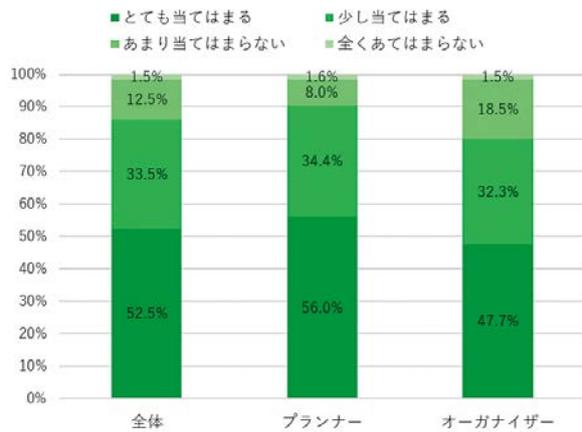


図14 T-ACT 参加時の役割と統率力の成長

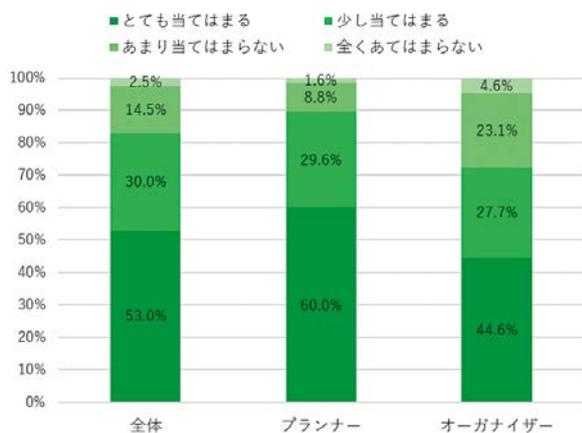


図15 T-ACT 参加時の役割と企画力の成長

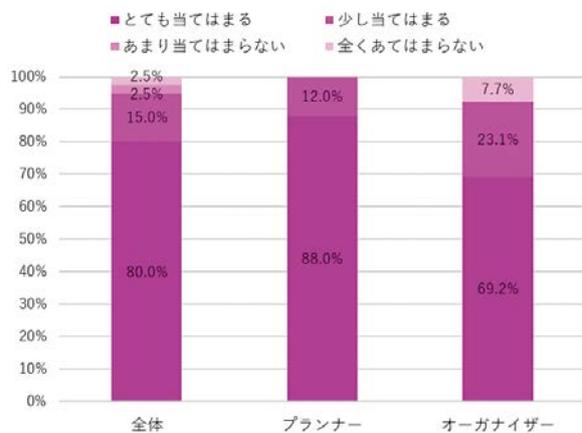


図16 T-ACT 参加時の役割自己理解の深まり

調査対象はT-ACTアクション・プランの活動を終えた学生もしくは教職員であった。活動中に表1の質問項目をどの程度感じたかを4件法で尋ねた。5つの人間力についての回答結果は図11から図15までに示した。自己理解の深まりについての項目の結果については図16に示した。2019年度の調査対象は40名であり、そのうちプランナーが25名、オーガナイザーが13名、パーティシパントが2名であった。なお、パーティシパントは2名であったため、パーティシパントのみの回答状況は示さないこととした。

全体の回答状況をみると、いずれの項目も「とても当てはまる」「少し当てはまる」と回答した割合が70%を越えており、T-ACTへの参加によって人間力の成長や自己理解の深まりを得られる学生が多いことを示している。役割別で見ると、オーガナイザーとしての参加よりもプランナーとしての参加の方が、人間力の成長や自己理解の深まりを得られている傾向があるのは例年通りである。プランナーといった、企画においてより重要な役割にいる学生の方が、総合的に見て豊かな体験ができることは、体験型の学習機会を提供しているT-ACTならではの特徴であると言える。各人間力を見てみると、より高次の力であると定義されている統率力、企画力といった能力の方が、達成が難しい傾向にあることも想定通りの結果である。ただし、例年であれば参加力、体験

力、コミュニケーション力に比較して、統率力、企画力の達成度が低いという傾向になるのであるが、2019年度はコミュニケーション力の達成が5つの人間力の中でも達成が難しいようであった。より高次と考えられている人間力についても、T-ACTに参加して役割をステップアップしていくことで、徐々に達成できるようになると言えるであろう。こういった結果は、毎年の活動報告で確認できるため、T-ACTに参加することによって、多くの学生が人間力の成長や自己理解の深まりを得られ、より企画への関わりが強い役割で参加することによって、その学びは大きくなることが示されていると言える。

本調査の今後の課題については、回答数の減少が挙げられる。現状、参加した学生に、コンサルタントから個別に協力をメールなどで依頼しており、労力の負荷や依頼漏れの問題が認められる。また、参加者がアンケートへ回答するにあたって、すぐにアンケート回答ができるのではなく、何段階かのページ遷移や入力を経たうえで、アンケート回答フォームに続くといった形で、労力がかかることも事実である。より労力がかからず、依頼漏れも防げるようなアンケート依頼の仕組みがあれば、回答数の増加にも寄与できると考えられる。また、現在はT-ACTアクション・プランのみに回答を求めているが、T-ACTの効果を考える上ではT-ACTボランティアへの参加者へもアンケートを依頼することが望ましい。

4. 2019年度のイベント開催状況

○公開シンポジウム

T-ACT推進室は、学生のさらなる活動の発展と地域参画を促進するため、筑波大学内外に向けて学生の活動とT-ACTの成果を発信し、意見交換や交流による関連組織との連携を図るイベントを開催している。それが公開シンポジウムと活動報告会である。特に公開シンポジウムにおいては、上記の目的の他にもT-ACTの支援体制を振り返り、今後の支援のあり方を考えるという目的も含まれる。

・開催概要

日時：2019年12月6日（金）14：00～17：00

場所：筑波大学東京キャンパス118講義室・120講義室

・当日の様子

2019年度の公開シンポジウムは「「やってみたい！」でつながろう ～大学間連携の新たな可能性～」というテーマのもと、学生の自主性・社会性を育てるための特色ある学生支援制度を持つ他大学との交流の機会とし、どのような連携体制を取りうるかの検討をするために千葉大学、筑波学院大学、東京工業大学、拓殖大学、明治大学、法政大学、東京大学の7校の参加・協力のもと、開催した。本学を含めた8校の教職員及び学生と当日来場者をあわせて計69名が参加した。



佐藤副学長による開会の挨拶



第1部 T-ACT 推進室員と学生による T-ACT 紹介



第2部 ポスターセッションの様子



第3部 パネル・ディスカッションの様子

シンポジウムは佐藤忍副学長（学生担当）の挨拶で始まり、第1部『学生の自主性・社会性を育くむ、特色ある学生支援』にて上記の8校による学生支援制度の紹介や在学生の体験談の発表が行われた。第2部『ポスター発表・交流－各大学の取り組み』では、各大学によるポスター展示と紹介を通じて、参加者同士が自由に意見交換をし合いながら、交流を深めることができた。第3部『「やってみたい！」を応援する、大学間連携の模索』では、各大学の支援制度に対する質疑や意見交換が積極的に行われ、今後の連携についての可能性が検討された。

学生の自主性・社会性を育てるために各大学が行っている様々な取り組みを学びあえたことが一つの連携の成果であった。また、今後の連携のあり方として、各大学の持つ学生支援のノウハウを積極的に情報交換しつつ蓄積することの必要性が指摘された。総じて、学生および教職員ともに普段はなかなか関わるのでできない他大学と交流できたことや、学生同士の連携の可能性が芽吹いたことなど、たいへん実りの多い会となった。

○活動報告会および企画表彰

2019年度の活動報告会は、T-ACT アクション表彰と合わせて上半期のみの実施となった。下半期の活動報告会は新型コロナウイルス流行の防止の観点から、実施を見合わせた。

上半期の活動報告会は9月27日（金）（14：30～18：00）に、筑波大学総合研究棟 B112講義室にて開催された。上半期活動報告会の参加者は学生が15名、教職員が10名、学外からの参加者が12名、計37名であった。例年に比較して参加人数が少なく、今後の活動報告会の意義について再考が必要であると考えられる。

T-ACT アクションへの表彰とは、活動の奨励を目的に、上半期、下半期それぞれの期間で終了した企画のうち、参加者の人間力をより高めたと評価される企画に与えられる表彰である。表彰対象としてノミネートされ、活動報告会にてプレゼンテーションを行う企画は、T-ACT 推進室員による選考で選び出された。上半期活動報告会における最終的な賞は、活動報告会でのプレゼンテーションに対する、活動報告会来場者の投票によって決定した。下半期活動報告会は実施できなかったため、下半期にノミネートされた企画には推進室会議にて決定した賞を授与した。他にも、上半期および下半期には、T-ACT で活動する学生へのご支援をくださった教職員へグッド・パートナー賞を贈呈した。また、下半期には、特に学生への教育的な配慮を行っていただいたボランティア登録団体へ感謝状を贈呈した。これらの表彰授与や感謝状贈呈について、表2および表3にまとめた。

表2 2019年度上半期に表彰された企画

賞	承認番号	企画名
最優秀賞	18048A	ツクラライブ!
優秀賞	18033A	ようこそ、ピアサポートへ! －みんなで助け合えるキャンパスを目指して－
優秀賞	18039A	君の詩的センスを魅せつけろ!
特別賞	18044A	おさんぽ chat ～がんばる、を考える～
サポーター賞	18031A	つくば ごみばこ ぶろじえくと
	19004A	つくば ごみばこ ぶろじえくと vol.2
奨励賞	18038A	人つくば ver.2～人文学系有志発表会～
奨励賞	18043A	言つくば
奨励賞	18046A	生つくば
奨励賞	18053A	超学生団体新歓-2019-
ノミネート数		9
グッド・パートナー賞	小山慎一 (芸術系)	18031A つくば ごみばこ ぶろじえくと 19004A つくば ごみばこ ぶろじえくと vol.2

表3 2019年度下半期に表彰された企画

賞	承認番号	企画名
奨励賞	18049A	ゆうゆうゆう会
奨励賞	18051A	To be myself －あなたは自分の人生をどんな『ものさし』で測りますか－
奨励賞	19001A	盆 LIVE2019
奨励賞	19003A	育児中の学生達による子ども同伴交流会: Students' BBQ with your kids.
奨励賞	19005A	つくばアスリートレストラン (TAR)
奨励賞	19010A	もっと、インプロをやろう!
奨励賞	19015P	つくば子育て外国人家族サポートプロジェクト
奨励賞	19017A	BLUE ONE BEAT! 2019
奨励賞	19022A	Higa Coffee 1.0
ノミネート 以外の特別賞	仮19019A	Run for Haagen
	19020A	Bravo! Art
ノミネート数		9
グッド・パートナー賞	宮本昌子 (人間系)	18049A ゆうゆうゆう会 19029A ゆうゆうゆう会 Vol.2
グッド・パートナー賞	深澤浩洋 (体育系)	19005A つくばアスリートレストラン (TAR)
ボランティア感謝状	茨城 YMCA	19023V 子どもと一緒におもいきり遊ぼう!YMCA ボランティア募集! 19030V 【スキーキャンプ】子どもの成長を白銀の世界で応援しよう! 等

編集後記

2019年度のT-ACT活動を振り返る前に、2020年6月時点で世界的な影響を及ぼし続けている新型コロナウイルスについて言及しておきたいと思います。いきなりネガティブな話になってしまいますが、新型コロナウイルスが猛威を振るったことによって、社会のあり方は大きな変化を余儀なくされました。

学生もその影響を大きく受けて、他者とのコミュニケーションや学習環境に劇的な変化が生じています。具体的には、他者との対面を避けざるをえなくなり、正課の活動ですら最小限の外出しか許されず、基本的にオンライン上で行わなければなりません。課外活動はそれ以上に大きく制限されており、学生が自分たちの「やりたい」を実現できない状況が強いられています。

2019年度のT-ACTの活動に対する影響は僅かですが、それでも2019年度末（2020年2月・3月）から、T-ACTの活動も自粛を余儀なくされています。2019年度から2020年度にかけて、自分たちの「やりたいこと」が「やりたいタイミング」で「やりたい場所」でできるという、今までの“普通”が様変わりしてしまったと言えます。

2019年度のT-ACT活動の傾向としては「学生同士や地域社会とのつながりを大切にする活動」や「学生である自分を知り直すような活動」が多かったように思います。人と人とのつながりを意識すること。そのつながりの中で学生たる自分に何ができ、今後をどう生きていくかを問うこと。「やってみたい」を通じて、そういったことを感じ、考えた経験は、“普通”が激変しつつある今だからこそ一層輝く体験であったのではないのでしょうか。2020年度6月時点で、そうした志向性をもった活動が新しい“普通”に適応しようと変化しながら続いてくれています。「やってみたい」を単に実行するだけでなく、その活動の体験が、「社会の中でどう生きるのか？」という個々人の問いに示唆を与えてくれるものであるよう、引き続き学生たちのサポートを続けていくことがT-ACTの使命でありましょう。

T-ACT コンサルタント
黒田卓哉

活動報告書をお読みいただき、ありがとうございました。2019年度も、魅力的で素敵な活動が多く、編集作業で改めて学生の楽しい様子を確認することができました。T-ACTでの活動が学生の充実した学生生活の一部になってくれていたら嬉しいです。

2019年度のボランティア活動については、これまでと同様に、活動を通じて社会との関わりを学べたことと思います。例年、参加登録を行った後の学生からT-ACTへの相談は多くありません。その要因に、ボランティア登録団体と学生の繋がりが強いという事が考えられます。ボランティア登録団体に活動の場を提供してもらい、活動中の疑問や相談に乗ってもらうことで、継続的な活動や同団体の他の活動に繋がります。その結果、ボランティア登録団体と学生の絆ができることがT-ACTへ頼らず、社会との関わりを学びながらより良い活動へと繋がったのではないのでしょうか。

また、学生の活動が大学内に留まらず、地域に受け入れていただくことは、学生だけの努力ではどうにもなりません。ボランティア登録団体の皆様には、いつも広い心で受け入れていただいたこと、深く御礼申し上げます。

学生には、授業やアルバイトに疲れていても、好きなことができるT-ACTの活動が思い出や将来の糧になってくれることを願っています。引き続き、T-ACTフォーラムは、学生の皆さんの心に寄り添っていける場所であることを目指し、サポートができればと思っています。

T-ACT ボランティアアドバイザー
飯島由香

2019 年度 T-ACT 推進室員一覧

2020 年度 T-ACT 推進室員一覧

2019 年度 T-ACT 推進室員一覧				2020 年度 T-ACT 推進室員一覧			
所属	職名	所属	職名	所属	職名	所属	職名
室長 加賀 信広 人文社会系	教授 学生生活支援室長	室長 加賀 信広 人文社会系	教授 学生生活支援室長	室長 加賀 信広 人文社会系	教授 学生生活支援室長	室長 加賀 信広 人文社会系	教授 学生生活支援室長
副室長 杉江 征 人間系	教授	副室長 杉江 征 人間系	教授	副室長 杉江 征 人間系	教授	副室長 杉江 征 人間系	教授
室員 土井 裕人 人文社会系	助教	室員 木村 周平 人文社会系	准教授	室員 木村 周平 人文社会系	准教授	室員 木村 周平 人文社会系	准教授
大友 貴史 人文社会系	准教授	星野 豊 人文社会系	准教授	星野 豊 人文社会系	准教授	星野 豊 人文社会系	准教授
松枝 未遠 計算科学研究センター	助教	石川 香 生命環境系	助教	石川 香 生命環境系	助教	石川 香 生命環境系	助教
中内 靖 システム情報系	教授	中内 靖 システム情報系	教授	中内 靖 システム情報系	教授	中内 靖 システム情報系	教授
後藤 嘉宏 図書館情報系	教授	後藤 嘉宏 図書館情報系	教授	後藤 嘉宏 図書館情報系	教授	後藤 嘉宏 図書館情報系	教授
三輪 佳宏 医学医療系	講師	村田 知弥 医学医療系	助教	村田 知弥 医学医療系	助教	村田 知弥 医学医療系	助教
李 燦雨 体育系	助教	坂本 拓弥 体育系	助教	坂本 拓弥 体育系	助教	坂本 拓弥 体育系	助教
坂本 拓弥 体育系	助教	上浦 佑太 芸術系	助教	上浦 佑太 芸術系	助教	上浦 佑太 芸術系	助教
原 忠信 芸術系	准教授	田附あえか 人間系	助教	田附あえか 人間系	助教	田附あえか 人間系	助教
田附あえか 人間系	助教	青柳 悦子 人文社会系	教授	青柳 悦子 人文社会系	教授	青柳 悦子 人文社会系	教授
田中 博 計算科学研究センター	教授	土井 裕人 人文社会系	助教	土井 裕人 人文社会系	助教	土井 裕人 人文社会系	助教
青柳 悦子 人文社会系	教授	唐木 清志 人間系	教授	唐木 清志 人間系	教授	唐木 清志 人間系	教授
唐木 清志 人間系	教授	慶野 遥香 人間系	助教	慶野 遥香 人間系	助教	慶野 遥香 人間系	助教
慶野 遥香 人間系	助教	田中 博 計算科学研究センター	教授	田中 博 計算科学研究センター	教授	田中 博 計算科学研究センター	教授
黒田 卓哉 学生生活支援室	助教 T-ACT 専任教員	黒田 卓哉 学生生活支援室	助教 T-ACT 専任教員	黒田 卓哉 学生生活支援室	助教 T-ACT 専任教員	黒田 卓哉 学生生活支援室	助教 T-ACT 専任教員
葛山 清光 学生部学生生活課	課長	葛山 清光 学生部学生生活課	課長	葛山 清光 学生部学生生活課	課長	葛山 清光 学生部学生生活課	課長

つくばアクションプロジェクト活動報告書

2020 年 8 月発行

筑波大学 T-ACT 推進室
〒305-8577 つくば市天王台 1-1-1
TEL 029 (853) 2222



第2回あおぞら絵画遠足 ~日本を満ちに出かけよう~



「チャリティラン」
障がいのある人と共に走ろう!



つくば
ランウェイ
プロジェクト



塾に行きたくても行けない
子どもたちのための無料塾



Hiba Coffee 1.0



「子ども遊ぶボランティア」
お休みの日に子どもと
関わりながら自分を磨こう!



もっと、インプロをやるぞ!



BLUE ONE BEAT! 2019



水戸市チャリティ・サ
ル原始人事業
チャリティ原



Bravo! Art